

茅ヶ崎城址埋蔵文化財本発掘調査報告

－（仮称）茅ヶ崎城址公園整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書－

2006

横浜市環境創造局
財団法人横浜市ふるさと歴史財団

例 言

1 本書は、平成15年度および平成17年度に横浜市環境創造局（平成15年度は緑政局）が実施した（仮称）茅ヶ崎城址公園整備工事伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書である。

2 平成15年度発掘調査事業は平成15年6月30日より平成15年9月30日まで実施し、平成17年度発掘調査事業は平成17年9月1日より平成17年10月31日まで実施した。また、資料整理及び報告事業は平成18年1月30日より平成18年3月30日まで実施し、本報告書がその成果物である。

3 本書の遺構・遺物挿図の指示は下記の通りである。

[挿図縮尺]

遺 構	堅穴住居址 1：80	堅穴状遺構 1：80	土塁・空堀 1：80（1：100）
	溝状遺構 1：80	土 坑 1：40	その他 スケールにて表示
遺 物	実測土器 1：4	土器拓影 1：3（1：4）	石 器 1：4

[遺構挿図]

◎挿図中の方位はすべて真北を示す。

◎水系レベルは標高を示す。水系レベルは標高を示す。

◎堅穴住居址などのピットの深さは、床面からの換算値として図中に表記した。

◎その他の遺構内のピットの深さは、周辺の遺構確認面からの換算値として図中に表記した。

◎遺構内・その他、特徴のある部分についてはトーンを用いて表現した。

[遺物挿図]

◎出土遺物番号は3桁の数字をもって表わし、その頭に実測対象土器・拓本土器はPを、石器にはSを付して区別した。

4 本文中に記載している遺構の記述のなかで、（ ）付きの数値については、現存する大きさを表わしている。

5 本文中に記載している遺物の記述のなかで、（ ）付きの数値については、復原推定径ないしは、現存する大きさを表わしている。

6 石器の石質同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

8 遺物の整理および図版の作成作業は埋蔵文化財センターにおいて鹿島・鈴木が行ない、執筆・編集作業は鹿島が中心に行なった。

11 遺物の写真撮影は、鹿島・武田が行なった。

12 調査組織

調査担当 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 理事長 高村 直助

(平成17年6月30日まで平野 邦雄)

埋蔵文化財センター所長 坂上 克弘 (平成17年3月31日まで遠藤 滋久)

調査第二係長 鈴木 重信 調査第二係員 鹿島 保宏・橋本 昌幸

調査協力者

[発掘調査] 石船 康晴 (國學院大学)・川村 篤史 (鶴見大学)・佐藤 文子

(鶴見大学大学院)・武田 芳雅(國學院大学大学院)・松澤 弘三
(鶴見大学)・山本 裕志

[遺物整理] 荒井 サチ子・石船 康晴(國學院大学)・今泉 静子・栗原 江
美子・越 喜久子・斎藤 三千代・武田 芳雅(國學院大学大学
院)・長谷川 孝子・山宮 美穂

13 本遺跡の出土品、記録図面および写真等は財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。

14 発掘調査および出土品の整理作業に際しては、次の諸氏・諸機関にご助言・ご協力を賜った。ここに芳名を記し、深謝の意を表する(敬省略・五十音順)。

株式会社横浜技術コンサルタント・呉地 英夫・河野 喜映・皆川 貴史・有限会社アーク・フィールド
ドワークシステム

目 次

例 言	i
目 次	iii
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査経過	3
(1) 平成15年度本発掘調査	3
(2) 平成17年度本発掘調査	3
(3) 平成17年度整理報告作業	4
第3章 発見された遺構と遺物	5
(1) 層序	5
(2) 平成15年度調査	5
〈原始・古代の遺構〉	6
5号土坑	6
2号住居址	7
1号竪穴状遺構	9
1号住居址	10
〈中世以降の遺構〉	14
溝状遺構	14
・ 1号溝状遺構	14
・ 2号溝状遺構	14
土 坑	16
・ 1号土坑	16
・ 2号土坑	16
・ 3号土坑	17
・ 4号土坑	17
土 塁	19
道路状遺構	22
硬化面	23
空 堀	24
ピット群	27
遺構外出土遺物	28
(3) 平成17年度調査	31
〈A地区の遺構〉	32
土 坑	32
・ 7号土坑	32

・ 6号土坑	33
・ 8号土坑	34
井戸址	35
溝状遺構	36
・ 1・2号溝状遺構	36
・ 3号溝状遺構	38
空堀	38
ピット群	39
遺構外出土遺物	39
〈B地区の遺構〉	39
空堀	39
〈C地区の遺構〉	41
3号住居址	41
空堀	43
第4章 まとめ	45
写 真	47

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	1	第19図	硬化面	23
第2図	調査区相関図	4	第20図	空堀	25
第3図	土層模式図	5	第21図	ピット群	26
第4図	平成15年度調査区遺構分布図	6	第22図	ピット群出土遺物	27
第5図	5号土坑	7	第23図	遺構外出土遺物1	29
第6図	2号住居址	8	第24図	遺構外出土遺物2	31
第7図	1号竪穴状遺構	9	第25図	平成17年度調査区遺構分布図	32
第8図	1号住居址	11	第26図	6・7号土坑	33
第9図	1号住居址出土遺物	13	第27図	8号土坑	34
第10図	1号溝状遺構	14	第28図	井戸址	35
第11図	2号溝状遺構	15	第29図	1・2号溝状遺構	37
第12図	1号土坑	16	第30図	3号溝状遺構	38
第13図	2号土坑	17	第31図	A区検出空堀	38
第14図	3号土坑	17	第32図	ピット群	39
第15図	4号土坑	18	第33図	遺構外出土遺物	39
第16図	土 壘	20	第34図	B区検出空堀	40
第17図	土壘出土遺物	21	第35図	3号住居址	42
第18図	道路状遺構	22	第36図	C区検出空堀	44

写真目次

扉写真	遺構精査風景	47	写真25	土壘(南西より)	52
写真1	遺跡遠景	49	写真26	土壘硬化面	52
写真2	調査前全景(南西より)	49	写真27	土壘北区内硬化面	52
写真3	調査前全景(北西より)	49	写真28	道路状遺構(南西より)	52
写真4	表土除去作業風景	49	写真29	D-2グリッド硬化面(南より)	52
写真5	8号土坑(西より)	49	写真30	D-3グリッド硬化面	52
写真6	2号住居址(南より)	49	写真31	下部遺構確認作業風景	52
写真7	2号住居址炉址(南東より)	49	写真32	空堀掘削風景	52
写真8	1号竪穴状遺構(西より)	49	写真33	空堀(西より)	53
写真9	1号住居址(南より)	50	写真34	空堀(東より)	53
写真10	1号住居址カマド(検出状況)	50	写真35	調査区全景(南より)	53
写真11	1号住居址カマド調査風景	50	写真36	調査区全景(北より)	53
写真12	1号住居址カマド(完掘状況)	50	写真37	下部調査面全景(南より)	53
写真13	1・2号溝状遺構調査風景(北より)	50	写真38	下部調査面全景(北より)	53
写真14	1・2号溝状遺構(北より)	50	写真39	平成15年度出土遺物保管状況	53
写真15	1号溝状遺構(北より)	50	写真40	見学会風景	53
写真16	2号溝状遺構(西より)	50	写真41	調査前A区全景(西南より)	54
写真17	1号土坑(北西より)	51	写真42	調査前A区全景	54
写真18	2号土坑(南西より)	51	写真43	測量作業風景	54
写真19	3号土坑(北より)	51	写真44	表土除去作業風景	54
写真20	遺構掘削作業風景	51	写真45	表土除去および遺構確認作業風景	54
写真21	4号土坑調査風景(北より)	51	写真46	6・7号土坑(東より)	54
写真22	4号土坑(北より)	51	写真47	8号土坑(北より)	54
写真23	遺構精査状況	51	写真48	井戸址(西より)	54
写真24	土壘全景(南より)	51	写真49	井戸址(東より)	55

写真50	溝状遺構（東より）	55	写真68	C区全景（北より）	57
写真51	3号溝状遺構（北より）	55	写真69	C区全景（東より）	57
写真52	空堀（北より）	55	写真70	測量作業風景	57
写真53	遺構掘削風景	55	写真71	埋め戻し作業風景	57
写真54	A区全景（西より）	55	写真72	平成17年度出土遺物保管状況	57
写真55	A区全景（北東より）	55	写真73	出土遺物1（平成15年度出土遺物1）	58
写真56	B区調査前全景（西より）	55	写真74	出土遺物2（平成15年度出土遺物2）	59
写真57	B区調査前全景	56	写真75	出土遺物3（平成15年度出土遺物3）	60
写真58	B区空堀（北西より）	56	写真76	出土遺物4（平成15年度出土遺物4）	61
写真59	B区空堀内掘り込み	56	写真77	出土遺物5（平成15年度出土遺物5）	62
写真60	B区空堀（土塁より）	56	写真78	出土遺物6（平成15年度出土遺物6）	63
写真61	B区空堀（東より）	56	写真79	出土遺物7（平成15年度出土遺物7）	64
写真62	B区全景（西より）	56	写真80	出土遺物8（平成15年度出土遺物8）	65
写真63	測量作業風景	56	写真81	出土遺物9（平成15年度出土遺物9）	66
写真64	C区作業前全景	56	写真82	出土遺物10（平成15年度出土遺物10）	67
写真65	C区測量作業風景	57	写真83	出土遺物11（平成15年度出土遺物11）	68
写真66	3号住居址（北より）	57	写真84	出土遺物12（平成17年度出土遺物1）	68
写真67	3号住居址（北より）	57	写真85	出土遺物13（平成17年度出土遺物2）	69

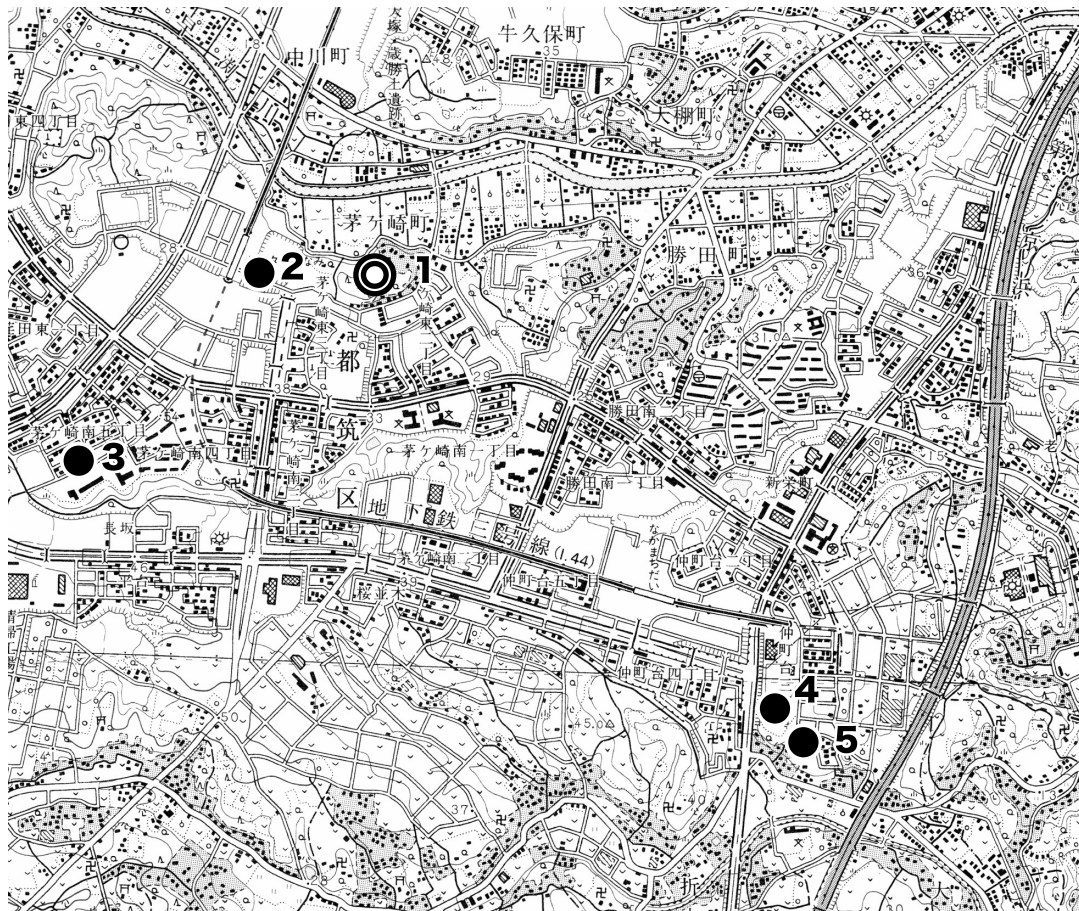
第1章 遺跡の位置と環境

遺跡は、横浜市の北部域にあたる都筑区茅ヶ崎東二丁目25に位置し、『横浜市遺跡遺跡地図』において都筑区No168（神奈川県遺跡番号は都筑区No153）と記載されている。遺跡の絶対位置は、北緯35度32分40秒、東経139度34分40秒（世界測地系）となっている。

遺跡の南側には横浜市営地下鉄高速3号線が走っており、遺跡は同路線のセンター中央駅の東側約0.4kmに位置している。また、遺跡の北側には、同地域を西から東方向に流れている鶴見川の支流の早瀬川があり、遺跡の眼下にはこの川によって開析された沖積地が広がっている。この辺りは、地形的には八王子方面から南北方向に長く連なっている多摩丘陵の南東端付近にあたっている。本遺跡は、この丘陵が開析され樹枝状を呈したものの一つ、沖積地に北東に迫り出した台地の先端部を利用して造られている。

本遺跡の周辺は、昭和40年代から数多くの発掘調査が実施されており、市内でも1、2を争うほど遺跡が集中している場所である。しかしながら、中世遺跡についてはその発掘調査事例はさほど多くはない。

発掘調査が実施され、その内容が分かっているものでは、本遺跡から約2.1km南東方向に位置する上の



1 茅ヶ崎城址 2 三角山遺跡 3 茅ヶ崎富士塚遺跡 4 上台の山遺跡 5 上の山遺跡

第1図 周辺の遺跡（縮尺 1/25,000）

山遺跡があげられる。上の山遺跡では、14～15世紀まで約150年以上の長期間にわたり造営されていた共同墓地が調査されている。この墓地からは多量の板碑に混じって握り飯や古銭などの埋納品も出土している。上の山遺跡のすぐそばには、12世紀末から13世紀初頭にかけての方形環濠墓が調査された上台の山遺跡がある。この方形環濠墓からは、入り口部分と推測される一部を除き方形に区画された範囲の中に、3か所4個体の蔵骨器が検出されている。また、本遺跡から約0.3km西側、現在駅前バスターミナルがあるあたりに位置していた三角山遺跡があげられる。この遺跡では、14世紀前半代の常滑製の蔵骨器や板碑を伴う塚が調査されている。さらに、この遺跡から南西0.9kmほどには茅ヶ崎富士塚遺跡が存在していた。この遺跡では、写経石を伴う中世の経塚が調査されているが、この経塚は近世以降において富士塚に転用されている。

さらに城址関連に絞ってみると、鶴見川流域まで視点を広げれば、小机城址、榎下城址、荏田城址、亀之子山陣城など著名な城址をあげることができる。

なお、中世以外の遺跡については、枚挙にいとまがないので省略するが、早渕川の対岸約0.6 kmには弥生時代中期の環濠集落とその墓域が調査された国指定史跡大塚・歳勝土遺跡が存在している。

また、茅ヶ崎城址については、過去に数回の調査を実施しており、過去に調査した分については、既に報告書として刊行されている。

参考文献

- 新人物往来 1980 『日本城郭体系第6巻 千葉・神奈川』
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡概要』
- 横浜市埋蔵文化財センター 1991 『茅ヶ崎城』
- 横浜市埋蔵文化財センター 1992 『上の山遺跡』
- 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 1994 『茅ヶ崎城Ⅱ』
- 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団 2000 『茅ヶ崎城Ⅲ』
- 財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 2002 『上台の山遺跡』
- 横浜市教育委員会 2004 『横浜市文化財地図』

第2章 調査経過

(1) 平成15年度本発掘調査

調査にあたってはまず、調査予定地を網羅すべく、一辺8mの方眼をかけ調査用のグリッドとした。このグリッドは、北西隅を起点として、東西方向にアルファベット、南北方向に数字を付して呼称することとした。また、このグリッドは調査の便宜上さらに一辺2mの小グリッドに分割し、先のグリッドと同様に北西より東西方向にアルファベット、南北方向に1～4のグリッド名を冠し、区別を行なった。

なお、このグリッド番号(大グリッド)は平成15年調査時においては、北郭部分の調査はこのエリア以外は行なわないということであったため、このように設定したが、のちの平成17年度調査時にさらに調査を実施しているため、本報告書に記載しているグリッドよりアルファベット方向の起点が1区画分東側にずれていた。このため、本報告書刊行に際しては、1区画分を西側に加え挿図に記載しているような呼称に変更し統一している。

現地調査は平成15年7月28日より実施した。同日より準備工を実施し、同月31日までに調査区を設定し調査に臨んだ。表土除去作業は8月4日から開始した。また、表土除去作業と並行して遺構確認作業を行ない、同月6日より検出された遺構の調査にとりかかった。調査区の南側ではローム層上において遺構確認を行なったが、調査区は北側に緩やかに傾斜していたため、北側においては、縄文時代遺物包含層上にて遺構確認を行なった。この面においては、土塁や空堀などいくつかの中世遺構が検出された。これらの遺構調査中に、下部にそれ以前の遺構が存在していることが判明した。そのため、縄文時代遺物包含層が厚く堆積している北側約半分については、中世遺構の調査に目処がついた段階でさらに遺構が検出できる面まで重機にて掘削を行なった。その結果、2軒竪穴住居址と1基の竪穴状遺構、さらに、上面において確認できなかった中世以降のピットを含むピット群が検出された。これらすべての遺構の調査を終了した9月3日をもって現地調査は終了し(埋戻しは行なわず)、その後財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいて概報作成を行なった。また、調査期間中には緑政局担当者の立ち会いのもとで、歴史ならびに地層の授業の一環で地域の小学校(横浜市立茅ヶ崎東小学校3年生・163名、6年生39名)の見学会を行なった。

(2) 平成17年度本発掘調査

今回の調査地点はA～C区の3地点となっていた。このうち、A・B区の2つの調査区は隣接しているほか、前回の調査地区に接しているため、基本的には前回の調査用グリッドを踏襲し使用している。グリッド呼称については、前節で記載している通り、調査時には仮称を付けて調査を行ない、整理報告段階で修正を行なっている。このため、概報で記載しているグリッドとは番号が異なっている。

また、C区については調査区も狭く、A・B両地区からは離れた場所に位置している。このため、あえて調査用グリッドは使用せずに、掘削エリアの測量杭を用いて調査を行なっている。

現地調査は平成17年9月9日より行なった。同日より現場事務所の設置、草刈り等の準備工を実施し、12日までにすべての調査区の位置出しおよび設定を行なった。翌13日より一部の表土除去作業を開始したが、本格的な掘削調査は9月20日からとなっている。表土除去作業と並行し、遺構確認作業を実施し



第2図 調査区相関図（縮尺 1/2,000）

た。表土除去作業では、空堀など予想される遺構の性格上、掘削（排土）土量が多いことは事前にある程度は覚悟していた。しかし、実際に掘削するにあたり、調査エリアが狭いことに加え、掘削深度が深いため、中型のパワーショベルでは思うように掘り進めることはできなかった。また、排土置き場を考えながら掘削することや、排土置き場の養生など様々な要因が重なり、思いのほか表土除去作業は進まなかった。このため、十分な遺構調査期間を確保するため、表土除去・遺構確認作業を行ないながら、別地点の遺構掘削調査を並行して実施する方針に切り替えて調査を行なうこととした。

全体の流れとしては、概ねA、B、C区の順に調査を行ない、10月7日にはC区の竪穴住居址の調査を終了しさせ、同日横浜市環境創造局（緑事業課）、横浜市教育委員会（文化財課）ならびに財団法人横浜市ふるさと歴史財団財団の各職員により、調査終了の立ち会いを行なった。その後、各地点の埋戻しを実施し、現地調査は10月14日をもって終了し、その後、財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいて概要報告書の作成を行なった。

（3）平成17年度整理報告作業

平成17年度本発掘調査終了後、横浜市環境事業局・横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団と調整を行なった結果、2年度にわたって実施した本発掘調査の整理報告業務については、平成17年度中に行なうこととなった。整理報告作業は、平成18年1月30日より横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいて実施した。

出土遺物の洗浄、注記（ネーム入れ）、復元（組み立て）作業などの基礎整理および、遺物の実測作業、遺構・遺物のトレース作業を行ない、原稿執筆を経た後、レイアウト作業を行なって、平成18年3月30日に本書を刊行し今回の整備事業にかかる埋蔵文化財事業を完結した。

第3章 発見された遺構と遺物

(1) 層 序

遺跡を覆う堆積土については、遺跡の性格が中世城郭ということもあり、堆積土の上半部は中世以降の堆積土となっている。また、近世より農作物の作成など土地利用されていた関係上、一般的に旧表土と呼ばれる耕作・開墾土が厚く覆っている。中世遺物包含層が存在することは確認されているが、今回の調査区内では近世の耕作などの土地利用によって削平されているために大半は遺構の堆積土となっている。この近世の土地利用のための削平面と同じレベルにおいて宝永火山灰層の薄い堆積が確認されている。万遍に堆積しているわけではなく、部分的に溜まり状を呈していることから、降灰したものを除去したためにできた層と考えることもできる。斜面下側においては近世の削平がローム面まで及んでおらず、弥生・古墳時代遺物包含層が残存していた。この辺りに位置する中世遺構はこの面の上面を整備した上に構築されている。また、縄文時代遺物包含層も比較的厚く残存しており、原始・古代の遺構はこの層を深く掘り込んで構築されている。本遺跡がのる台地は、多摩丘陵の南端部にあたり、この辺りの基盤層は新規ローム層で、いわゆる立川ローム層となっており、空堀の底面など深い部分では一部武蔵のローム層と考えられるものも確認されている。

I a層：表土層。耕作土のほか、ゴミなどの埋戻し土および、A区においては平成15年度の調査によって生じた排土層などがこれにあたる。

I b層：旧表土層。近世以降の耕作土や堆積土層。細粒で、一部ではロームブロックを混入している部分も確認されている。また、この層の下面に宝永火山灰層が部分的に確認されている。

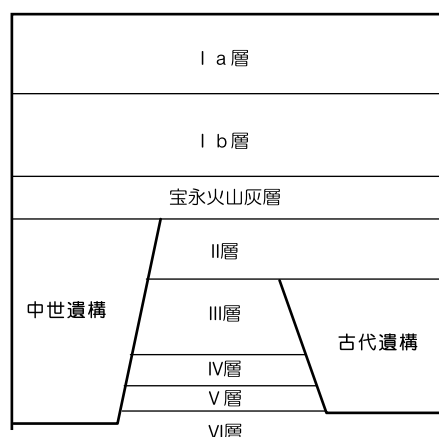
II層：黒褐色土。赤色スコリア粒を含み、粗粒のローム粒を少量含む。粘性やや帯び、締まりがある。また、調査区北境では、赤色スコリア粒を多含し、2層の分層も可能であった。いわゆる弥生・古墳時代遺物包含層。

III層：暗褐色土。赤色スコリア粒を少量含み、粘性きわめて強く、締まりも強い。また、この層は乾燥すると非常に堅緻になる。いわゆる縄文時代遺物包含層。

IV層：明褐色土。ローム漸移層。他の層に比べ層厚は薄く、斜面上方では存在していない。

V層：褐色土。ソフトローム層（以下立川ローム層）。

VI層：褐色土。ハードローム層。

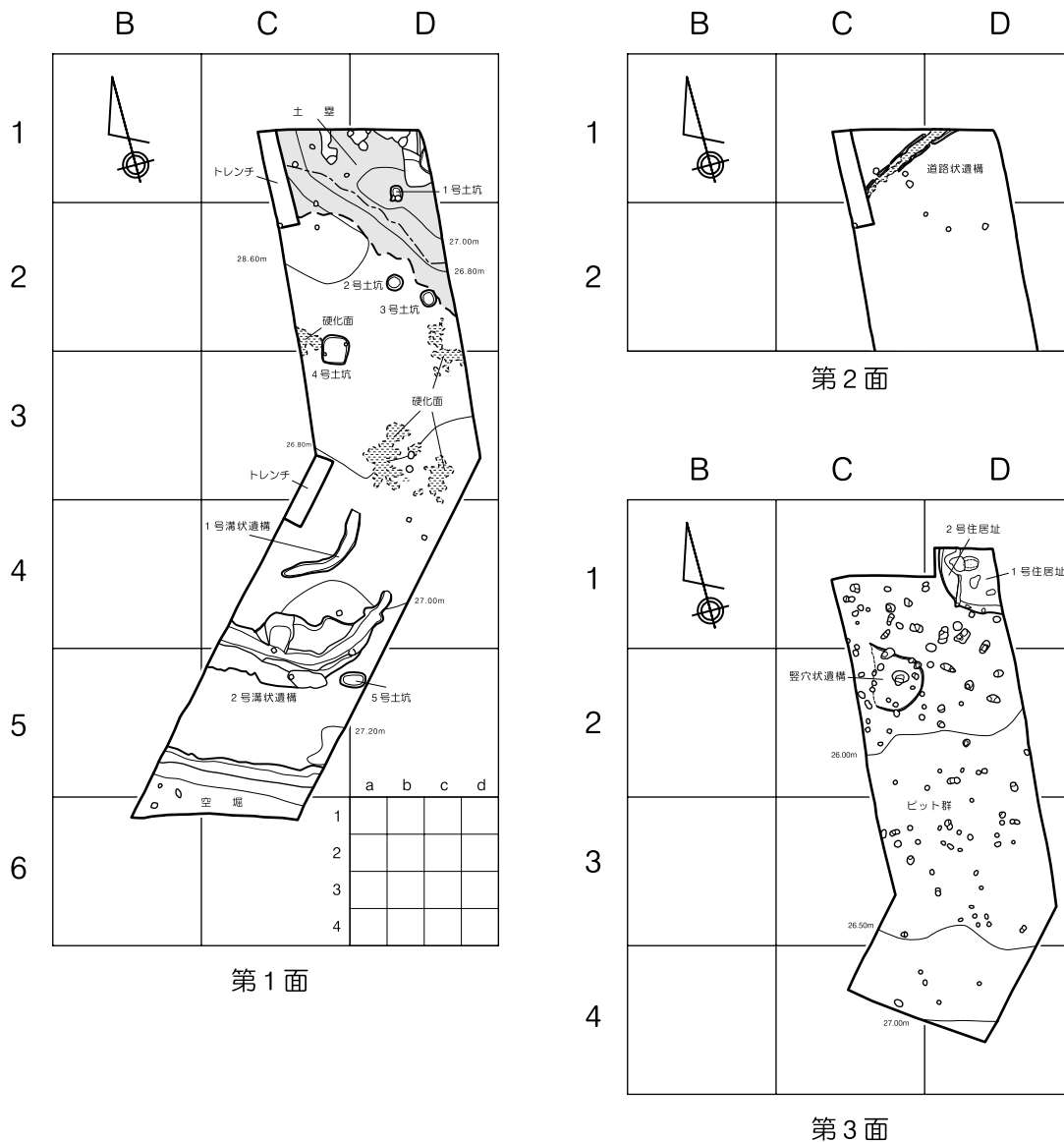


第3図 土層模式図

(2) 平成15年度調査

調査の結果、遺構面が少なくとも3面が存在していることが判明した。最も上面は、土塁や空堀などの城址関連遺構を確認することができる中世遺構面で、2つめは土塁の下部などで確認された、いわゆる

る硬化面や道路状遺構を有する面である。さらに調査区の北側において、縄文時代遺物包含層（標準堆積層Ⅲ層）の上面に3つめとなる弥生時代～平安時代の遺構面が存在している。これらの遺構面から検出された遺構を以下に掲載する。



第4図 平成15年度調査区遺構分布図（縮尺 1/400）

〈原始・古代の遺構〉

5号土坑（第5図）

本址は、調査区の南東寄りのC～D-5グリッド、2号溝状遺構の東側の北側、斜面が傾斜しはじめる付近において検出された。

開口部で1.35×0.83m、坑底で1.07×0.52mを測る、平面形状が楕円形を呈する掘り込みで、V層において確認された。現存する掘り込みは非常に浅く、最大でも0.22mを測る程度である。

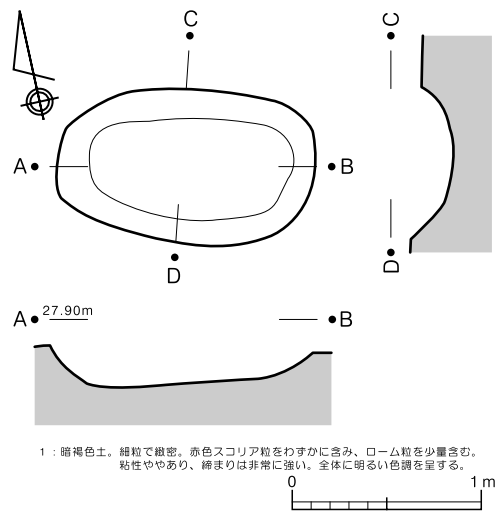
掘り込み内には、色調の暗い標準堆積層Ⅲ相当の暗褐色土が堆積していた。人為的な埋戻しなどはなく、いずれも自然堆積の様相を呈している。

周壁はV層中に構築されている。上方は後世の造成によってほとんど失われており、遺存状態はきわめて悪い。やや緩やかに掘り込まれ、底面へと緩やかに移行している。

底面も周壁同様にV層中に構築される。やや凹凸を呈しているものの、ほぼ平坦に造られている。やはり上面からの影響を受け遺存状態は悪い。底面施設は確認されていない。

出土遺物は皆無である。

遺構の性格は、確認面からの掘り込みが浅いことから推測していわゆる陥し穴として使用されたものではなく別の用途で使用されていたものと考えられる。この時期の遺構は、本址のみの検出でその他は確認されていない。



第5図 5号土坑

2号住居址（第6図）

本址は、調査区の北東隅のD-1グリッドに位置する。東側で1号住居址と重複して検出された。遺構確認時に、その大部分が調査区外に延びていることが判明し、公園整備事業で失われてしまう北側のみ拡張し調査を行なった。ただし、この拡張については公道への土砂の流出等を考え、最小限度の拡張にとどまっている。

検出部から推測して、平面形状は楕円形を呈するものと考えられる。比較的大型の住居址で、検出部分で最大3.56×3.60mとなっており、竪穴住居址の約1/4にあたる部分の検出となっている。

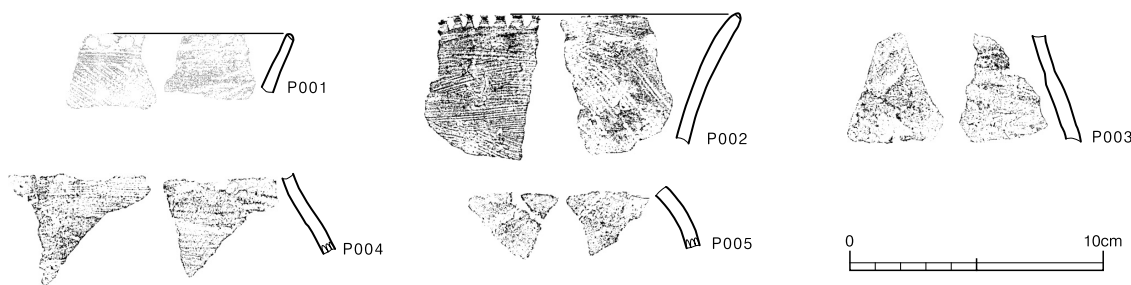
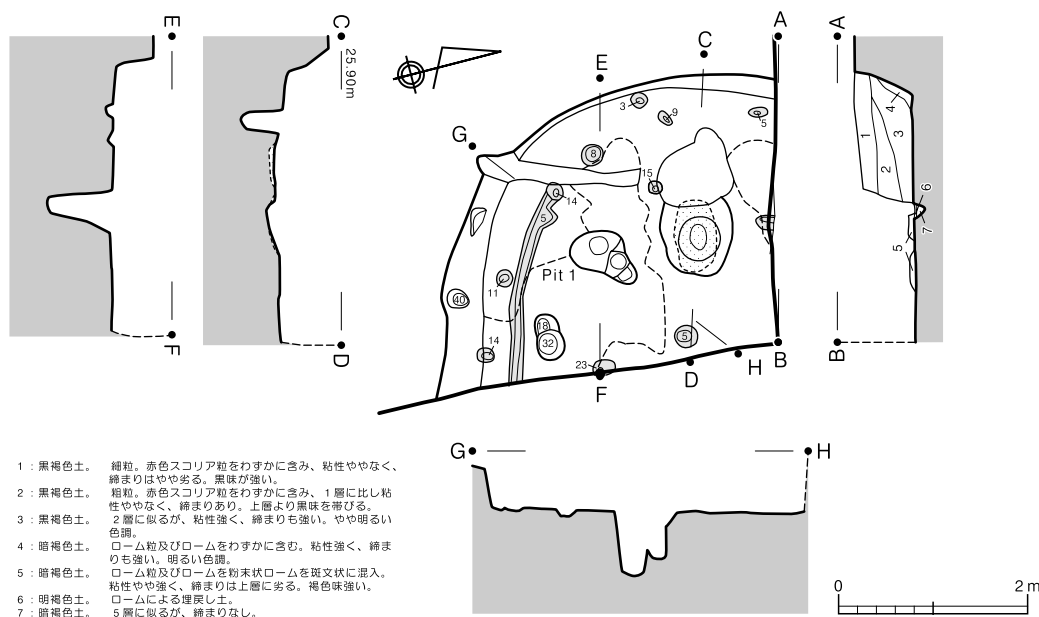
堆積土は、標準堆積層のII層相当の黒褐色土で、人為的な埋戻し土などは確認されず、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

周壁はII層から掘り込まれている。周壁の下方ではV層に達しており、やや上方が開き気味に立ち上がって造られている。掘り込みが深いことに加え、後世の攪乱を受けていないため遺存状態は良好である。

周壁下には壁溝は確認されなかったが、壁面からおよそ40cm離れた部分に幅15cm、深さ5cmほどの壁溝が巡らされていることが判明した。この壁溝はロームによって完全に埋戻しがなされていることから古い段階のものである。

床面はV層中に構築される。直床で、荒掘ののち上面を水平に設えている。非常に堅緻で、壁面同様遺存状態は良好である。

床面にはピットがいくつか確認されている。このうち、ピット1はその規模および占地位置からみて支柱をなすものと考えられる。このピットの内側には、上面をロームによって貼床がなされている古い段階のピットが存在していた。貼床が施された古い段階の壁溝が確認されていることとあわせみて、本址は住居の拡張を行なっているものと考えられる。またこれ以外にも床が貼られていたピットがいくつか確認されている（図トーン部分）。



第6図 2号住居址

このピットのほかにも、周壁において床面部分にまでは達していない浅いピットが確認されている。このピットの堆積土も標準堆積土のⅡ層相当の黒褐色土で、この遺構に伴う可能性が高く、あるいは壁柱穴様の性格をもつものかと考えられる。

主柱穴の北側には径90×80cmほどの平面形状が楕円形を呈する炉址が検出された。掘り込み内は被熱によって著しく赤化しており、西側部分は1号住居址のカマドの燃焼部と重複しているため、特に著しい。

出土遺物は2号住居址とほぼ重複しているため非常に少ない。図示できたものはいずれもすべて甕型土器の破片となっている。P001は覆土出土の口縁部破片で、厚さは0.6cmを測る。口唇部に棒状工具によるキザミ目を入れ、外面は口縁部が斜め方向のハケ目ののち横方向のハケ目を入れ、内面には横ナデ調整を施す。P002は床下から出土した口縁部破片で、厚さは0.7cmを測る。口唇部にヘラ状工具によるキザミ目を入れ、内外面とも横から斜め方向のハケ目およびナデ調整を施す。P003は覆土出土の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面がヘラナデ、内面がナデ調整を施す。

P004は床面直上から出土した胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面が斜め方向のハケ目を施し、内面には横方向のヘラナデを施す。P005も床面直上から出土した胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。内外面ともにナデ調整が施される。

遺構の新旧関係については、堆積土の状況などから本址が1号住居址に先行して構築されたものと考ええる。また、本址の構築時期は出土遺物から弥生時代後期久ヶ原期になるものと考ええる。

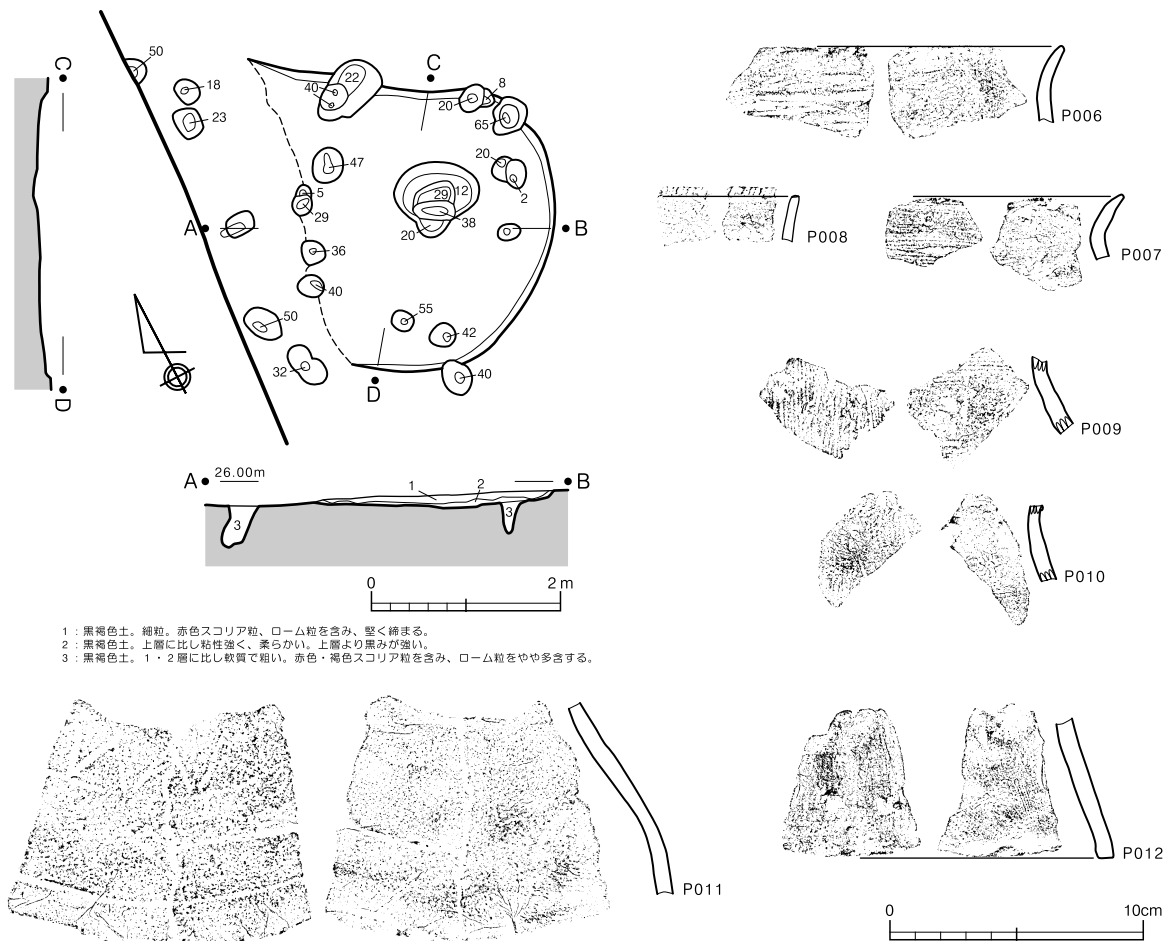
1号竪穴状遺構（第7図）

本址は、調査区の北寄りのC-1～2グリッド、土塁の南西に位置している。Ⅲ層中において確認され、現存部での規模は3.50×3.00mを測り、西側の立ち上がりは確認時に失ってしまったが、平面形状は不整の楕円形を呈するものと思われる。

堆積土は標準堆積層のⅡ層相当の黒褐色土で、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

周壁はおよび底面はⅢ層中に構築され、底面は平坦で比較的硬質で、緩やかに周壁へと移行し、やや開き気味に立ち上がっている。

底面にはいくつかのピットが検出されている。ただしこれらのピットは本址に伴うものかどうかは不明である。また、支柱をなすと思われるものは確認できなかったが、土層図にかかっているピットに関しては入口施設など何らかの関連のある可能性がある。さらに、大きめの掘り込みについては、その占有位置から炉址の可能性が考えられた。しかし、精査の結果、被熱による変化などが認められず、炉址の痕跡とは認定できなかった。



第7図 1号竪穴状遺構

出土遺物は堆積土が薄かったせいもあって少ない。P006～P009は甕形土器の破片である。P006は北半区覆土から出土した口縁部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面がヘラナデおよび指ナデで、内面はナデ調整が施される。P007はピットから出土した口縁部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面が横方向のハケ目およびナデ調整、内面が横方向のハケ目およびナデ調整が施される。P008は南半区覆土から出土した口縁部破片で、厚さは0.5cmを測る。口唇部にヘラ状工具によるキザミ目を入れる。外面にLRの単節縄文を施し、内面はナデ調整が施される。P009は南半区覆土から出土したの頸部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面が縦方向のハケ目で、内面はヘラナデ調整がなされている。P010は北半区覆土から出土したの壺形土器の頸部破片で、厚さは0.6cmを測る。S字状結節文により区画し、円形浮文および縦方向の櫛描文が施される。外面は赤彩される。内面はヘラナデ調整が施される。P011は南半区覆土から出土した壺形土器の胴上部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面沈線区画は上端が鋸歯状の山形文、下端は横位沈線文を施し、区画文内に結節縄文を充填する。器面はザラつき、内面はナデ調整が施される。

P012は南半区覆土から出土した高坏形土器の脚部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面が赤彩され、内面は縦位から斜め方向のハケ目およびナデ調整が施される。

本址は、住居址を構成するための施設が十分でなかったため堅穴状遺構として処理したが、住居址となる可能性も考えられる。また、出土遺物からみて、弥生時代後期の所産であるものとする。

1号住居址（第8・9図）

本址は、調査区の北東隅D-1グリッドに位置する。西側で1号住居址と重複して検出された。2号住居址同様に大部分が調査区外に延びており、公園整備事業で失われてしまう北側のみ拡張し、調査を行なった。ただし、土砂の公道への流出を考え、最小限度の拡張にとどまっている。

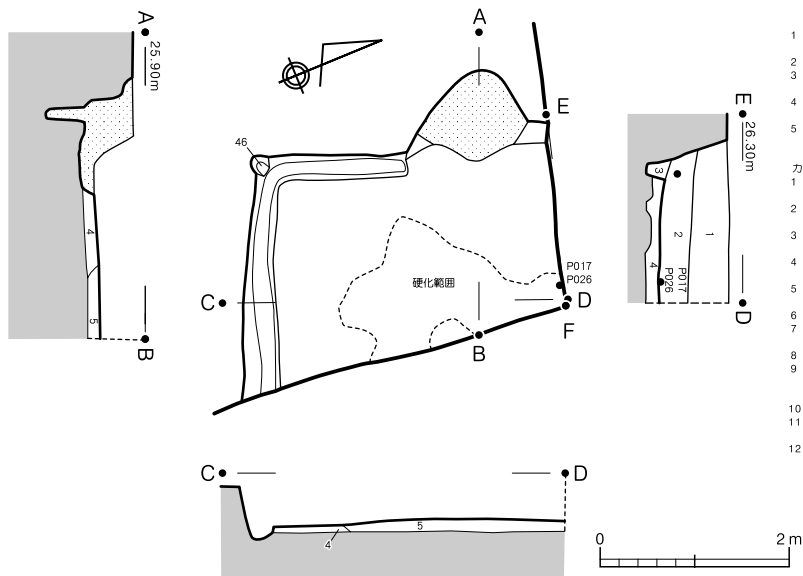
調査の結果、現存部分で3.50×3.30mを測る方形ないしは長方形の堅穴住居址であることが判明した。

周壁は2号住居址とほぼ重なっている。壁面下には幅25cm、深さ7cmほどの壁溝を有することが判明した。カマド部分を除き検出部においては全周する。

床面は中央部付近が非常に硬化しており、調査区境においては平面形状が円形の浅い掘り込み状に硬化面が存在していない部分が確認された。床面に柱穴は検出されていない。

このほかに、西側の周壁にカマドが検出された。検出時に約1.00×0.90mの範囲に粘土粒子を多く含む堆積土が散っていることが確認され、これらの堆積土を除去したところ下面には燃焼部と思われる被熱赤色硬化面と焼土が確認された。また、カマドの住居址から突出する外側部分には煙道と思われる箇所も確認されている。

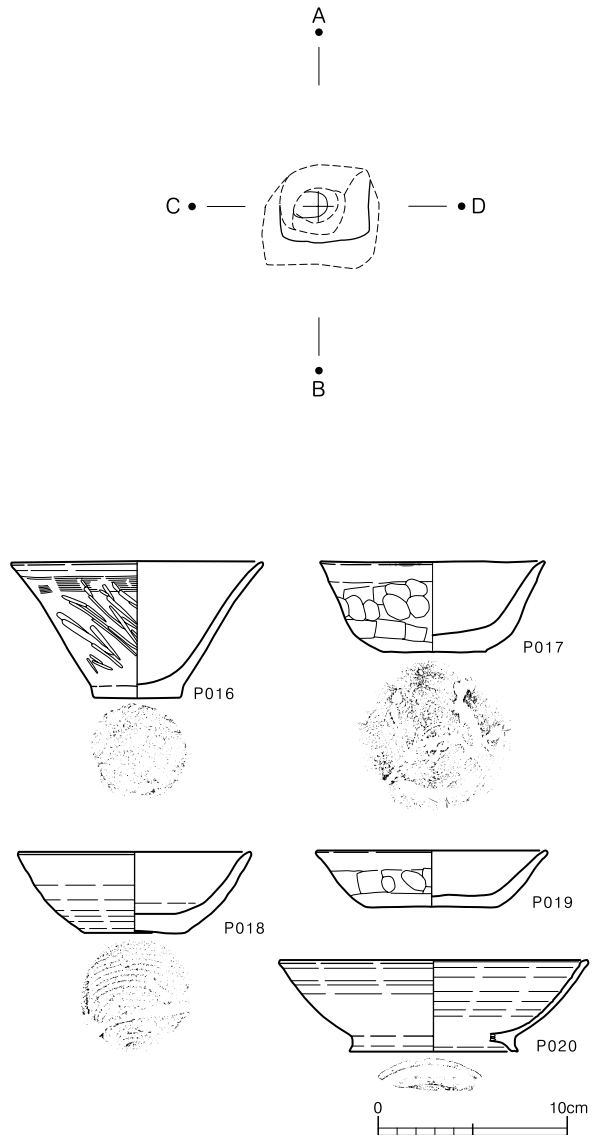
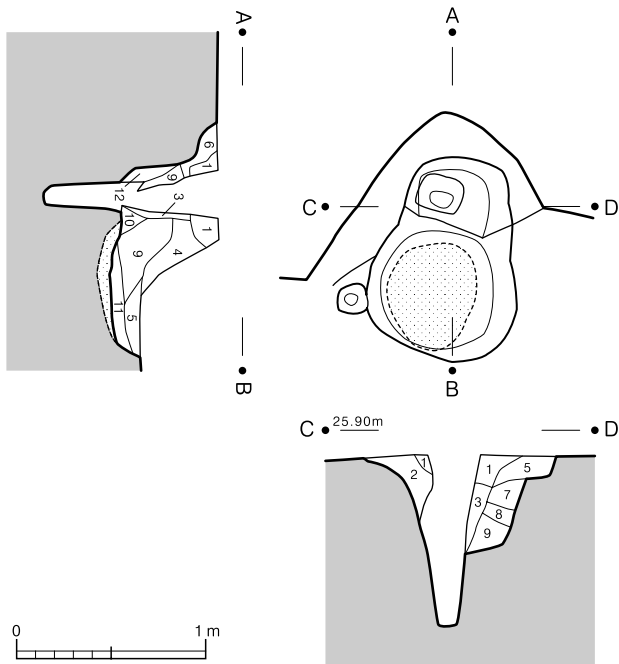
出土遺物は2号住居址と比較すると多い。P013からP015は土師器の甕形土器である。P013は覆土から出土した口縁部が約1/2残存するもので、口径は(18.2)cmを測り、残存する器高は4.6cmを測る。外面の口縁部はヘラナデおよびナデ調整で、体部が横方向のヘラケズリ。内面にはヘラナデおよびナデ調整が施されている。いわゆる相模型の甕形土器である。P014は覆土から出土した胴部下半から底部約1/2が残存する甕形土器で、底径は4.2cm、残存高は4.8cmを測る。外面胴部下半が斜め方向ヘラケズリ、底部がヘラナデ、内面にはヘラナデおよびナデ調整が施される。P015は覆土から出土した胴部下半から底部約1/4が残存する甕形土器で、底径(4.1cm)、器高は(5.9)cmを測る。外面の胴部下半が斜め方向ヘラケ



- 1: 黒褐色土。赤色スコリア粒を少量含みローム粒をやや多量、細粒でやや粘性乏しく、締まりに欠ける。黒味が強い。
- 2: 黒褐色土。1層に似るがローム粒が少なく、わずかに粘性粒を混入。
- 3: 灰黒褐色土。やや粗粒。粘土粒及び赤色スコリア粒を多量含み、カーボンをやや含む。粘性非常に強く、色調は明るく灰褐色がかる。
- 4: 暗褐色土。赤色スコリア粒をやや多量含み、わずかに焼土粒を混入する。非常に硬く、粘性なし。
- 5: 暗褐色土。赤色スコリア粒を含み、ローム粒・粘土粒をやや含む。やや粘性を帯びる。色調は硬化面部分に比し、やや暗い。

カマド土層注記

- 1: 黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒をわずかに含み、ローム粒を少量含む。粘性やや強く、締まりやや強い。黒味が強い。
- 2: 黒褐色土。1層にローム粒および粘土粒をやや多量。ロームブロックもわずかに混入する。
- 3: 黒褐色土。スコリア粒を少量含み、粘性きわめて強く、締まりあり。やや褐色味がかる。
- 4: 黒褐色土。スコリア粒をわずかに含み、0.5cm大の焼土ブロックおよび粘土ブロックをやや多量。粘性やや帯び締まりあり。細粒。
- 5: 黒褐色土。細粒。粘土粒をやや多量含み、焼土粒をわずかに混入する。粘性・締まりややあり。1層より暗い色調。
- 6: 黒褐色土。5層に似る。やや軟質。
- 7: 黒褐色土。細粒。焼土粒をやや多量含み、カーボンを混入する。粘性・締まりあり。
- 8: 黒褐色土。含有物なく、黒味強い。粘性強い。
- 9: 灰褐色土。細粒。焼土粒をわずかに含み、粉末状の粘土および粘土粒を多量含み、2.0~5.0cm大の粘土ブロックを少量含む。粘性ややあり、締まりややなし。褐色味が強い。
- 10: 灰褐色土。7層の粘土ブロックを混入しないもの。粘性ある。
- 11: 黒褐色土。細粒。細粒の粘土粒をわずかに含み、粘性ややあり、締まりあり。黒味強い。
- 12: 黒褐色土。細粒。整粒。褐色スコリア粒・ローム粒を少量含み、3層に似るが黒味強い。

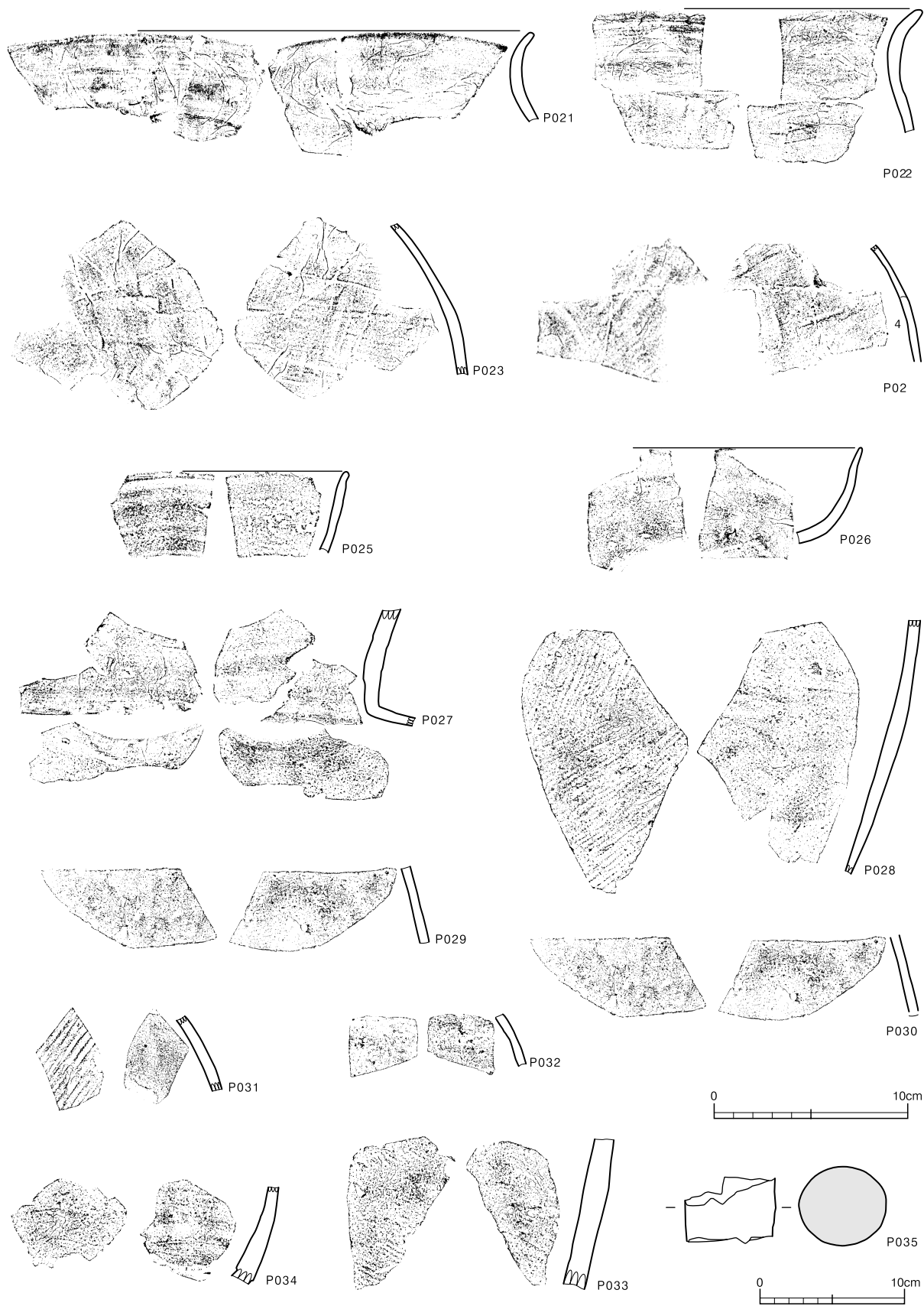


第8図 1号住居址

ズリおよびかいるナデがなされ、底部はヘラナデとなっている。また、内面はヘラナデおよびナデ調整が施される。P016は床下から出土した約1/2が残存する鉢形土器で、口径が14.4cm、底径は4.8cm、器高は7.3cmを測る。外面の口縁部は横方向のハケ目およびナデが施され、体部はヘラミガキとなっている。内面は口縁部が横方向のハケ目およびナデで、体部はヘラミガキとなっている。P017は口縁部一部欠損の坏形土器で、口径が12.0cm、底径は5.4cm、器高は4.8cmを測る。器面調整は外面の体部は横方向のヘラケズリおよび指頭調整が施され、底部はヘラケズリおよびナデ調整となっている。口縁部にタール状付着物、ロクロ成形の相模型の坏形土器である。P018は覆土から出土した坏形土器で、口縁部約1/3を欠損する。口径は(12.4)cm、底径は4.6cm、器高は4.3cmを測る。外面底部に回転糸切り痕を有する。見込みに渦巻き状の調整痕が残る。P019は覆土から出土した坏形土器で、底部から口縁部の約1/3残存品である。口径は(12.4)cm、底径が(7.0)cm、器高は3.0cmを測る。器面調整は外面の口縁部は横ナデ、体部には指頭調整およびヘラケズリが施される。底部はヘラケズリおよびナデで、内面にはナデ調整が施される。いわゆる相模型の坏形土器である。P020は覆土から出土した灰釉陶器碗で、口縁部から底部にかけて約1/4が残存している。口径は(16.4)cm、底径は(8.8)cm、残存する器高は4.9cmを測る。底部には回転ヘラケズリののち高台を貼付し、周縁にナデ調整を施している。P021～P024は土師器の甕型土器である。P021は口縁部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面の口縁部は横方向のヘラナデ、胴部はヘラケズリ、内面には横方向のヘラナデおよび指頭痕が残される。P022と同一個体と思われる。P022は覆土から出土した口縁部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面の口縁部は横方向のヘラナデおよびナデ、胴部はヘラケズリ。内面には横方向のヘラナデおよびナデ調整が施される。P023は覆土および床下から出土した破片の接合資料で、胴部の破片である。厚さは0.5cmを測る。外面は横位から斜め方向ヘラケズリおよびナデが施され、内面には横方向のヘラナデが施されている。P024と同一個体と思われる。P024は覆土から出土した胴部破片で、厚さは0.4cmを測る。外面は縦位から斜め方向ヘラケズリおよびナデ、内面には横方向のヘラナデが施されている。

P025は床下から出土した坏形土器の坏破片で、厚さは0.4cmを測る。内外面ともに横ナデ調整が施される。P026は口縁部から体部にかけて約1/4残存する坏形土器である。厚さは0.7cmを測る。器面調整は、外面の口縁部は横ナデ、体部が指ナデ、底部はヘラナデとなり、内面口縁部から体部ナデ、底部近くはヘラナデ調整が施される。

P027は覆土から出土した須恵器の甕形土器の頸部破片で、厚さは0.9cmを測る。ロクロ調整。P034と同一個体と思われる。P028は覆土から出土した須恵器の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。ロクロ調整で、縦位から斜め方向平行タタキ目文が施されている。P029は覆土から出土した灰釉陶器の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面に刷毛塗りの灰色がかかったオリーブ色の施釉がなされている。P030は覆土から出土した須恵器の甕形土器の胴部片で、厚さは1.1cmを測る。外面ヘラナデ、内面横方向のハケ目、ナデ調整が施される。P031は覆土から出土した甕形土器の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面平行タタキ目文、ナデ、内面ナデ調整が施される。P032は覆土から出土した灰釉陶器の胴部破片で、厚さは0.4cmを測る。外面に刷毛塗りの灰色がかかったオリーブ色の施釉がなされている。P033は覆土から出土した須恵器の甕形土器の胴部片で、厚さは1.0cmを測る。外面斜め方向平行タタキ目、横ナデ、内面横位から斜め方向ハケ目、ナデ調整が施される。P034は覆土から出土した甕形土器の胴下部破



第9图 1号住居址出土遗物

片で、厚さは1.0cmを測る。P035は床下から出土した支脚の下端破片である。長径が6.0cm、短径が5.5cmを測り、残存高は4.5cmを測る。断面が楕円形を呈し、二次焼成により一部が赤化している。これらの土器の特徴は、9世紀末から10世紀代前半代の特徴を有している。

〈中世以降の遺構〉

溝状遺構

・1号溝状遺構（第10図）

本址は、調査区南寄りのC～D-4グリッド、2号溝状遺構の北側に位置している。西側は調査区外へと更に延びており、東側では「く」字状に屈曲し北側へと続いているが、斜面にあたっているために掘り込みは途切れて残存していない。

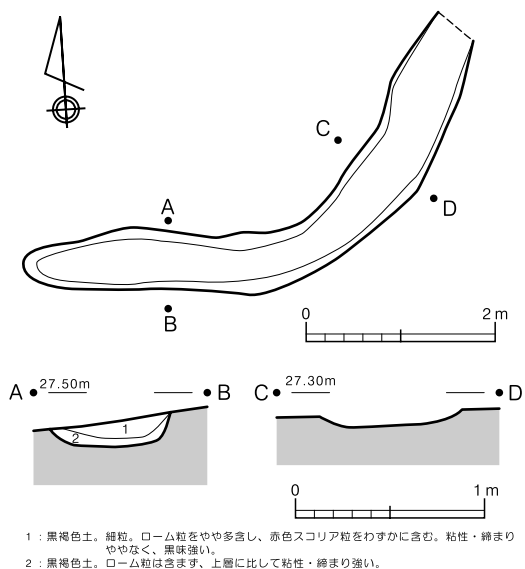
Ⅲ層中において確認され、現存する規模は、開口部で溝幅0.52～0.72m、溝底で0.22～0.50mを測り、長さは5.40mを測る。溝幅は2号溝状遺構に比べ幅細となっている。また、掘り込みはⅢ層を掘り込んで構築される。

堆積土は、いわゆる歴史時代遺物包含層に類似する黒褐色土で、ロームブロックなどの混入物は認められていない。また、堆積土中には人為的な埋戻しなどの痕跡は認められず、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

掘り込みの深さは5～30cmとなっている。周壁は比較的緩やかに掘り込まれているが、最も深い部分付近ではほぼ垂直に掘り込まれている。

出土遺物は少なく、何れも小片の遺物であるため、構築時期の根拠となりえる資料は認められていない。

本址は、規模が小さいものの、2号溝状遺構に沿うように占地し、また類似した形状を呈していることから、同様の用途で用いられたものである可能性が考えられる。



第10図 1号溝状遺構

・2号溝状遺構（第11図）

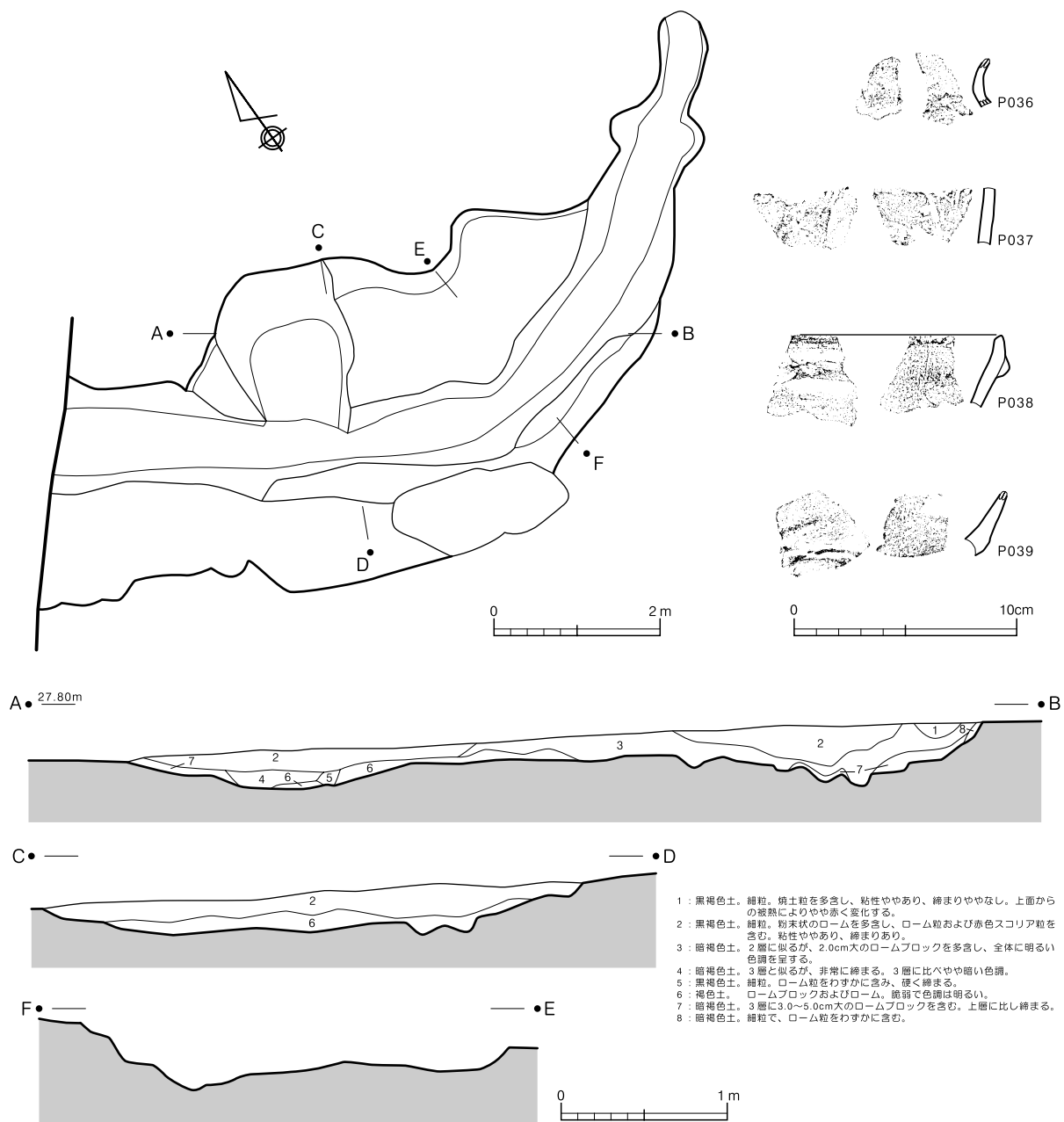
本址は、調査区南寄りのC～D-4～5グリッドに位置している。1号溝状遺構の南側に位置し、西側は調査区外へと更に延びており、東側では「く」字状に屈曲し北側へと続くが、その先端は掘り込みが浅いため既に残存していない。

確認面はⅢ層で、現存する規模は、開口部で溝幅0.50～3.60m、溝底で0.35～3.85m、検出部における長さは10.60mを測る。1号溝状遺構に比べ幅が広く一部において複数の溝が重複しているような形状を呈している。何れも浅い掘り込みで、斜面の下側にあたる北側では立ち上がりは不明瞭となっている。

残存する掘り込みの最も深い部分でも0.35mと掘り込みは浅目である。

V層中に構築された溝底は、やや凹凸を呈しているもののおおむね平坦で、非常に堅緻である。

出土遺物は少なく、何れも小片で覆土からの出土である。P036は土師器甕形土器の口縁部破片である。



第11図 2号溝状遺構

厚さは0.5cmを測る。器面調整は外面は横ナデで、内面には横ナデが施されている。P037は土師器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面はヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。P038は播鉢の口縁部破片で、厚さは0.7cmを測る。突帯を有し、釉薬は鉄サビ釉である。瀬戸・美濃系の16世紀代のものと思われる。P039は坏形土器の体部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面がナデ、内面にはナデ調整が施されている。

本址の構築時期については、堆積土の状況や出土遺物からみて中世以降の所産であるものとする。本址は、空堀に沿うように走行し、東側では方向を違え土塁に沿うように屈曲している。現状では、空堀の北郭側には土塁が残存していないものの、性質状この部分にも土塁は築かれていたものと考えられ

る。このため、この溝状遺構は土塁に沿って構築されているものと考えられる。その後の調査によってこの溝状遺構はこの時点で未掘の部分においても北側へと屈曲していることが判明している（詳細は平成17年度調査の節に記載）。

土 坑

・ 1号土坑（第12図）

本址は、調査区北寄りのD-1グリッドに位置し、土塁と重複して検出された。遺構確認面は土塁の構成土中である。掘り込みの上半部分は残存していないが、残存部における遺存状態は悪くはない。

規模は、開口部で0.80×0.63mを測り、坑底で0.60×0.43mを測る。平面形状はともにやや楕円形に近い円形を呈する。

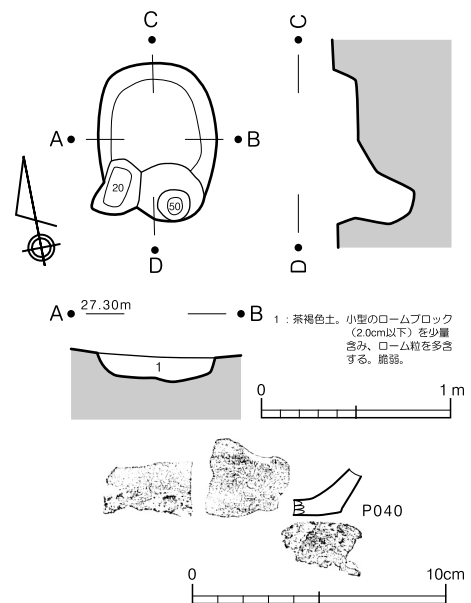
堆積土は標準堆積層I層相当の茶褐色土で、ロームブロックなどを用いた人為的な埋戻しは確認されず、何れも自然堆積の様相を呈していた。

周壁は、土塁を構成する土ロームブロック層をほぼ垂直に掘り込み、緩やかに坑底へと移行している。現存する最大壁高は0.13mと浅い。

坑底も周壁同様ロームブロック層中に構築される。凹凸は見られず平坦で、南側には2穴のピットが重複している様相を呈している。これらのピットは本址に伴うものではない。

出土遺物はきわめて少ない。P040は覆土から出土した、底部から胴部にかけて約1/6が残存する土師器の甕形土器の底部破片である。厚さは0.5cmを測る。外面はヘラケズリで、内面にはナデ調整が施されている。

本址の所産時期に関しては、土塁を掘り込んで構築されている点から中世以降の所産と考える。なお、堆積土は2～4号土坑に類似しており、およそ同じ時期に構築されたものとする。また、遺構の性格については不明である。



第12図 1号土坑

・ 2号土坑（第13図）

本址は、調査区北寄りのD-2グリッドに位置している。遺構確認面はⅢ層中で、掘り込みの上半部分は残存していないが、残存部における遺存状態は悪くはない。

規模は、開口部で0.88×0.88mを測り、坑底で0.58×0.62mを測る。平面形状はともに円形を呈している。

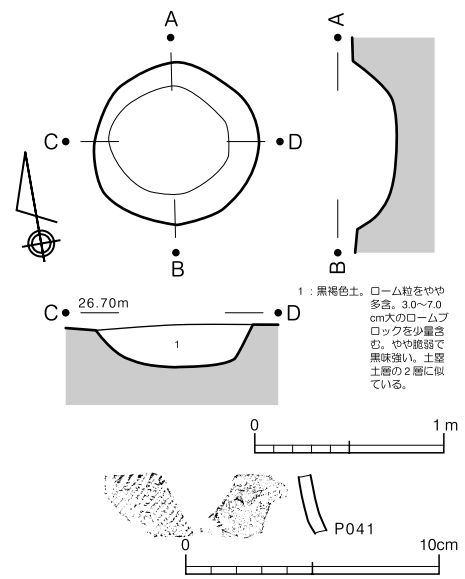
堆積土は標準堆積層I層相当の茶褐色土で、ロームブロックなどを用いた人為的な埋戻しは確認されず、何れも自然堆積の様相を呈していた。

周壁は、ロームブロック混じりの中世層をほぼ垂直に掘り込み、緩やかに坑底へと移行している。断面形状はいわゆる鍋底状を呈している。現存する最大壁高は0.19mと浅い。

坑底はⅢ層中に構築され、凹凸は見られず平坦である。

出土遺物は少ない。P041は覆土から出土した壺形土器の胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面単節縄文LRを施す、上端に刺突痕を有する。内面にはナデ調整が施されている。

本址の所産時期に関しては、出土遺物や堆積土から中世以降の所産と考える。なお、堆積土は1・3・4号土坑に類似しており、おおよそ同じ時期に構築されたものと考えられる。また、遺構の性格については不明である。



第13図 2号土坑

・3号土坑（第14図）

本址は、調査区北寄りのD-2グリッドに位置している。遺構確認面はⅢ層中で、掘り込みの上半部分は残存していないが、残存部における遺存状態は悪くはない。

規模は、開口部で0.88×0.75mを測り、坑底で0.66×0.54mを測る。平面形状はともに円形を呈している。

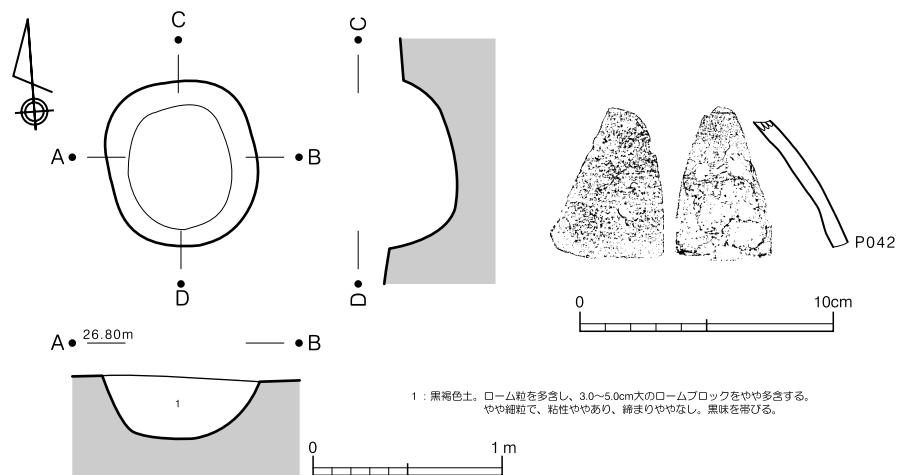
堆積土は標準堆積層I層相当の茶褐色土で、ロームブロックなどを用いた人為的な埋戻しは確認されず、何れも自然堆積の様相を呈していた。

周壁は、中世地業層をほぼ垂直に掘り込まれる。緩やかに坑底へと移行し、断面形状はいわゆるボウル状を呈している。現存する最大壁高は0.33mを測る。

坑底はⅢ層中に構築され、凹凸は見られず平坦である。

出土遺物は少ない。P042は覆土から出土した灰釉陶器製の長頸瓶胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。胴部回転ヘラケズリ、外面に灰色がかったオリブ色の施釉がなされる。

本址の所産時期に関しては、出土遺物や堆積土から中世以降の所産と考える。なお、堆積土は1・2・4号土坑に類似しており、おおよそ同じ時期に構築されたものと考えられる。また、遺構の性格については不明である。



第14図 3号土坑

・4号土坑（第15図）

本址は、調査区北寄りのC-2～3グリッドに位置している。遺構確認面はⅢ層中で、遺存状態はき

わめて良好である。

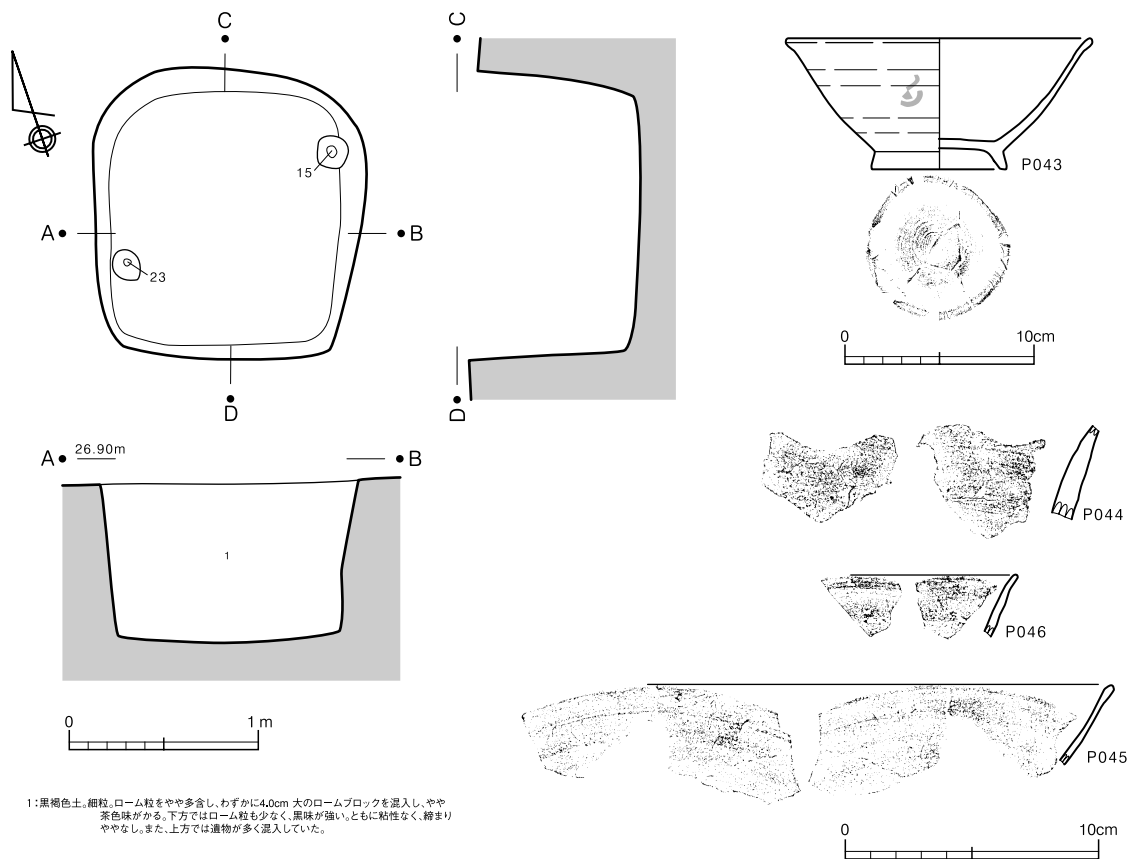
規模は、開口部で1.54×1.43mを測り、坑底で1.33×1.24mを測る。平面形状はともに隅丸の方形を呈している。

堆積土は標準堆積層I層相当の茶褐色土で、ロームブロックなどを用いた人為的な埋戻しは確認されず、何れも自然堆積の様相を呈していた。

周壁は、Ⅲ層をほぼ垂直に掘り込まれ、緩やかに坑底へと移行し、断面形状はいわゆる鍋底状を呈している。現存する最大壁高は0.83mと深い。

坑底はV層中に構築され、凹凸は見られず平坦である。また、径15cmほどの2穴のピットを有している。2穴の穿孔位置には規則性は窺えず、その性格は不明である。

出土遺物は上層において多く認められた。P043は覆土から出土した須恵器の高台付坏形土器である。底部から口縁部にかけて約1/2が現存し、口径は(16.2)cm、底径が7.2cm、器高は7.0cmを測る。底部に回転糸切り痕を有する。底部は切り放し後に高台を貼付し、周縁をナデて調整している。体部の外面に墨書が施されるが判読不明である。P044は覆土から出土した灰釉陶器製の長頸瓶の頸部破片で、厚さは1.0cmを測る。内面に刷毛塗りの灰色がかかったオリーブ色の施釉がなされている。P045は覆土から出土した口縁部から体部にかけての約1/3が残存する須恵器の坏形土器で、厚さは0.3cmを測る。ロクロ調整。P046は覆土から出土した須恵器の坏形土器口縁部破片で、厚さは0.3cmを測る。こちらもロクロ調整となっている。



1: 黒褐色土。細粒。ローム粒をやや多含し、わずかに4.0cm 大のロームブロックを混入し、やや茶色味がかる。下方ではローム粒も少なく、黒味が強い。ともに粘性がなく、締まりややなし。また、上方では遺物が多く混入していた。

第15図 4号土坑

本址の所産時期に関しては、出土遺物や堆積土から中世以降の所産と考える。なお、堆積土は1～3号土坑に類似しており、おおよそ同じ時期に構築されたものと考え。また、遺構の性格については不明であるが、1～3号土坑とは趣を異にしており、同様の性格であるとは考えにくい。

土 壘 (第16・17図)

本址は、調査区北端のC～D-1～2グリッドに位置している。このあたりは東側には土壘が残存しているものの、土壘状の高まりは原状では存在していなかった。しかし、表土を除去したところ、土壘の基礎部分と考えられる人為的な構築層が残存していることが判明した。

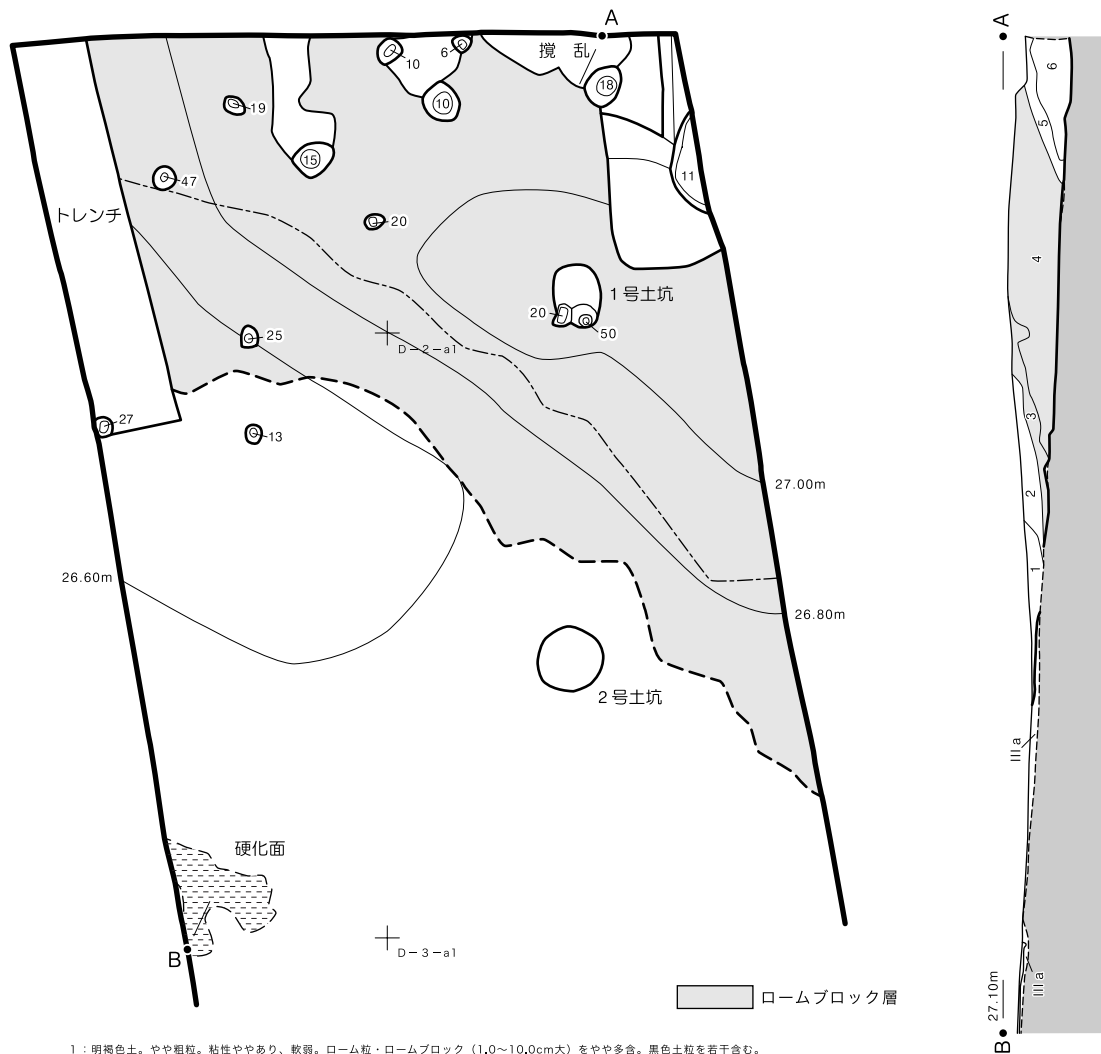
この土壘は、D-3グリッドの調査区が屈曲する付近からD-2グリッド付近まで延びたのち、進行方向を西側へと変えて延びている。調査区内においては土壘の全幅を検出することはできなかったが、検出部分では最大6.20mとなっている。

土壘の構築土は、ロームブロック層を主体とする土層と黒褐色土が互層をなして積み上げられている。残存する高さは、最も残存している部分でも0.90m程度となっている。明確な版築はなされておらず、調査区境の土層観察によって、北郭北側の土壘に関しては東側から西側へと積み上げていることが判明した。これは、おそらく斜面の上方から岬状に土堤を延ばしながら構築されたためと考える。

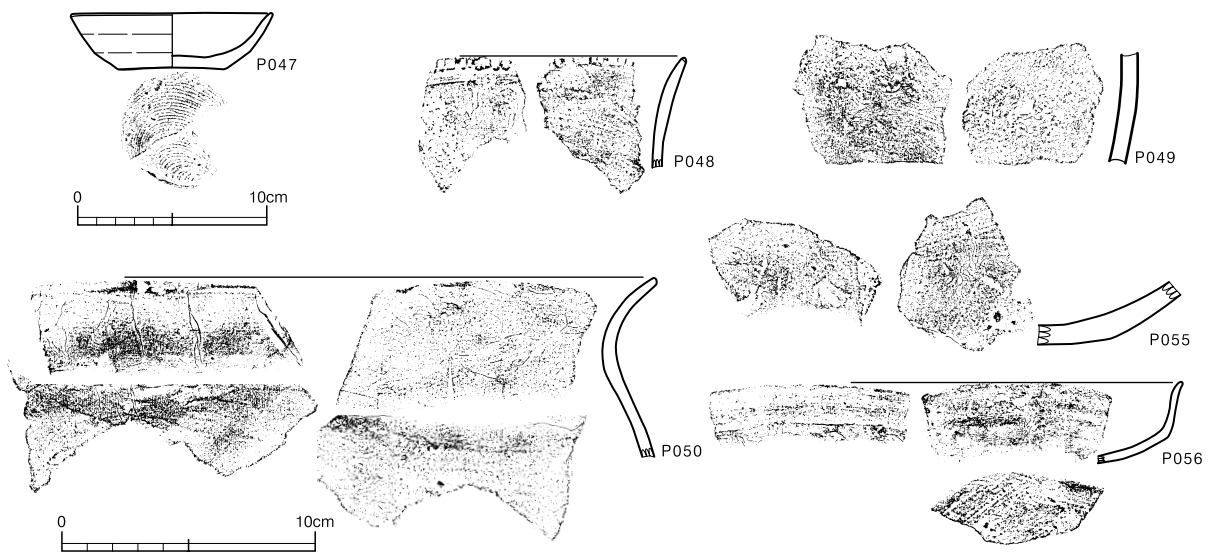
また、土壘付近ではピットがいくつか確認されている。これらピットは、土壘の基礎を構成するロームブロック層の上から穿たれている。これは丁寧な版築を施さないかわりに、土壘構成土の崩落を防ぐ目的で杭を打つなどしたものとも推測できる。ただし、土留めをしたと考える明確な痕跡は確認されていない。

残存する土壘基礎の上面は平坦に削平されている。この削平面の直上からは宝永火山灰の薄い堆積層が確認されている。このことから、この土壘は宝永4年(1707)にはすでに削平されていることが分かる。東側に現存する土壘とこの土壘の基底面とは約2～3mの比高差をもっており、検出部の幅から推測して、削平以前には同様の規模の土壘であったことが推測される。

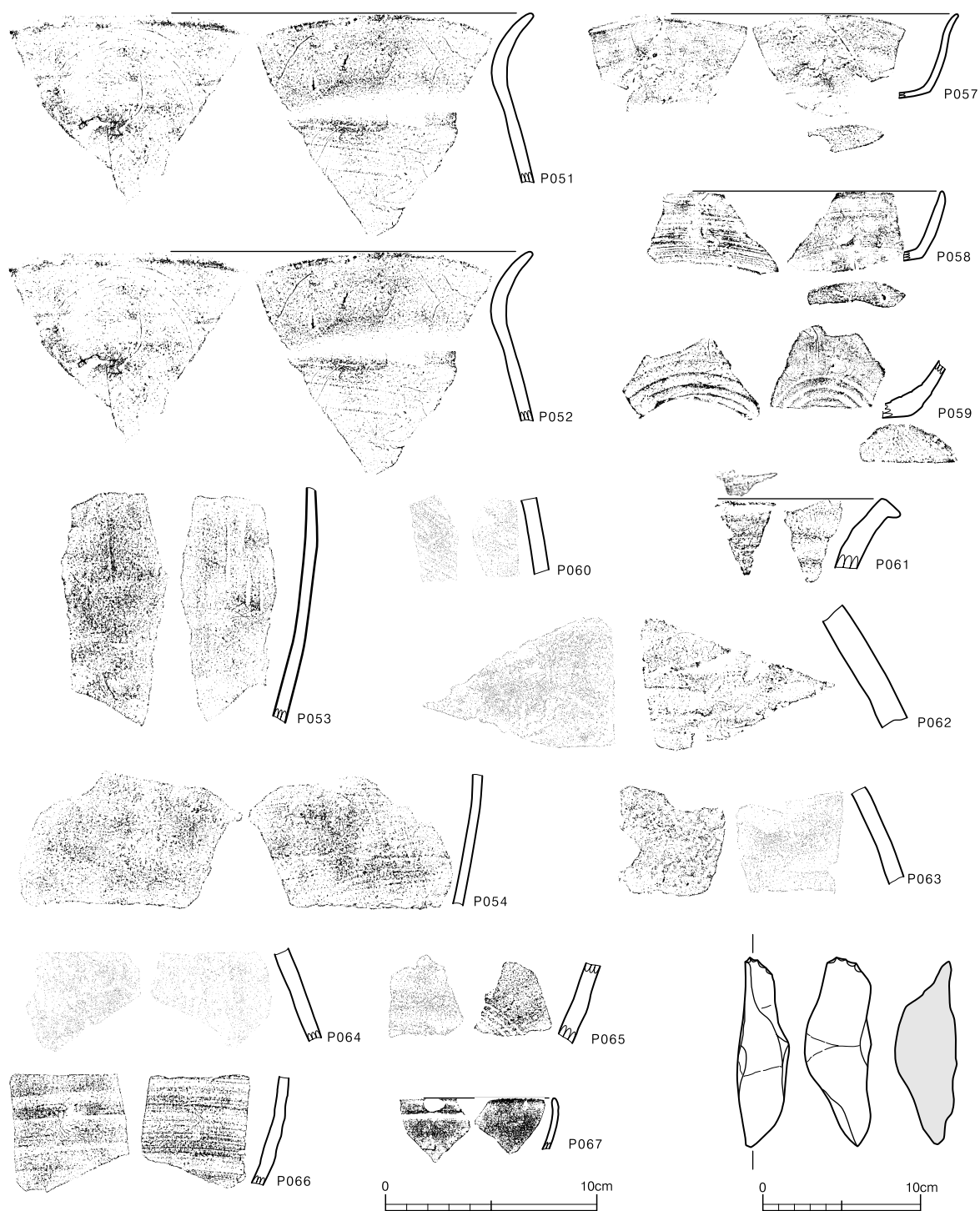
土壘内からは若干の遺物が出土している。しかしながら、土壘に直接伴うと思われる遺物は少なく、大半は下部に位置する住居址などの混入物となっている。P047は硬化面下東区から出土した口縁部の約1/4を欠損する坏形土器である。口径は10.6cm、底径が6.0cm、器高3.0cmを測る。底部には回転糸切り痕が認められる。また、見込みには渦巻き状の調整痕が残っている。口縁部が焼成時に変形している。P048は硬化面下東区から出土した壺形土器の口縁部破片で、厚さは0.5cmを測る。口唇部にヘラ状工具によるキザミ目を入れ、外面の口縁部は横方向のハケ目およびナデ調整、内面は横から斜め方向のハケ目およびナデ調整が施される。P049は硬化面下東区のロームブロック層中から出土した甕形土器の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面が斜め方向のハケ目およびナデ調整が施される。P050は硬化面下東区から出土した胴部上半約1/5の土師器甕形土器で、厚さは0.8cmを測る。内外面ともにヘラナデ調整が施される。P051は硬化面下東区から出土した、口縁部から胴部胴部にかけての約1/5の土師器甕形土器である。厚さは1.0cmを測る。外面には指ナデ、内面の胴部には横方向のヘラナデ調整が施される。P052は硬化面下東区・ロームブロック層中出土の口縁部から胴部にかけての約1/6の破片である。厚さは0.6cmを測り、外面にはヘラナデおよび指ナデ調整が施される。



- 1: 明褐色土。やや粗粒。粘性ややあり、軟弱。ローム粒・ロームブロック (1.0~10.0cm大) をやや多含。黒色土粒を若干含む。
- 2: 暗褐色土。やや細粒。粘性1層より強い。やや軟弱。1層に比しローム粒やや少なく、ロームブロックはやや多い。黒色土粒の割合は1層より多い。
- 3: 黄褐色土。ローム粒主体層。ロームブロックは少なく、粘性弱く軟弱。土壁基部の層。
- 4: 黄褐色土。3層に似るがロームブロック (1.0~10.0cm大) をきわめて多含。埋戻し状を呈する。
- 5: 暗褐色土。やや粗粒。粘性弱く軟弱。ローム粒・ロームブロック (5.0~10.0cm大) を少量含む。
- 6: 黄褐色土。4層に似るが、ロームブロックの塊がやや小型で暗褐色土粒・ローム粒の割合多い。



第16図 土 壘



第17図 土壘出土遺物

P053は硬化面下東区から出土した土師器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面がヘラナデおよびナデ調整で、内面にはヘラナデ調整が施される。P054も硬化面下東区から出土した土師器の甕形土器胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面がヘラナデおよびナデ調整で、内面にはヘラナデ調整が施される。P055は硬化面下東区から出土した土師器甕形土器の胴部下部の破片である。厚さは0.8cmを測る。外面がヘラミガキで、内面にはヘラナデ調整が施される。P056はピットから出土した土師器の坏形

土器である。厚さは0.3cmを測る。口縁部に赤彩の痕跡が認められる。外面は口縁部が横ナデで、底部にはヘラケズリが施される。内面はヘラミガキとなっている。P057は西区ロームブロック層中から出土した土師器坏形土器の口縁部破片である。厚さは0.3cmを測る。外面体部に指頭痕が認められ、内外面の口縁部から体部にタール状のものが付着している。P058は東区ロームブロック層中から出土した土師器坏形土器の破片で、厚さは0.5cmを測る。外面底部はヘラケズリで、内面にはヘラナデおよび指ナデ調整が施される。P059はD-2・3グリッドから出土した坏状を呈するかわらけの体部約1/3残存破片で、厚さは0.6cmを測る。底部に回転糸切り痕が認められる。また、見込み渦巻き状の調整痕が確認される。P060は西区ローム層中から出土した須恵器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.8cmを測る。外面斜め方向平行タタキ目文が施されている。

P061は東覆土出土の灰釉陶器長頸瓶の口縁部破片で、厚さは1.0cmを測る。外面の口縁部には灰色がかかったオリーブ色の施釉がなされている。P062は覆土から出土した灰釉陶器製の甕形土器の胴部破片で、厚さは1.2cmを測る。外面に灰色がかかったオリーブ施釉がなされている。P063は西区出土の灰釉陶器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面に外面に灰色がかかったオリーブ施釉がなされている。P064は東区ローム層中から出土した須恵器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.8cmを測る。外面にタタキ目文が施されている。P065は西区覆土出土の播鉢胴部破片で、厚さは0.8cmを測る。内面の櫛目状の条痕は細く曲線的である。瀬戸・美濃系と思われる。P066は東区ローム層中出土の壺形土器の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。産地瀬戸・美濃系のやきしめ土器で、下端にケズリの痕跡を有する。P067は西区覆土出土の白磁碗口縁部破片で、厚さは0.3cmを測る。13から14世紀頃の輸入品と思われる。

S001は北区から出土した砥石である。長さ幅厚さを測り、鱈節状を呈している。三面に著しい研磨による摩滅が確認され、一部には擦痕が認められる。

本址は、出土遺物や堆積土の特徴から中世遺構であるものと考えられる。

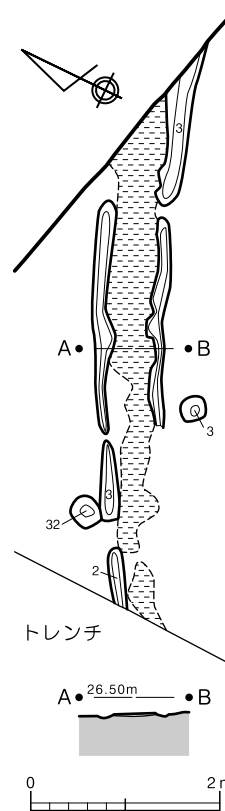
道路状遺構（第18図）

本址は、調査区北寄りの調査区境、C-1グリッドに位置している。土塁と重複して検出され、両側を調査区外へと延ばしている。南西側は、遺構確認のためのトレンチによって失ってしまったが、調査区境の土層観察によってさらに南側へ延びていることが確認されている。

Ⅲ層中にて確認され、検出部での現存する規模は、幅0.50～0.85m、長さ6.20mを測り、北東方向へと一直線に延びている。遺構の両側には、幅10～20cm、深さ5cmほどの幅細で浅い掘り込みの溝が配され、2つの溝の間が道路状に硬化していることから道路状遺構として取り扱った。

Ⅲ層中に構築された遺構は、ほぼ平坦に設えられ、貼床状に非常に硬くしまっている。硬変している部分は断面観察によって約3cmほどであることが確認されている。

出土遺物は皆無であった。

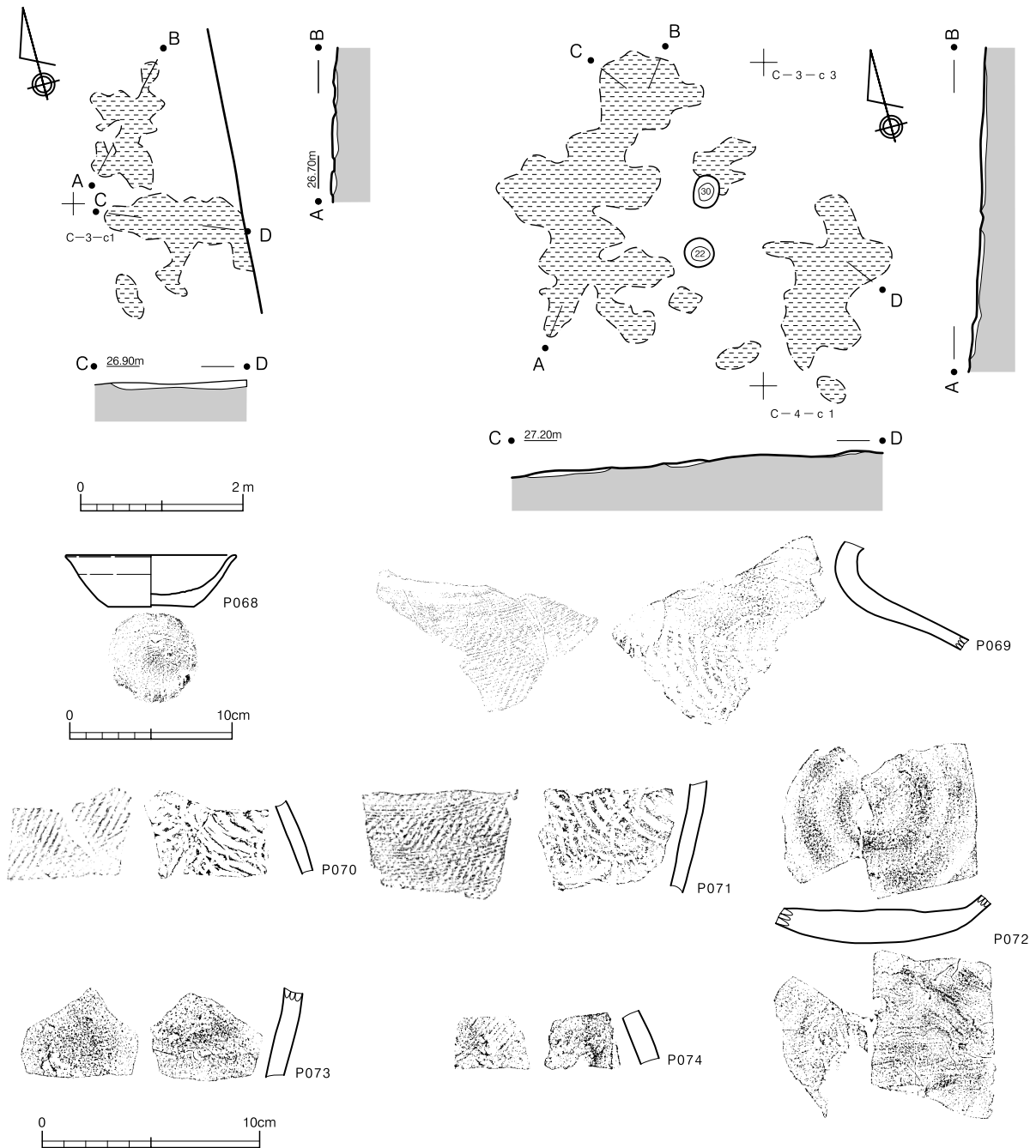


第18図 道路状遺構

土塁との重複関係は、本址を覆うように土塁が構築されていることから、本址が土塁に先行して構築されたものとする。

硬化面（第19図）

道路状遺構のほかに、硬化している部分が数か所に確認されている。1つめはC-2グリッドにおいて検出されたもので、1.60×1.30mの範囲で硬化部分が広がっている。2つめはD-2～3グリッドにおいて検出されたもので、1.60×0.90mおよび1.70×1.10mの範囲の2つの部分に分かれて検出されてい



第19図 硬化面

る。3つめはD-3グリッドにおいて検出され、こちらも3.70×2.40mおよび2.15×1.60m範囲の硬化部分に分かれているが、この2つの周辺に小さな島状の硬化部分も確認されており、元々は1つの大きな範囲であったものと推測される。

いずれの硬化範囲もⅢ層上面に構築されており、黒褐色土が貼床状を呈して硬化している。硬化の厚さは5～10cmほどに及び、平面形状はみなアメーバ状の不整形となっている。

これらの硬化面は、同一面に形成されていると考えられる。硬化部分を断ち割って観察したところ、人為的に貼床状に設えられたものではなく、堅穴住居址の直床のように幾度と踏み締められた結果として硬化していたものと考えられる。これらの硬化面は、土塁の基礎の下端と同じレベルに構築されており、土塁の構築時とあまり時を違えず、面的に整備されていたものと思われる。ただし、中世寺院などで見られるいわゆる地業層とは異なっている。

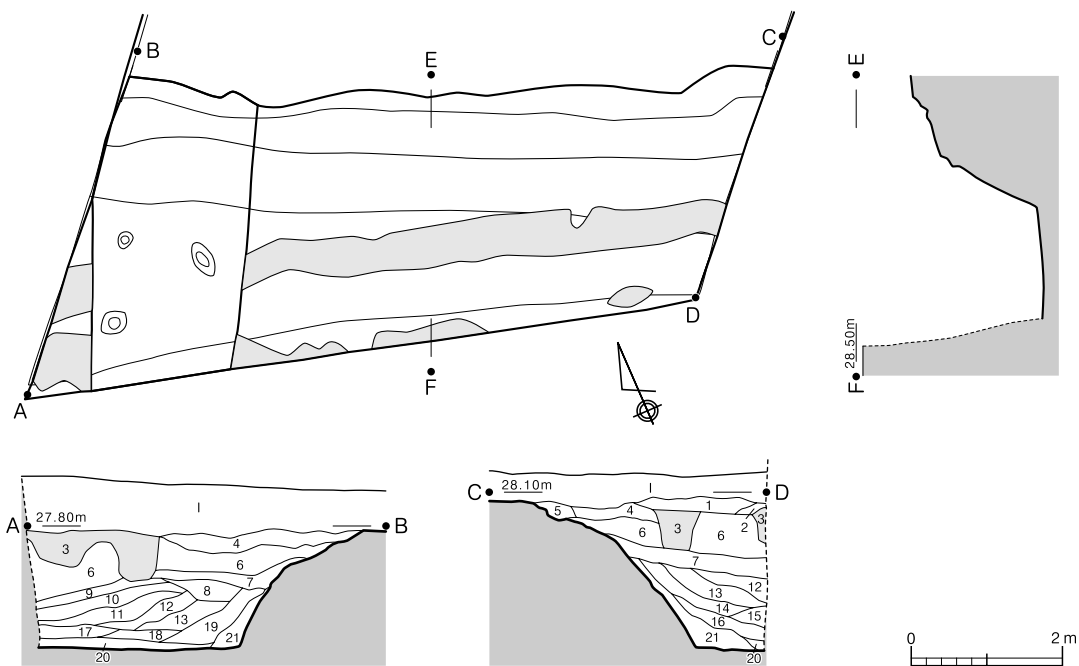
この硬化面を精査中に遺物が確認されている。さほど多くはなく、時期や特徴が分かるものは図示したもののみである。P068は硬化面D-3グリッド直上から出土した坏の口縁部約1/4残存品で、底部は完存している。口径は(10.5)cm、底径が5.4cm、器高は3.1cmを測る。底部に回転糸切り痕を有している。また、見込には同心円状の調整痕を有している。P069～P071は同一個体と考えられる須恵器の甕型土器の胴上半部破片である。P069はD-3グリッドの硬化面直上から出土したもので、厚さは1.0cmを測る。外面に平行タタキ目文ののち横方向のハケ目が施される。内面は頸部横ナデで、胴部には同心円のタタキ目文を施す。P070は硬化面直上から出土した須恵器の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面は平行タタキ目文および横方向のハケ目が施され、内面には同心円タタキ目文が施される。P071は硬化面直上および地業層から出土した須恵器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面平行タタキ目文および横方向のハケ目が施され、内面には同心円タタキ目文が施されている。P072は硬化面直上および確認面から出土した須恵器甕形土器の底部破片で、厚さは1.6cmを測る。底部にヘラケズリおよびナデ調整が施される。P073はD-3グリッド硬化面直上から出土した須恵器の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。外面平行タタキ目文およびナデ調整、内面には横方向のハケ目調整が施される。P074はD-3グリッド硬化面直上から出土した須恵器の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。外面平行タタキ目文が施される。

空堀 (第20図)

本址は、調査区南端のB～C-5～6グリッドに位置し、V層中にて検出された。確認面において、本址の西側部分で平成2年度調査のトレンチの痕跡が確認されている。

空堀は東西に延びており、今回の調査区で検出された部分は、堀の北側部分の立ち上がりのみが検出されたものである。南側の立ち上がりは中郭の直下にあると考えられることから、今回検出した部分は堀幅全体の半分以下にとどまっている。検出部の規模は2.68～4.20m、長さは8.20mとなっている。

空堀内の堆積土は、ローム粒を多含する黒褐色土が主体となっている。全体的に柔らかく、自然堆積の様相を呈しており、下部にはカーボンを多く含む層が確認されている。また、確認面において一旦堆積土を溝状に掘り込んだのちに大型のロームブロックのみを人為的に充填した溝状の層が2条確認されている。



- | | |
|---|--|
| <p>1: 黒褐色土。やや粗粒。赤色スコリア粒をわずかに含み、1.0~2.0cm大のロームブロックおよび粗粒のローム粒を少量含む。粘性・締まりややなし。</p> <p>2: 黒褐色土。粗粒。ローム粒・1.0cm大のロームブロックをやや多量含み、カーボンも多量。1層に比し、締まる。黒味が強い。</p> <p>3: 明褐色土。1.0~15.0cm大のロームブロック層。ブロック層にわずかに粗粒の茶褐色土を混入。粘性・締まりややあり。人為的に埋め戻された層。</p> <p>4: 黒褐色土。粗粒。粗粒のローム粒および1.0~5.0cm大のロームブロックをやや多量。やや色調は明るく、茶色味がある。3層と同様に人為的に埋め戻された可能性がある。</p> <p>5: 黒褐色土。4層に似るが脆弱。</p> <p>6: 暗褐色土。細粒。細粒のローム粒を多量含み、赤色スコリア粒・カーボンを少量含む。粘性ややなく、締まりも2層に劣る。やや暗い色調を呈する。</p> <p>7: 暗褐色土。粗粒。粗粒のローム粒および黒色スコリア粒をきわめて多量含み、全体に褐色味がある。粘性やや強く、締まる。</p> <p>8: 黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒をわずかに含み、粗粒のローム粒を多量。わずかにカーボンを混入し、黒味が強い。粘性・締まりともに7層に劣る。</p> <p>9: 暗褐色土。粗粒。7層に似るが、ややローム粒が乏しく、暗い色調を呈する。</p> <p>10: 暗褐色土。7層に1.0~3.0cm大のロームブロックを混入した層。粘性は7層より強く、締まりは同じ。</p> <p>11: 暗褐色土。粗粒。粗粒・細粒のローム粒を多量含み、2.5cm大のローム粒を少量含む。また、黒褐色土ブロックをわずかに含む。粘性強く、締まりややあり。褐色味強い。</p> | <p>12: 暗褐色土。細粒。粗粒のローム粒を少量含み、赤色スコリア粒をやや多量。粘性やや劣り、締まりは強い。黒味を帯びる。</p> <p>13: 暗褐色土。粗粒。粗粒のローム粒をきわめて多量。黒・赤色スコリア粒を少量含む。粘性ややなく、締まる。12層よりは締まる。褐色味強い。</p> <p>14: 黒褐色土。細粒。粗粒のローム粒を多量含み、2.0cm大のロームブロックをごくわずかに含む。粘性弱く、締まりややなし。</p> <p>15: 黒褐色土。細粒。粗粒のローム粒をごくわずかに含み、細粒のローム粒を少量含む。粘性は14層より強く、締まりは同じ。黒い色調を呈する。</p> <p>16: 黒褐色土。14層に似るが、ローム粒の粒径がやや小さく、割合もやや少ない。また、粘性は14層より強い。</p> <p>17: 暗褐色土。細粒。細粒のローム粒・赤色スコリア粒をやや多量含み、カーボンを少量含む。粘性弱く、締まりは非常に強く硬質。黒い色調。</p> <p>18: 暗褐色土。やや粗粒。粗粒のローム粒および赤色スコリア粒をやや多量。17層よりは少ない。粘性ややあり、しまりややなし。</p> <p>19: 黒褐色土。粗粒。粗粒のローム粒をきわめて多量。粗粒の黒色スコリア粒をやや多量含み、粘性ややあり、締まりあり。わずかに褐色味がある。</p> <p>20: 暗褐色土。細粒。ローム粒を少量含み、粉末状のロームを斑状状に含む。粘性強く、締まりも強い。暗い色調。</p> <p>21: 褐色土。ロームブロックおよびローム。壁の崩落土。</p> |
|---|--|

第20図 空堀

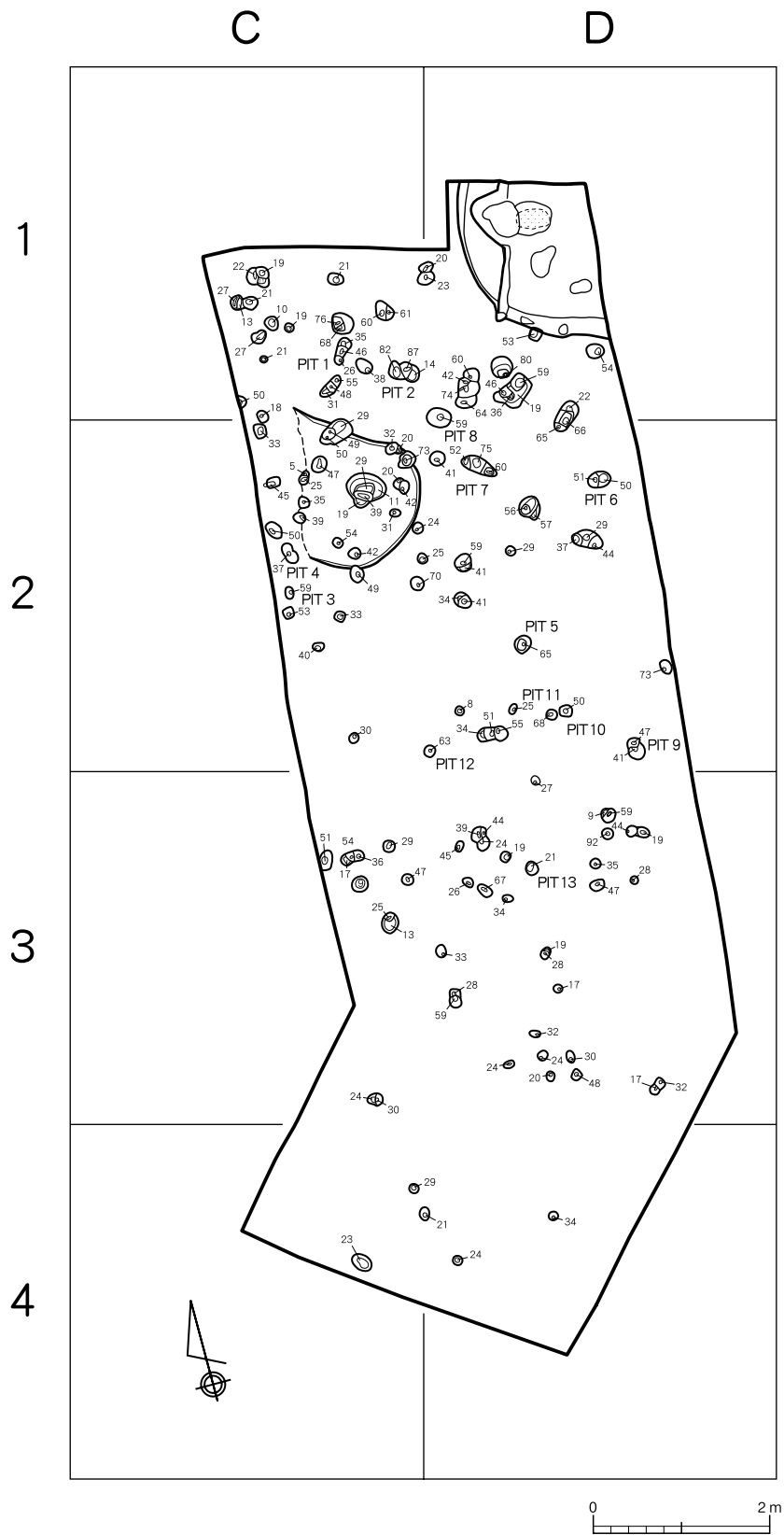
この溝状のものは、幅43~62cm、深さは50~65cmほどの規模を呈し、掘り込みの内側はロームブロック主体の単一層となっていた。また、西側において上方でつながっているような様相を呈していた。人為的に埋め戻されてはいるが、硬化面のように上面が堅く締まっていたはいなかった。

空堀の掘り込みは、ローム層を深く掘り込んで構築され、上方で一旦稜を有し稜線以下では垂直に近く、また以上では緩やかに掘り込まれており上下では様相を違えている。掘り込みの深さは最大で1.80mを測る。

底面は非常に堅緻で、一部にピットが確認されたもののほぼ平坦で、わずかながら東側へと傾斜している。断面形状は逆台形を呈するものと推測され、いわゆる箱堀といわれる形状を呈している。

出土遺物は少なく、大型の礫が3点出土したほか確認されていない。

本址は過去の調査によって既に調査されており、今回の調査では再確認ということとなった。しかしながら、空堀の両側の立ち上がりを調査することはできず、中郭と北郭を隔てる空堀の性格を掴むにはいたっていない。また、空堀上面で確認された溝状のローム充填についても、その用途ははっきりとはしていない。しかしながら、掘り込みの上面が江戸時代の削平面とレベルが同一なため、恐らく同時期かあまり時間差ない時期に構築されたものと思われる。



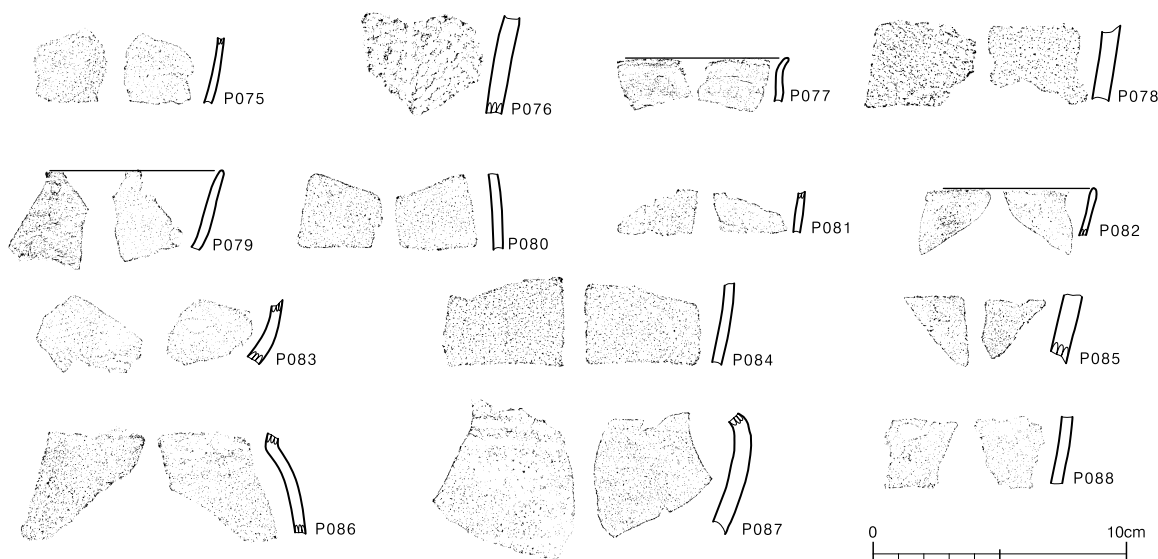
第21図 ピット群

ピット群（第21・22図）

中世遺構面を調査した後、下部にそれ以前の遺構の存在が判明していたため、それらの遺構を確認できる面まで掘り下げた。その結果、1号竪穴状遺構などの遺構が検出された。このほか、多数のピットが検出されている。調査区が狭いため、この面において検出されたピットをまとめてピット群とした。

検出したピット間には、掘り込みの深さや規模など規則性を見出すことはできず、掘立柱建物址のような遺構になるものとは考えづらい。また、その堆積土にも標準堆積層のI層とII層相当の2種類があり、I層相当のものは、上部から掘り込まれていたピットで、上部遺構面で確認できなかったものと考えられる。

ピットからは遺物も出土している。P075はピット1出土の土師器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.3cmを測る。器面調整は外面がヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。P076はピット2出土の深鉢形土器の胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。地文にLの無節縄文を施文、縄文時代前期の関山から黒浜式期も所産と考える。P077はピット3出土の土師器の坏形土器の口縁部破片で、厚さは0.3cmを測る。内外面ともにナデ調整が施される。P078はピット4出土の土師器の甕形土器胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。胎土が粗く器面はザラつき、外面にヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。P079はピット3出土の土師器坏形土器の口縁部から体部にかけての破片で、厚さは0.3cmを測る。器面調整は外面がヘラナデ、内面にはナデ調整が施される。P080はピット5出土の土師器の甕形土器胴部破片で、厚さは0.3cmを測る。内外面ともにナデ調整が施される。P081はピット6出土の土師器の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.3cmを測る。外面がヘラナデ、内面にはナデ調整が施される。P082はピット7出土の須恵器坏の形土器の口縁部破片で、厚さは0.3cmを測る。口唇部に自然釉がかかっている。P083はピット8出土の土師器の坏形土器の体部破片で、厚さは0.4cmを測る。器面調整は外面の上半がナデ、下半がヘラケズリで、内面にはナデ調整が施されている。P084はピット9から出土した土師器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.4cmを測る。外面がナデ、内面はヘラナデ調整が施されている。P086と同一個体の可能性がある。P085はピット10出土の土師器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.8cmを測る。外面がヘラケズ



第22図 ピット群出土遺物

り、内面にはナデ調整が施される。P086はピット11から出土した土師器甕形土器の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。器面調整は外面がナデ、内面はヘラナデ調整となっている。

P087はピット12出土の灰釉陶器製の長頸瓶の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面に灰色がかかったオリーブ色の釉薬が施釉されている。P088はピット13出土の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面はナメ方向のハケ目およびナデ調整、内面は横方向のハケ目およびナデ調整が施される。

遺構外出土遺物（第23・24図）

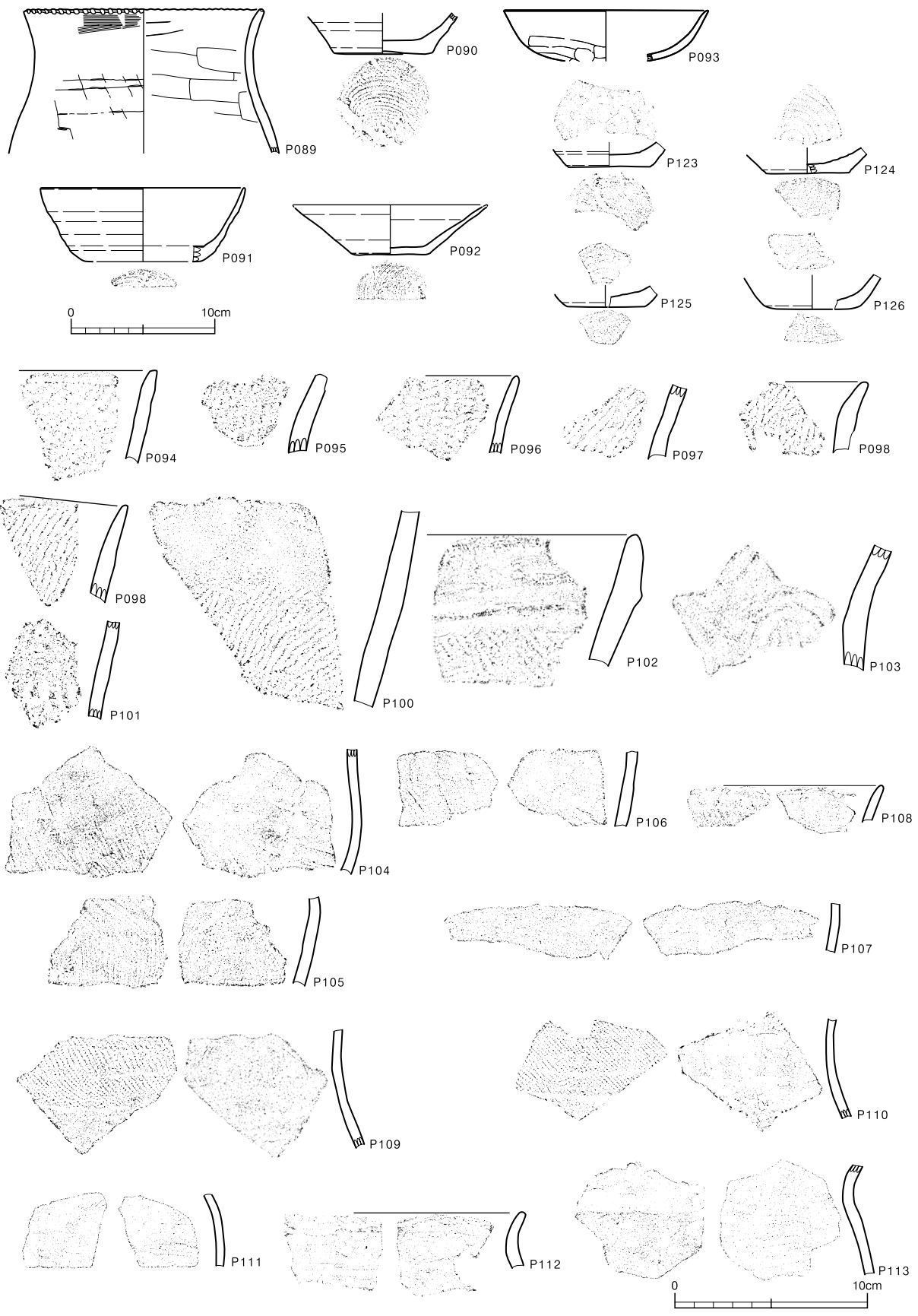
ここでは、表土除去時や遺構外から出土した遺物、また遺構から出土したのもので、明らかにその所産時期が異なるものを取り上げている。

P089はC～D-2グリッドI～II層出土の甕形土器の口縁部から胴部上半にかけて約1/2が残存する資料である。口径は（16.8）cm、器高は（10.2）cmを測る。口唇部に棒状工具によるキザミ目を入れ、外面の口縁部は横方向のハケ目および横ナデ、胴部が斜め方向ヘラナデ調整で、内面は横方向のヘラナデ調整が施されている。

P090はD-1グリッドの下部遺構から出土した底部から体部にかけて残存する坏形土器で、底径は6.4cm、器高は（2.3）cmを測る。底部に回転糸切り痕を有し、内面にタール状付着物を認める。P091は2号住居址のカマドから出土した底部から体部約1/5が残存するロクロ土師器の坏形土器で厚さは0.5から1.1cmを測る。底部に回転糸切り痕を有する。P092はC～D-1グリッドのII～III層出土の須恵器の坏形土器である。底部から体部にかけて約1/2が残存し、口径は（13.0）cm、底径が（5.4）cm、器高は（3.3）cmを測り、底部に回転糸切り痕を有する。P093はD-1グリッド拡張区、表土出土の土師器の坏形土器である。口縁部から底部にかけ約1/4が残存し、口径は（14.4）cm、底径が（7.6）cm、器高は（3.5）cmを測る。外面の口縁部から体部上半がナデ、下半ヘラケズリおよびかいるナデがほどこされ、一部に指頭痕が残る。

P094～P103は縄文土器で、P099までが前期、それ以降が中期となっている。前期のものは関山期から黒浜期にかけての所産と考えられるが、一部花積下層式の特徴を有しているものも確認されている。

P094は1号住居址は床下から出土した深鉢形土器の口縁部破片で、厚さは0.7cmを測る。粗いLの無節縄文が施される。P095はC～D-1グリッドのII～III層出土の深鉢形土器の胴部破片で、厚さは1.0cmを測る。Lの無節縄文を施す。P096は1号竪穴状遺構の北半区覆土出土の深鉢形土器の口縁部破片で、厚さは0.6cmを測る。粗いLの無節縄文を施す。P097は2号住居址覆土の深鉢形土器の胴部破片で、厚さは1.0cmを測る。Lの無節縄文を施す、P098、P099と同一個体と思われる。P098はC～D-1グリッドのII～III層出土の深鉢形土器の破片である。厚さは1.0cmを測る。Lの無節縄文を施す。P099はC～D-1グリッドのII～III層出土の深鉢形土器の口縁部破片で、厚さは1.0cmを測る。波状口縁で、Lの無節縄文を施す。P100はC～D-1グリッドのII～III層出土の深鉢形土器の胴部破片で、厚さは1.0から1.2cmを測る。地文にLの無節縄文を施し、内面は研磨される、P102と同一個体と思われる。P101は1号竪穴状遺構の北半区覆土出土の深鉢形土器の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。ヒダ状の圧痕文を施す。P102はC～D-1グリッドのII～III層出土の深鉢形土器の口縁部破片で、厚さは1.2cmを測る。口縁部に細い隆帯、地文にLの無節縄文を施す。P103はC～D-3～4グリッドのII～III層出土の深鉢形土



第23図 遺構外出土遺物 1

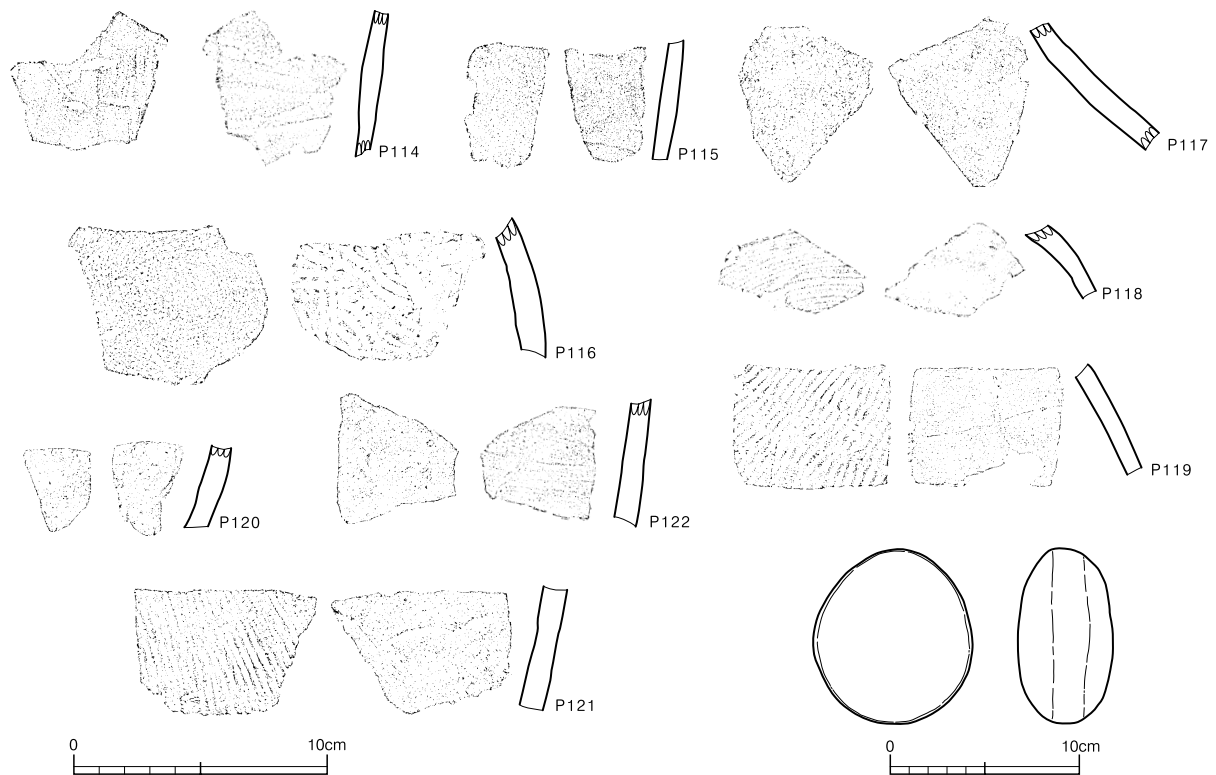
器の口縁部破片で、厚さは1.0cmを測る。口縁部に楕円の区画を配し、区画内に縄文を充填する。

P104～P111は弥生時代後期の資料である。P104～P106はC～D-1グリッドのⅡ～Ⅲ層出土の甕形土器の胴部破片である。これらの3点は同一個体と思われる。P104は厚さ0.6cmを測る。外面にヘラケズリののちハケ目およびナデ調整を施し、内面には横方向のヘラナデ調整が施される。P105は厚さ0.6cmを測る。外面にヘラケズリののちハケ目およびナデ調整を施し、内面には横方向のヘラナデ調整が施される。P106は厚さ0.6cmを測る。外面にヘラケズリおよび縦位から斜め方向のハケ目、ナデ調整が施される。内面には横方向のヘラナデ調整が施されている。P107はC～D-1グリッドのⅡ～Ⅲ層出土の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面が横方向のハケ目およびナデ、内面は斜め方向ハケ目、ナデ調整が施される。P108は硬化面下東区から出土した壺形土器の口縁部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面にRLの単節縄文を施す。内面にはヘラミガキ調整がなされ、輪積み痕を残す。P109はC～D-1グリッドのⅡ～Ⅲ層出土の壺形土器の頸部破片で、厚さは0.5cmを測る。外面はS字状結節文による区画文内にRLの単節縄文を施す。また、内面にはヘラナデ調整が施される。P110はC～D-2グリッドの硬化面上から出土した壺形土器の頸部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面にRLの単節縄文を施す。内面はヘラナデ調整で輪積み痕を残すP108～110は非常に似通っており、同一個体の可能性が考えられる。P111はC～D-1グリッドのⅡ～Ⅲ層出土の壺形土器の胴部破片で、厚さは0.4cmを測る。外面は赤彩され、内面にはナデ調整が施される。

P112～P115は土師器の甕形土器の破片である。P112はC～D-3グリッドの表土から地業層にかけて出土したもので、厚さは0.7cmを測る。器面調整は内外面ともに横ナデ調整が施される。P113はC～D-1グリッドの表土出土の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面は頸部が横方向のハケ目、胴部がヘラナデおよび指頭調整で、内面が横方向のハケ目およびナデ調整が施される。P114はD-1グリッド拡張区のⅡ層出土の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面が縦位のヘラケズリ、内面が横から斜め方向のヘラナデ調整となっている。P115はD-1グリッド拡張区の表土から出土した胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。器面調整は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。

P116～P122は須恵器ないしは陶器の甕型土器の破片である。P116はD-3グリッドの精査時に出土した胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。外面はカキ目調整後かろいナデを施し、内面には同心円の当て具痕が認められる。P117はD-4グリッドの遺構確認面から出土した灰釉陶器製の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。外面に暗いオリーブ色の釉が施され、内面にはナデ調整が施される。P118はD-1グリッド拡張区Ⅱ層出土の胴部破片で、厚さは1.0cmを測る。外面はかき目調整、内面にはナデ調整が施される。P119はC～D-3～4グリッドのⅡ層出土の胴部破片で、厚さは0.7cmを測る。外面に平行タタキ目文およびかろいナデ調整が施される。P120はD-1グリッド拡張区のⅡ層出土の胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。内外面ともにナデ調整で、内面には指頭痕が認められる。P121はC～D-3グリッドの表土から地業層出土の胴部破片で、厚さは1.0cmを測る。外面は平行タタキ目文およびかろいナデ調整で、内面はナデ調整となっている。外面に二次焼成の痕跡認められる。P122はD-1グリッド拡張区の表土から出土した胴部破片で、厚さは0.8cmを測る。外面に鉄さび釉が施される。

P123～P126はかわらけである。P123はD-3グリッド精査時およびC～Dグリッドの表土～地業層の接合資料である。底部の2/3残存資料である。底径は(5.4)cm、器高は(1.2)cm、厚さは1.0cmを測る。



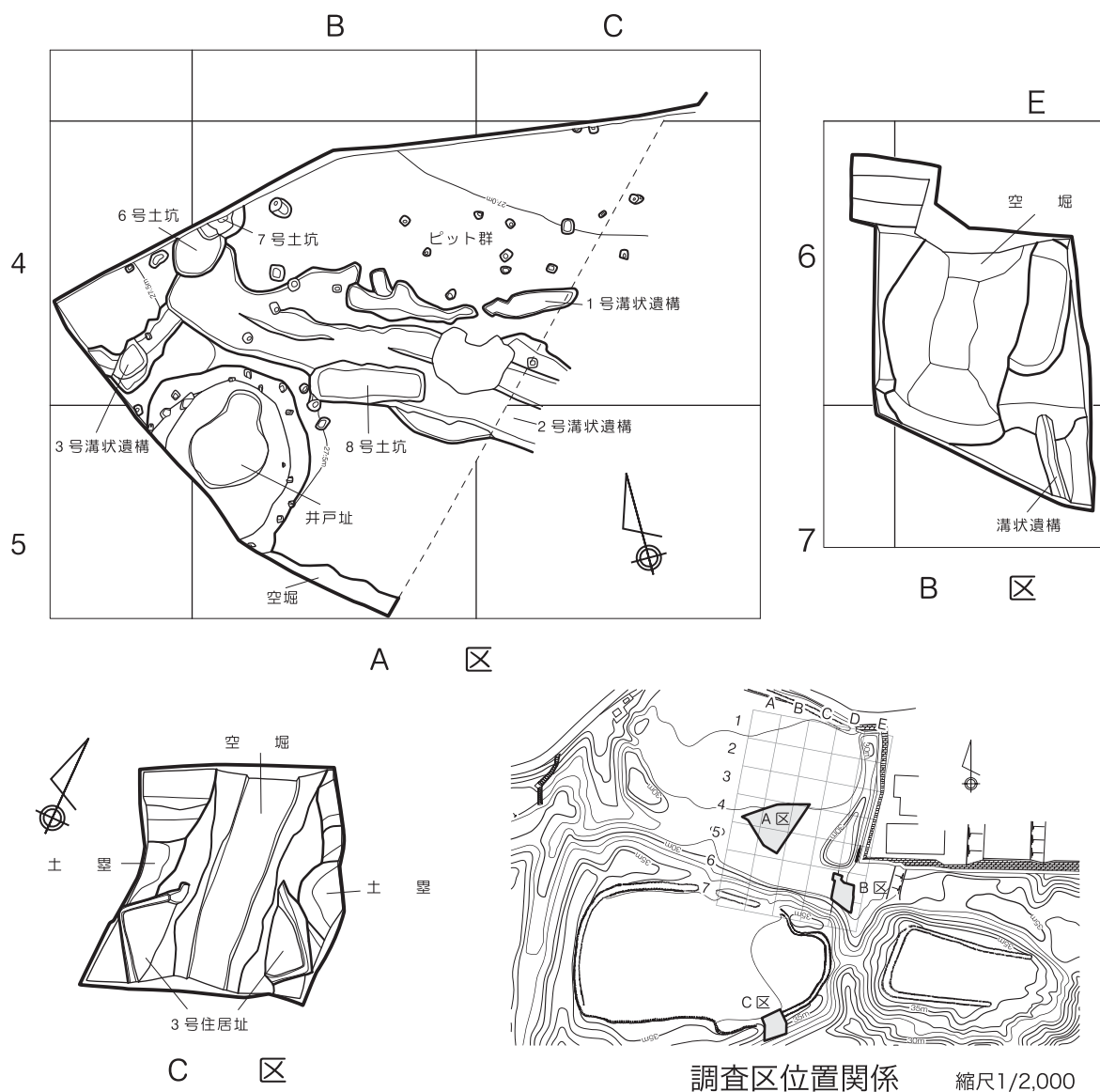
第24図 遺構外出土遺物2

底部に回転糸切り痕を有する。見込みに渦巻き状の調整痕を有する。P124はC～D-2グリッドの表土～地業層から出土した資料で、底部の約1/5が残存している。底径は(5.8)cm、器高は(1.7)cm、厚さ0.8cmを測る。見込みに渦巻き状の調整痕を施している。P125はC～D-2グリッドの表土～地業層から出土した底部破片で、底径は(5.5)cm、器高は(1.4)cm、厚さ0.7cmを測る。底部にスノコ痕が認められる。また、見込みには渦巻き状の調整痕が施されている。P126はC～D-2グリッドの表土～地業層から出土した破片で、底径は(5.6)cm、器高は(2.4)cm、厚さは0.8cmを測る。底部に回転糸切り痕、見込みに渦巻き状の調整痕を施している。

S002はC～D-2グリッドの表土層から地業層にかけての層から出土した磨石である。長さ9.2cm、幅8.5cm、厚さ5.1cm、重さ620.1gを測り、周縁部に擦痕が認められる。

(3) 平成17年度調査

今回の調査にあたっては、今までの発掘調査の成果から、空堀など中世城郭の遺構の調査が主体となることが分かっていた。特にB区とした調査区は、全域が中郭と北郭の間に存在する空堀あたっており、また、A区では平成15年度調査によって検出された遺構の続きが検出される可能性がきわめて高いほか、C区においても空堀や土塁が検出されることは必至であった。調査の結果、上記の遺構のほか、古墳時代の竪穴住居址や中世の井戸址などが検出された。前節の平成15年度調査部分は時代順に表記していたが、この節では中世遺構が各地点において検出されていることから、時代順に記載することがそぐわないため、調査地区順(同じ地区内においては時代順)に表記している。



第25図 平成17年度調査区遺構分布図 (縮尺1/200)

〈A区の遺構〉

土 坑

7号土坑 (第26図)

本址は、調査区北西際のB-4グリッドに位置し、溝状遺構および6号土坑、1～3号溝状遺構と重複して検出された。北側を調査区の外側へと延ばしており、全掘はできなかった。確認面はV層となっている。

検出部分での規模は、開口部で1.46×0.57m、坑底で1.02×0.40mを測り、平面形状は不整形を呈している。掘り込みの深さは最も深い部分で0.50mを測る。

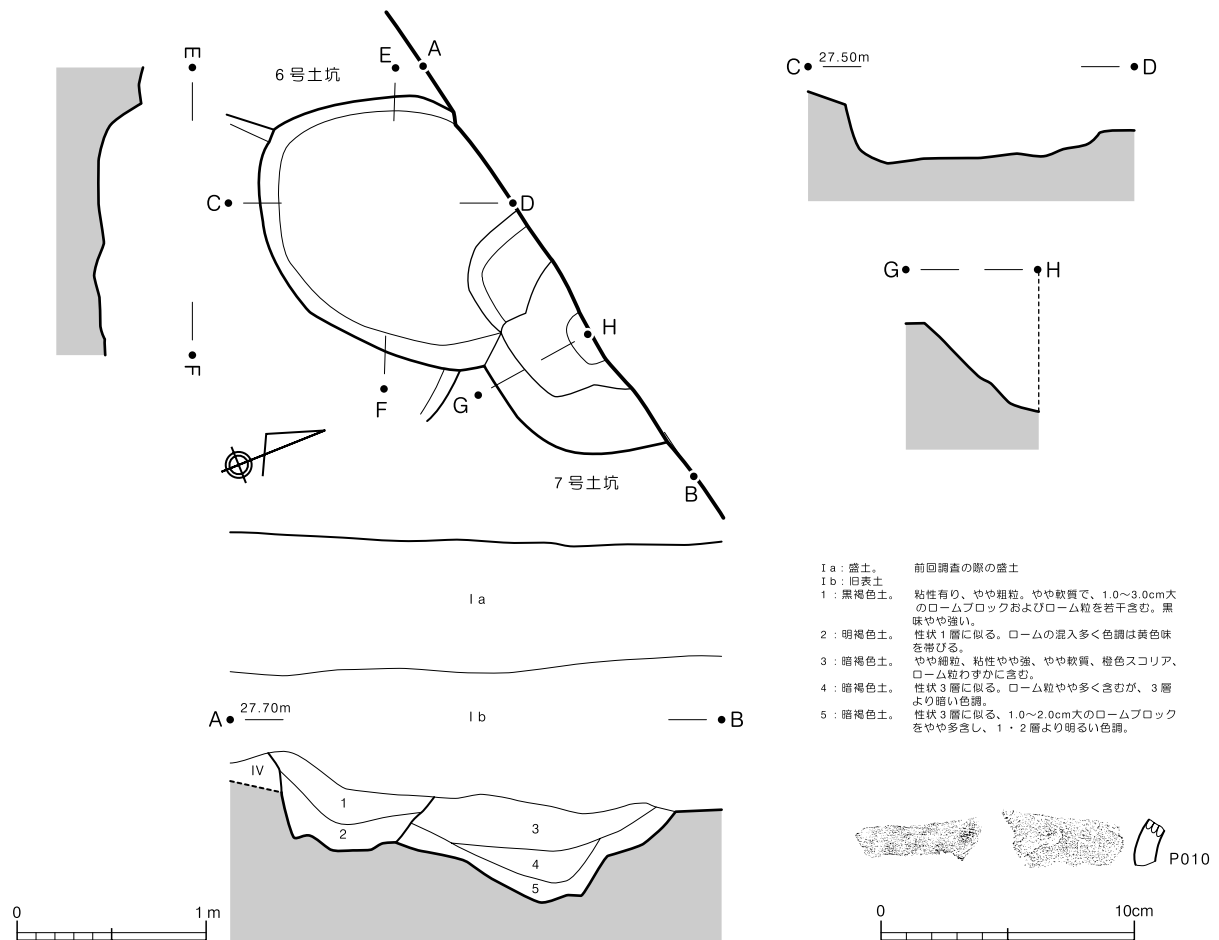
堆積土は標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、色調の暗い締まりの強いものであった。ロームブロックを用いた人為的なものは確認されず、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

V層中に構築される周壁は比較的緩やかに掘り込まれ、上半で一端綾ををもって外側に開く。また、坑底との境目は不明瞭で、緩やかに移行している。

坑底はVI層中に構築される。やや中央に向かって傾斜しており、中央付近に径80×40cmほどのだらしな掘り込みが穿たれている。

出土遺物は皆無である。

遺構の堆積土から縄文時代の土坑であることが判明したが、掘り込みがさほど明瞭でない上、全体が検出していないことから、その性格は不明である。6号土坑との新旧関係は、土層観察によって本址が6号土坑に先行して構築されたものとする。また、溝状遺構との重複関係についても、堆積土が中に溝の底面を構成するものが認められなかったことから、本址が後出するものとする。



第26図 6・7号土坑

6号土坑 (第26図)

本址は、調査区北西際のB-4グリッドに位置し、溝状遺構および7号土坑と重複して検出された。7号土坑同様に北側部分を調査区の外側へと延ばしており、全掘はできなかった。確認面はV層となっている。

検出部分での規模は、開口部で1.58×01.35m、坑底で1.46×1.17mを測り、平面形状は不整形を呈している。掘り込みの深さは最も深い部分で0.28mを測る。

堆積土は標準堆積層I層相当の黒褐色土で、ロームブロックを用いた人為的なものは確認されず、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

V層中に構築される周壁は比較的緩やかに掘り込まれ、上半で一端綾ををもって外側に開く。また、坑底との境目は不明瞭で、緩やかに移行している。

坑底はVI層中に構築され、ほぼ平坦でやや堅緻である。

出土遺物は少ない。P010は土師器の甕型土器頸部片である。厚さは0.9cmを測り、内外面ともナデ調整が施されている

7号土坑との新旧関係は、土層観察によって本址が6号土坑より後出するものとする。また、堆積土の特徴から本址は中世以降の所産とする。

8号土坑 (第27図)

本址は、調査区はほぼ中央B-4グリッドで1・2号溝状遺構と重複して検出された。調査中より溝状遺構とは異なる遺構であることは考えられていたが、その新旧関係については掘削前と調査後では違う結果となった。

V層中にて確認され、規模は開口部で1.18×3.25m、坑底で0.80×2.90mを測り、平面形状は長細い長方形を呈している。現存する掘り込みは0.34mを測り、溝状遺構より深い掘り込みとなっている。

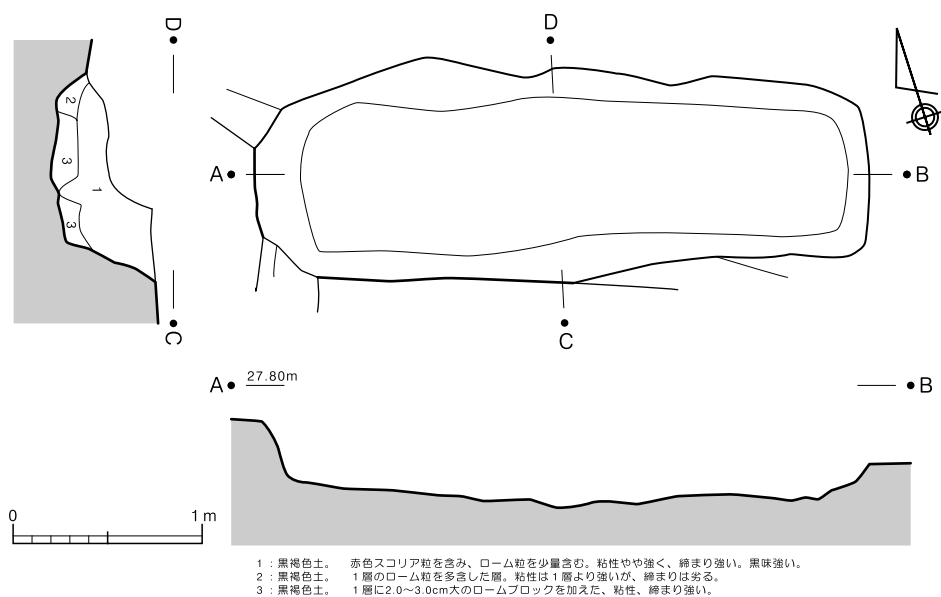
堆積土は標準堆積層I層相当の黒褐色土で、1・2号溝状遺構の堆積土がローム粒を多く含むのに対し、本址の堆積土は黒味が強くなっている。

周壁はほぼV層を垂直に掘り込み、坑底近くでVI層に達している。あまり凹凸は見られないが、東側では溝状遺構との重複の影響でやや乱れている。坑底へとは緩やかに移行し、断面形状はいわゆる鍋底状を呈している。

坑底はVI層中に構築される。細かな凹凸は見られるものの、全体的には平坦で非常に堅緻である。坑底にピットなどの施設は確認されていない。

少量の出土遺物が認められたが、いずれも小片で図示できるものはない。

遺構の性格は不明であるが、その形状から見て陥し穴などの性格ではなく、貯蔵施設になる可能性がきわめて高い。2号溝状遺構との新旧関係は、土層観察により本址が2号溝状遺構に先行して構築されたものとする。



第27図 8号土坑

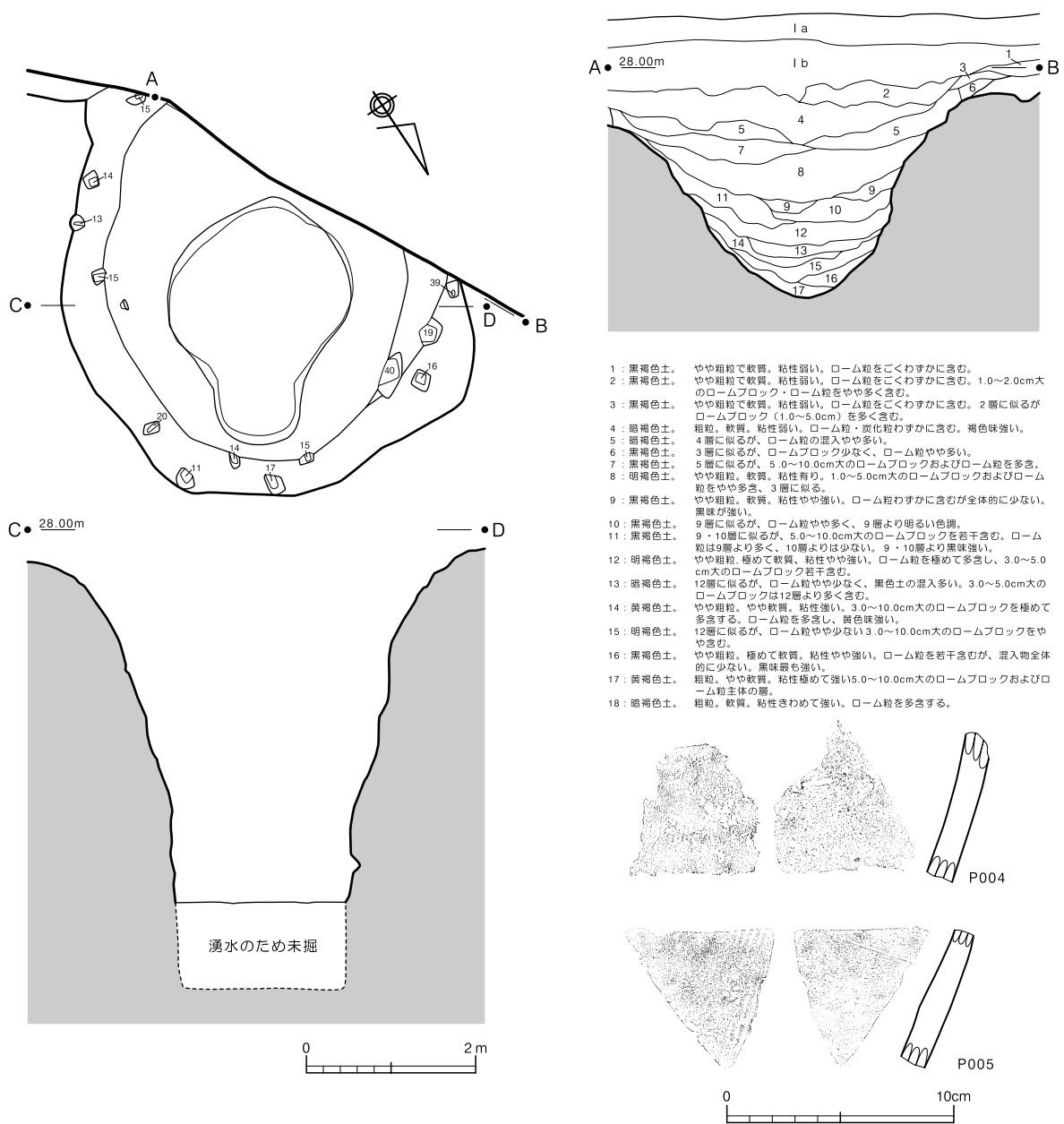
井戸址 (第28図)

本址は、調査区やや南西西寄りのA～B-4～5グリッド、東側で空堀と重複して検出された。確認面はV層中で、遺存状態は良好である。

規模は開口部で3.70×5.20mを測り、平面形状は不整の円形を呈している。遺構の下半部では4.23×4.00mを測る隅丸方形の掘り込みと径2.05mの円形の掘り込みが重複していることが判明した。

堆積土は標準堆積層I層相当の黒褐色土で、ロームブロックを主体とする土層とに大別される。人為的に埋戻されたと考えられるものは確認できず、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

周壁は下方では垂直に掘り込まれ、上方では大きく外側へと開き、断面形状は漏斗状を呈している。地表面から約4m掘削したところで湧水が始まった。また、掘削深度が深くなったため、掘削した堆積



第28図 井戸址

土の排土に困難をきたした。さらに調査区境の壁面部分の堆積土が崩れ落ちる可能性も考えられたため、調査はこの面で終えざるを得なかった。ただし、この面からボーリング調査を行なったところ、底面はこの喫水面から約90cmであることが判明した。また、小型の掘り込み部分はこちらよりやや浅く、70cmとなっている。

掘り込みの上部には径10～20cmほどのピットが13穴確認されている。いずれも掘り込みは浅く柱穴としては不十分である。また、垂直を呈している周壁にも奥行き15cmほどの足掛け穴と考えられるピットが数か所において確認されている。

出土遺物はきわめて少なく、図示できたものはわずかに2片のみである。P004は堆積土から出土した陶器製の甕型土器の胴部破片である。厚さは1.3cmを測り、無文で無釉である。P005も堆積土から出土した陶器製の甕型土器の胴部破片で、厚さは1.1cmを測る。無釉で、外面にタタキ目を施している。

本址は、掘り込みの形状などから推測して井戸として使用されていたもの考える。掘り込み上部に穿たれていたピットについては、井戸の規模が大きく、何らかの施設がなければ水を汲み上げることは容易ではないため、掘り込みの上面に板や柱状のものを渡した際、それらのものを固定した結果できたものと推測される。

遺構の所産時期については、出土遺物が少ないため断定することはできない。しかし、井戸に堆積していた土層は、空堀の堆積土に非常に似通っており、ほぼ同時期に使用されていたものと思われる。また、空堀との重複関係については、ごく一部が重複していたに過ぎなかったため判明していない。

溝状遺構

・1・2号溝状遺構（第29図）

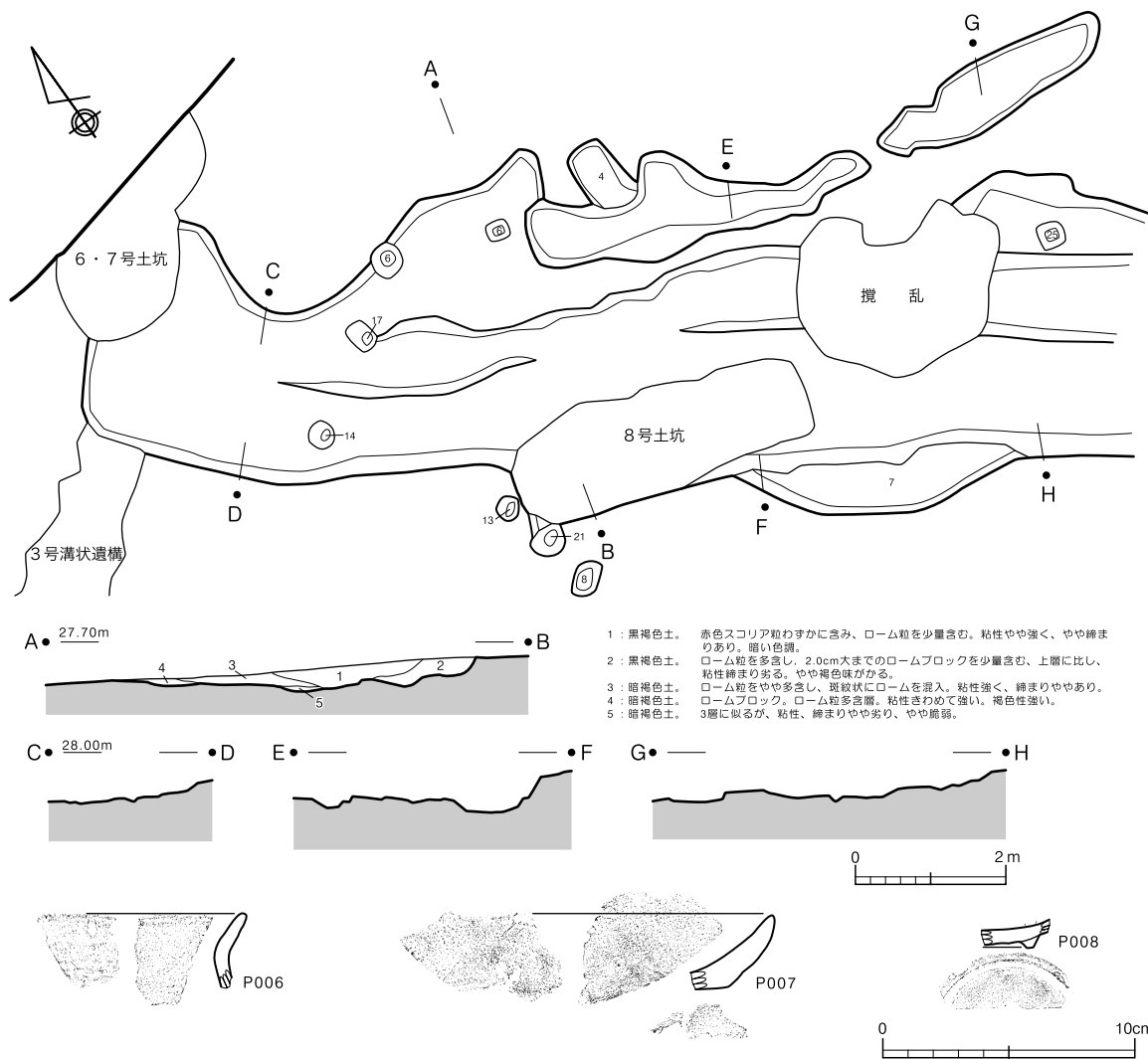
本址は、調査区はほぼ中央のB～C-4～5グリッド付近を東西に延びるように検出された。平成15年度調査で1号溝状遺構と2号溝状遺構としたものが合流した形状で検出された状態となっており、西側で6・7号土坑、3号溝状遺構、中央で8号土坑と重複して検出された。遺存状態は悪くはない。一部では上方からの攪乱を受け破壊されているものの、遺存状態は良好といえる。

この溝状遺構は、V層中において確認された。規模は、開口部で溝幅1.95～3.10m、検出部での長さは最長で約11.00mを測る。1号溝状遺構にあたる部分は斜面の下方に位置し、そのため残存状態も悪く、掘り込みも浅い。

堆積土は標準堆積層のI層相当の黒褐色土で、堆積土中にロームブロックなどを用いた人為的な埋戻しなどは確認されていない。掘り込みの深さは場所により区々であるが、最深では約30cmを測る。遺構確認面はV層中で、掘り込みは浅いが溝底では一部VI層に達しており、また、1号溝状遺構の部分ではIV層の部分があることも確認された。

掘り込みは緩やかで、立ち上がりと溝底の境は非常に緩やかである。ただし、2号溝状遺構の掘り込みの方が若干深くしっかりしている。1号溝状遺構の掘り込みは、断面がいわゆる鍋底状を呈している。また、2号溝状遺構は数条の溝が重複したかのような凹凸を呈しているが、もっとも掘り込みが明確な部分については断面は鍋底状を呈している。

出土遺物は遺構の規模に比例しておらず、あまり出土してはいない。P006は東区の堆積土から出土し



第29図 1・2号溝状遺構

た土師器の甕型土器の口縁部片で、厚さは0.6cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整が施されている。P007は区覆土のかわらけの体部破片で、厚さは0.9cmを測る。ロクロ水引き。P008は西区の堆積土から出土した施釉碗の底部片である。厚さは0.5cmを測り、内外面とも施釉される。ただし、見込みには重ね焼痕がついている。

本址の東側は、平成15年度の調査区と接しており、検出時には2号溝状遺構の続きであると思われた。しかし、精査をしたところ、前回調査の1・2号溝状遺構が合流したものであることが判明した。また、前回調査で検出された時点では2号溝状遺構は土塁と空堀に沿って屈曲している土塁に伴う溝状遺構であると考えられたが、今回の調査の結果、溝状遺構の西側においても北側へと屈曲し、「コ」字状走行していることが判明した。このあたりは北郭の中央部分にあたっており、この溝状遺構の西側に土塁が存在していた可能性は低く、土塁に伴うものではなく、別の性格を有しているものとする。

他遺構との重複関係は、土層観察により6・8号土坑より後出するものと思われる。ただし、3号溝状遺構との重複関係については、堆積土が非常に似通っていたほか、重複部分の堆積土が少なかったため、判明していない。

・ 3号溝状遺構 (第30図)

本址は調査区北西際のA-4グリッドに位置し、南北方向を調査区外へと延ばして検出された。北側で2号溝状遺構・6号土坑と重複し、東側隣には井戸址が存在する。

確認面はV層で、現存する掘り込みは浅いが、調査区境の土層観察によって、かなり上面から掘り込まれていることが判明している。

現存する規模は、開口部で溝幅0.60~1.02m、溝底で0.24~0.42m、長さ2.15mを測り、現存する掘り込みは最大でも0.14mと浅い。

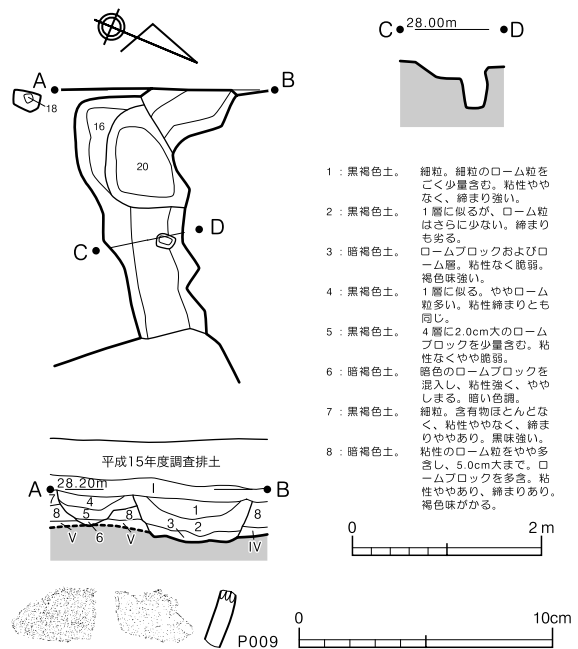
堆積土は標準堆積土I層相当の黒褐色土で、ロームブロックを主体とする層も確認されたが、何れも自然堆積の様相を呈していた。

周壁はやや角度をもって掘り込まれ、緩やかに溝底へと移行している。

溝底はV層中に構築される。ほぼ平坦でわずかに北側へと傾斜している。1か所にピットが確認されたが、本址に直接伴うものかは定かではない。

出土遺物はきわめて少ない。P009は堆積土から出土した土師器の甕型土器の胴部片である。厚さは0.7cmを測り、内外面ともにナデ調整が施されている。

本址は、南側調査区境際で走行方向を変えており、その形状から1・2号溝状遺構と同じような性格を持つものと思われる。また、南側の土層断面においては2条の溝状遺構が重複していることも判明した。本址の構築時期については、残念ながら2号溝状遺構との境の堆積土が薄く、新旧関係を掴むことができなかった。しかし、南側調査区境の土層観察では、井戸址を覆っている土を掘り込んで造られていることから、井戸址よりは後出するものと考えられる。



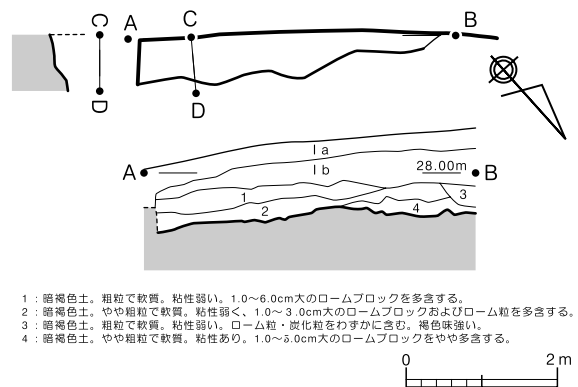
第30図 3号溝状遺構

空堀 (第31図)

本址は平成15年度に調査した空堀の続きで、北側の肩の部分がわずかに検出されたのみである。V層から掘り込まれ、堆積土は標準堆積層I層相当の暗褐色土で、自然堆積の様相を呈していた。

検出部での規模は4.00×0.60mを測る。西側でわずかに井戸址と重複するが、新旧関係を掴むには至っていない。

出土遺物は皆無である。

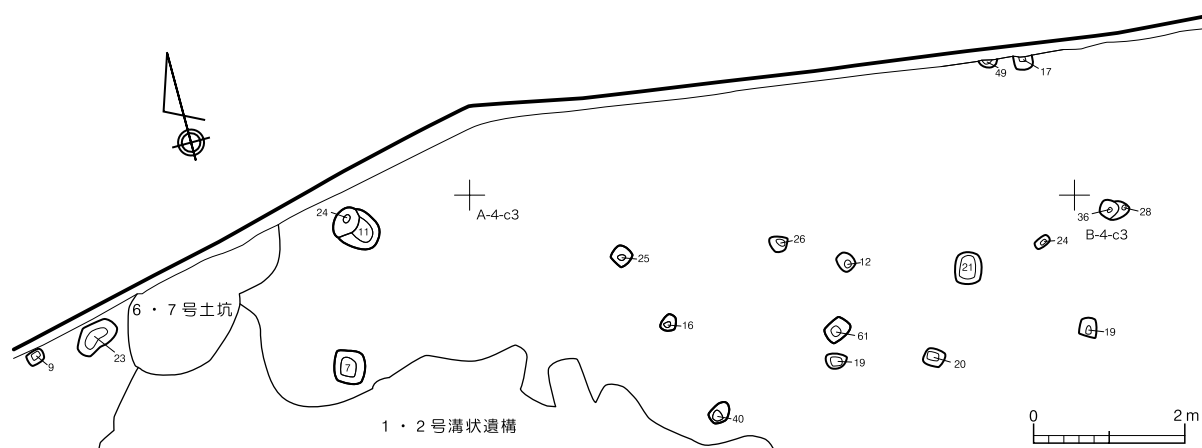


第31図 A区検出空堀

ピット群（第32図）

ここでは、他の遺構に伴わないピットを取り上げた。調査区が広くないためにすべてをまとめてピット群とした。V層中にて確認され、遺存状態はさほど悪くはない。

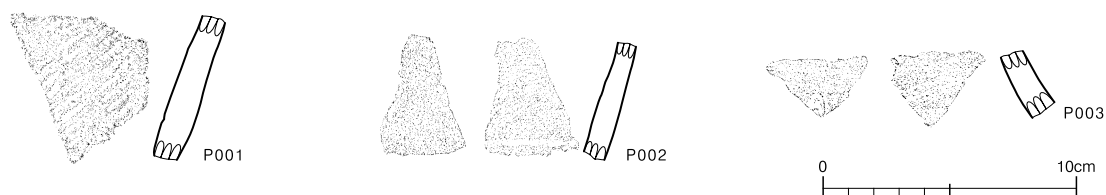
平面形状は区々であるが、四角形を呈しているものが比較的多かった。また、深さも平面形状と同じように区々で、各ピット間にはなんら規則性を見いだすことはできなかった。平成15年度調査で検出されたピット群と比較するとその密度は低く、遺物も皆無であった。



第32図 ピット群

遺構外出土遺物（第33図）

表土除去時など、ごくわずかであるが遺構に属していない出土遺物が見つかっている。時期など特徴があるものは図示した3点のみである。P001はI層出土の縄文土器深鉢形土器の胴部片で、厚さ1.1cmを測る。地文にRの無節縄文を施す。P002はI層出土の甕形土器の胴部破片で、厚さは0.9cmを測る。内面にナデ痕が認められる。P003はI層出土の陶器製甕型土器の胴部片である。厚さは1.0cmを測り、外面に櫛描文が施される。

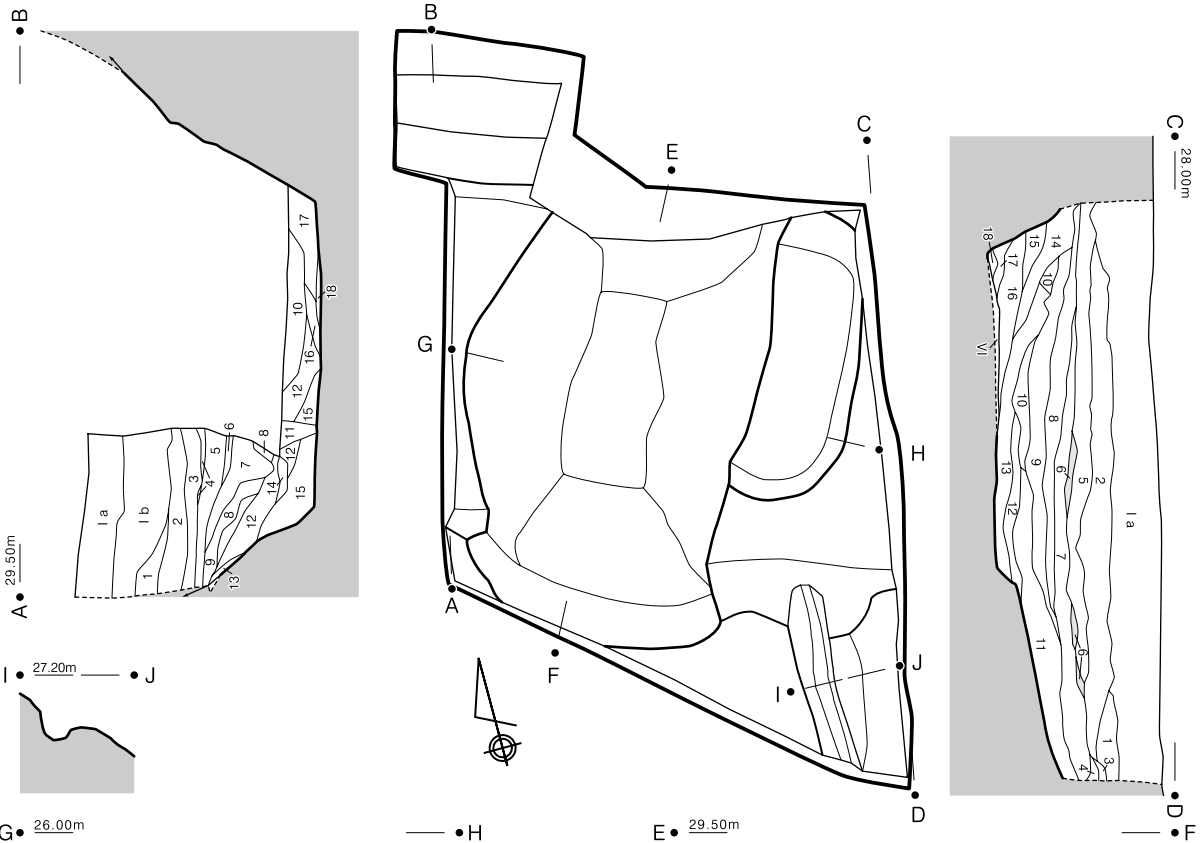


第33図 遺構外出土遺物

〈B区の遺構〉

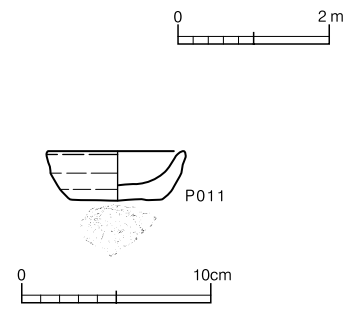
空堀（第34図）

本址はB区全域を占める中郭と北郭の間に造られた空堀で、平成15年度に調査された空堀の東側に続く遺構である。前回の調査においては、空堀の短辺方向の両側立ち上がりを確認することはできなかったが、今回は両側の立ち上がりを確認することができた。この空堀の両側には土塁があるため、空堀の開口部分の幅については明確ではないが、堀底の幅は4.25mを測る。断面形状は逆台形を呈しており、立ち上がりと堀底の境は明瞭できちんと造りあげている。



- A-Bライン土層注記**
- 1: 茶褐色土。粗粒。ローム粒を多量、粒性ほとんどなく、締まりも弱い。脆弱。
 - 2: 暗茶褐色土。極めて粗粒。粗粒のローム粒を極めて多量し、1.0~2.0cm次のロームブロックを多量。
 - 3: 黒褐色土。やや粗粒。ローム粒をわずかに含み、1.0cm次のロームブロックを少量含む。粉末状のカーボンを多量し、全体に黒味強い。
 - 4: 明褐色土。ロームブロックおよびローム。やや締まる。
 - 5: 暗茶褐色土。粗粒のローム粒を多量し、わずかにカーボンを混入、粒性ややなく、締まりややなし。
 - 6: 褐色土。ロームブロックおよびローム層。4層に比し脆弱である。
 - 7: 暗茶褐色土。やや細粒。赤色スコリア粒をわずかに含み、粗粒のローム粒を少量含む。やや黒味を帯びる。
 - 8: 褐色土。粗粒のローム粒を極めて多量し、1.0~2.0cm次のロームブロックを少量含む。粘性ややあるも締まりなく、やや脆弱。
 - 9: 褐色土。8層に似るがブロックは含まない。
 - 10: 褐色土。5.0~20.0cm次のロームブロックを多量、ローム粒。1.0cm次のロームブロックを多量。粘性やや弱く、やや脆弱。
 - 11: 黒褐色土。14層に似るがローム粒多量、やや褐色味がかかる。14層より脆弱。
 - 12: 褐色土。9層に似るが粒子は細かく、やや締まる。
 - 13: 褐色土。ロームブロックおよびローム。崩落土。
 - 14: 黒褐色土。ローム粒を少量含む、粘性はなく、脆弱。
 - 15: 褐色土。12層に2.0~5.0cm次のブロックをわずかに混入。粘性ややある。締まりは同じ。
 - 16: 暗茶褐色土。2.0~4.0cm次のロームブロックをやや多量。ローム粒、カーボンを少量混入。粘性強くやや締まる。
 - 17: 黒褐色土。ローム粒を少量混入し、カーボンをやや多く含む。粘性ややあり、ややしめる。黒味強い。
 - 18: 褐色土。ロームブロックおよびローム層。17層との間にカーボン層が薄く存在する。

- C-Dライン土層注記**
- 1: 暗茶褐色土。ローム粒やや多量し、1.0~3.0cm次のロームブロックを多量する。粘性ややおび、やや締まる。
 - 2: 暗茶褐色土。スコリア粒をわずかに含み、粗粒のローム粒を少量含む。また3.0cm以下のロームブロックもわずかに混入。粘性ややあり、締まりやや有り。1層より強い。
 - 3: 褐色土。5.0cm次のロームブロック主体層。粘性締まりは1層と同じ。
 - 4: 暗茶褐色土。細粒。粉末状ロームをやや多量。やや粘性あり、締まりもやや劣る。あかるい色調。
 - 5: 暗茶褐色土。細粒。粉末状ロームをやや多量。粗粒のローム粒もわずかに混入。粘性・締まりは4層と同じ。
 - 6: 黒褐色土。やや粗粒。至多火山灰を主体とする。北面ではやや量が劣り、黒褐色土の割合がまず。
 - 7: 暗茶褐色土。細粒。5層とほぼ同性状。6層より締まり強い。
 - 8: 暗茶褐色土。粗粒。粗粒のローム粒を多量し、粉末状のロームを極めて多量。粘性ややなく締まりややあり、やや褐色味がかかる。
 - 9: 暗褐色土。粗粒。ローム粒は8層より少量で、1.0~4.0cm次のブロックをわずかに混入。上層に比し締まり劣る。黒味を帯びる。
 - 10: 黒褐色土。西壁の3層(カーボン層)。
 - 11: 明褐色土。細粒。細粒のローム粒。粉末状をきわめて多量。1.0~2.0cm次のロームブロックを多量。粘性ややあり、締まりあり。西壁の8層に比定。
 - 12: 暗褐色土。細粒。赤色スコリア粒を含む。ローム粒を少量含む。粘性極めて強く締まりも強い。暗い色調。
 - 13: 明褐色土。細粒。1.0cm次のロームブロックおよびローム主体土。粘性強く、締まりも強い。褐色味を帯びる。
 - 14: 明褐色土。13層に似る。ブロックは5.0cm次まで含み、締まりやや劣る。西壁は12層に比定。褐色味強い。
 - 15: 暗褐色土。14層とはほぼ同性状だが、締まりなく、やや脆弱。
 - 16: 暗褐色土。細粒。スコリア粒を含み、2.0cm次のロームブロックを少量含む。粘性ややあり、締まりやや劣る。
 - 17: 明褐色土。15層と同性状。締まりは増す。
 - 18: 黒褐色土。細粒。ローム粒および1.0cm次のロームブロックを少量含む。カーボンを少量含む黒味の強い。粘性やや強く、締まりややあり。



第34図 B区検出空堀

堆積土は標準堆積層Ⅰ層相当の黒褐色土とロームブロック主体とする層とに大別され、何れも自然堆積の様相を呈していた。また、調査区の東壁では堆積土の一部に宝永火山灰層が堆積しているのが確認されている。

空堀の南北方向の立ち上がりはやや角度をもって設えられている。ローム層中に構築され、直線的に立ち上がり凹凸はみられない。

堀底はⅥ層中に構築される。平坦に設えられているが、東側では堀底レベルが若干低くなっている。

この堀底には、堀底レベル付近における開口部の規模は5.50×3.80mを測り、底面で2.55×1.20m、深さ2.30mを測る断面形状が短辺・長辺ともに逆台形を呈するの掘り込みが設けられていた。上方はローム層中に構築されるが、底面近くでは粘土質のロームも確認されている。また、この掘り込み内はロームによって人為的に埋め戻され、硬く締まっており、地山層と区別が付かないほどであった。

さらに、中郭と東郭との間に存在する南北に走る空堀の肩部分が検出されている。こちらの空堀は、大部分が調査地点から外れているためその様子ほとんど分からなかった。一部は後世に改変され、溝幅40～50cm、深さ50cmほどの幅細の溝状遺構が南北方向に設えられていた。この溝状遺構は、調査区の東側の土層で確認された宝永の火山灰層と検出レベルが近く、火山灰が降灰していた時期の周辺に構築された可能性が考えられる。

出土遺物はほとんどなく、何れも小片であった。図示できるものは1点のみで、P011は排土中にて採取した遺物である。口径は(7.4)cm、底径が(5.0)cm、器高は2.7cmを測るかわらけで、底面に回転糸切痕が認められる。

本址の構築時期については、直接この遺構に伴う出土遺物がないため不明であるが、掘り込みの形状などから空堀となることは間違いない。

この空堀は、調査区の中だけでも約3.60mの高低差があり、現状の北郭の土塁から空堀底面までの高低差は約5.84m、中郭の土塁からは約10.10mとなっている。

〈C区の遺構〉

3号住居址（第35図）

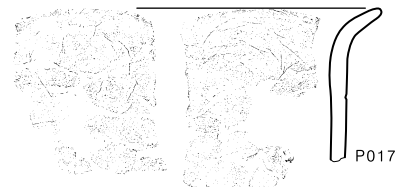
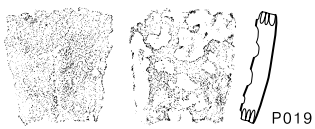
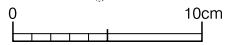
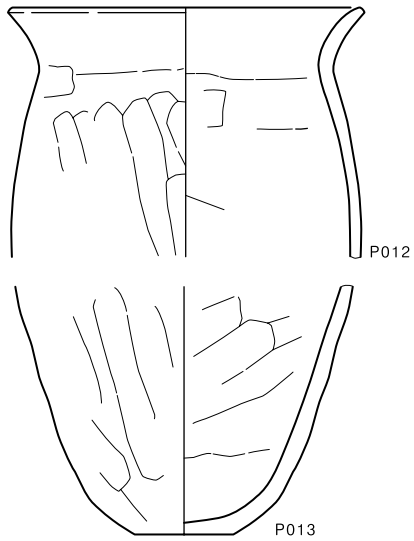
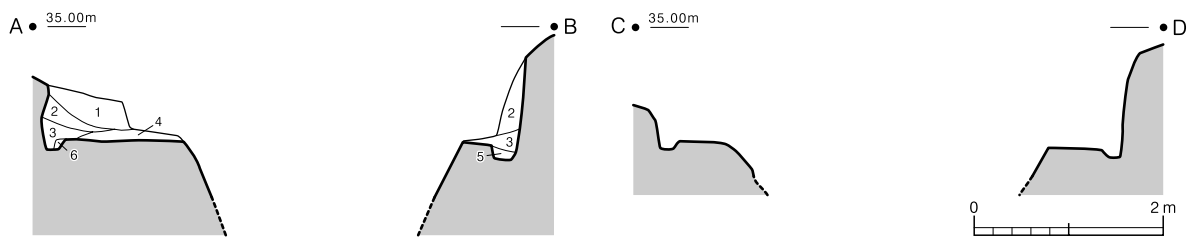
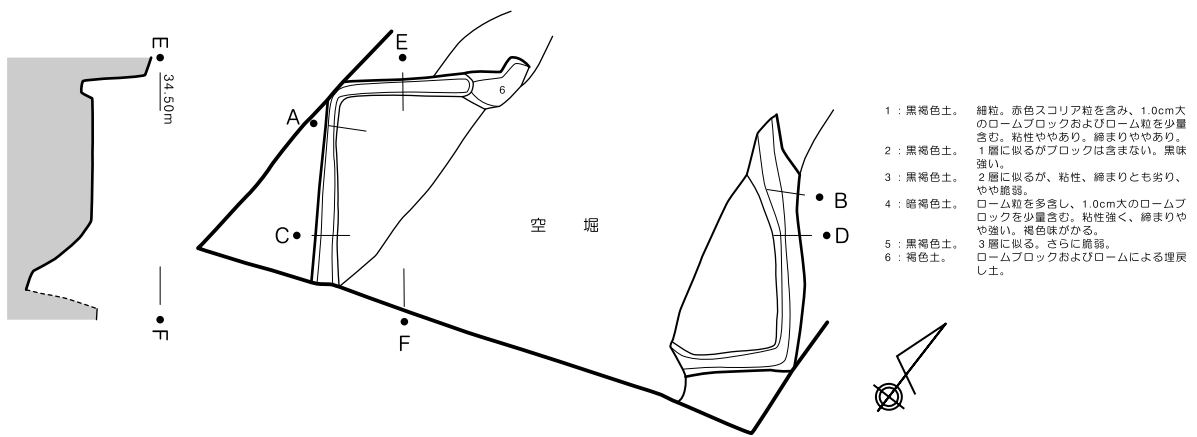
本址は、調査区の南寄りに位置し、その中央の大部分を空堀によって破壊され、空堀を跨ぐような状況で検出されているため、遺存状態はきわめて悪い。

検出時には、空堀の一部であると思われたが、遺物が集注して出土していたことと、床面の一部が検出されたため、住居址であることが判明した。

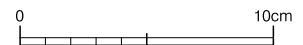
確認面はⅤ層中で、現存する規模は5.10×3.30mを測り、平面形状は長方形を呈している。現存する掘り込みは最も残存している部分で1.10mと深く、空堀と重複していなければ遺存状況は良好なものであった。

堆積土は標準堆積層Ⅱ層相当の黒褐色土で、何れも自然堆積の様相を呈していた。

周壁は、東側の上半でやや外側に広がる程度で、ほぼ垂直に掘り込まれていた。ほとんど凹凸はなく、直線的に立ち上がる壁面の下には幅15～40cm、深さ5cmほどの壁溝が巡らされている。残存部からみて全周してると推測される。



*P014~P017は1/4



第35図 3号住居址

床面はV層中に構築される。ほぼ平坦かつ堅緻で、貼床ではなく直床となっている。この床面上からは柱穴は1か所も確認されていない。

壁面の北側にはカマドを構成する粘土がわずかに残存していたが、その大半は空堀によって破壊され、掘り方もごく一部が残存しているにすぎず、その形状を推測することも叶わなかった。

出土遺物は、カマドの周辺を中心に甕型土器などの遺物が比較的まとまって確認された。P015を除き、南区の堆積土中から出土したもので、P018・P019はカマドの周辺から出土した遺物である。すべて土師器の甕型土器の資料である。P012は口径(18.8)cm、胴径(18.4)cm、器高(13.3)cm、厚さ0.6cmを測る。口縁の内外面にはナデ調整が施され、胴部は外面がタテのケズリ、内面がヨコ方向のヘラナデとなっている。内外面ともに一部に煤状の黒色物が付着している。P013は器高が(13.2)cm、底径5.2cm、厚さが0.9cmを測るもので、外面はタテのケズリで、内面にはナデ調整が施されている。P012の下半部の可能性がある。P014は口径(22.4)cm、厚さ0.8cmを測るもので、口縁の内外面にヨコナデ。胴部の外面はタテのケズリ調整が施されている。器面(特に内面)は蚕食状に剥落している。P015は空堀の堆積土中から出土したものであるが、本址から混入したものと思われる。口径は(21.0)cm、厚さは0.6cmを測る。外面口縁がヨコナデ、胴部がタテのケズリ調整で、内面にはナデ調整が施される。最大径は口縁にもつ。P016は口径が(18.4)cm、厚さ1.0cmを測る。外面は口縁がヨコナデで、胴部がタテケズリ調整、内面にはヨコナデ調整が施されている。P017は厚さ1.0cmを測る胴部片で、外面はタテのケズリ、内面がナデ調整となっている。P018は厚さ0.6cmを測る胴部片で、外面はタテケズリ、内面にはヨコナデ調整が施されている。P015と同一個体と思われる。P019は厚さ0.7cmを測る胴部片である。外面はタテ方向のケズリで、内面はナデ調整となっている。内面は蚕食状の爆ぜ痕が顕著である。

本址の構築時期は、その出土遺物の特徴から7世紀の前半代と考える。また、空堀との新旧関係は、本址が空堀に先行して構築するものとする。

空堀(第36図)

本址は調査区ほぼ中央を南北に走行する遺構で、南側で3号住居址、中央で土塁と重複している。

確認面はV層中で、堀幅は上面で2.90~3.80m、底面で1.10~1.35mを測る。検出部での長さは6.80mとなっている。遺存状態は良好である。

堆積土は、標準堆積層I相当の黒褐色土およびロームブロック主体土に大別される。ロームブロック主体層も人為的に埋め戻されたものではなく、何れも自然堆積の様相を呈していた。

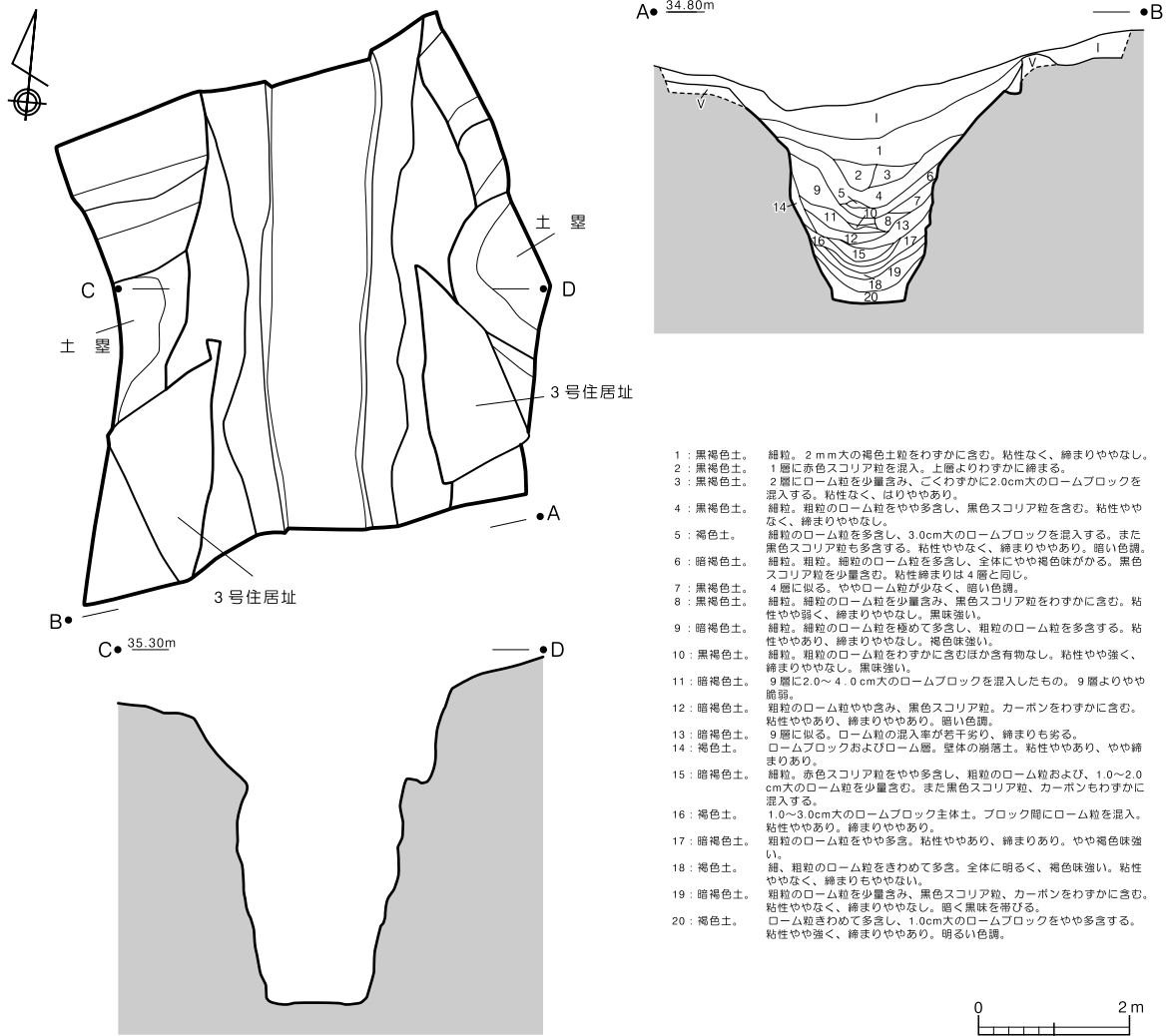
掘り込みはV~VI層中に構築される。下方においては70度近い勾配立ち上がるものの、確認面近くでは一旦稜を有し、それより上面では大きく開いている。また下方についても若干の凹凸を呈している。

堀底はほぼ平坦で、わずかに南側に傾斜していた。掘り込みの深さは、確認面から約2.80~3.80mとなっている。

出土遺物は他の地点の遺構よりは多かったが、その大半は重複する竪穴住居址の覆土中に混入していた遺物であった。

この空堀の東西方向には土塁が築かれている。現状では空堀がこの土塁を切っているような状況を呈していた。この掘り切り状のものが後世のものかどうかを確認することも今回の調査の目的の一つである。

ったが、調査の結果、土塁を切って空堀が構築されていることが判明した。また、残存している土塁も、中郭側においては、後世の土地利用に際し、数回によって削られていることが確認された。



第36図 C区検出空堀

第4章 まとめ

平成15年度調査および平成17年度調査の2回にわたる本発掘調査によって、3軒の竪穴住居址、1基の竪穴状遺構、8基の土坑、3条の溝状遺構、1か所の道路状遺構、3か所の硬化面、2か所の土塁、2か所の空堀、1基の井戸址、1か所のピット群が検出された。以下に2回の調査による成果をまとめる。

城址関連外遺構について

弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の住居址がそれぞれ1軒ずつ調査された。また、住居址とは認定できなかったが、弥生時代後期に属すると考えられる竪穴状遺構も1基確認されている。遺跡の位置する横浜市都筑区茅ヶ崎町周辺には数多くの遺跡が調査されており、茅ヶ崎城址のすぐ東側の綱崎山遺跡でも同時期の住居址が調査されている。おそらく、この茅ヶ崎城址のある丘陵にも集落が展開していたものと思われる。これらの集落址は茅ヶ崎城築城に伴う大規模な造成によって、その大半が失われてしまったのであろう。

北郭のある部分では、元々緩やかな斜面地であったところを、斜面の上方にあたる南側部分を削り出して平坦面を造り出したものと考えられる。このため、南側ではほとんど該期の遺構が検出されず（残存しておらず）、北側に寄った部分（今回弥生時代後期の竪穴住居址が検出された場所）では遺構が壊されることなくそのままの状況で残存していたのである。このことは平成10年度の調査においても同時期の住居址が北郭縁辺で調査されていることから裏付けられている。また、中郭においても竪穴住居址が検出されたことで、築城以前には丘陵全域に大規模な集落存在していたことが推測される。

城址関連遺構について

北郭の土塁は、調査以前では、土塁の中程が細く直線的に造られているような状況を呈していた。しかし、調査の結果、地表での形状とは異なり、北の方向に屈曲して延びていたことが判明した。土塁の基礎は削平面上にロームブロックに中郭側より突堤状にしながらかまされてきたことが判明した。また、土塁を積み上げる際には明確な版築は施されてはいなかった。しかし、土塁の構築土の崩落を防ぐ目的に使用されたと考えられるピットがいくつか確認されている。これらのピットは、いわゆる柱穴様ではなく先端が細くなっており、杭を打ち込んだような形状を呈していた。また、規則的には並んでおらず、2、3穴が対になって使用されたものと思われる。土塁の構築土に版築を施した様子が窺えないことから、こういった方法で簡易な土留め様の養生を施し、崩落に対して対応をしたことは十分考えられる。

北郭内からは井戸址が検出されている。開口部で5m近くもある大型の井戸で、過去の調査では郭内からは検出されていなかった遺構のため貴重な発見となった。調査時が秋の降雨時期であったこともあがるが、井戸からの湧水量はきわめて多かった。この様子から察するに、使用していた時はかなりの量の水を確保することができたものと考えられる。ちなみに、遺構確認面のロームから底面まですべてに水が溜まっていたと仮定すると、約19.6m³もあり20l用ポリタンクで980本分にも達する。この井戸の周囲には、ごく浅いピットがいくつか見つかっており、井戸を使用する際の横板や梁などを渡した簡素な施設が設

けられていた可能性が考えられる。しかしながら、住居址における支柱穴のような明確なものを確認するに至っておらず、横板や梁などを渡した簡素な施設が設けられていた可能性が考えられる。

中郭と北郭を隔てる空堀は他の郭間に存在する空堀とは形状や規模が異なっている。かなり幅広で、両側の立ち上がりも直線的になっている。この形状の違いは、構築時期が異なるためと考えられているが、空堀を造り直した形跡を掴むことはできなかった。しかし、B区においては、空堀底面にさらに逆台形状の掘り込みが設けられていることが判明した。これは、空堀と土塁によって郭内への侵入を拒むだけではなく、異なる空堀が接する部分近くにさらにこのような施設を設けることで、より堅牢な守りとしたものではないかと推測される。ただし、今回の調査区外の空堀が交わる部分（コーナー）に同様の施設があるかは不明である。この掘り込みは埋戻しが行なわれており、この埋戻しが空堀の新旧関係に伴うものか今後の成果に期待したい。

C区で検出された空堀は、郭を分断するように設えられているもので、城址関連遺構で最も新しい施設であることが分かっている。今回の調査区では、この中堀が土塁と重複している部分にあたっており、残存土塁と中堀との関係を掴むことができた。すなわち、この中堀は土塁を断ち切って南側へと延びていることが分かった。既存の土塁を壊してまで造られている堀には、中郭部分に土塁が造られておらず、その他部分の空堀や土塁が堅牢であるのに対してやや脆弱な感があることから、この堀が完成していないことがうかがえる。

中郭からはこのほかに溝状遺構などの遺構が検出されている。溝状遺構のうち2号溝状遺構は「コ」字状に展開していることが判明した。この溝状遺構は平成15年度調査で、その構築位置と形状から考え、北郭と中郭を隔てる空堀の北側に存在していたであろう土塁の裾部分に土塁に沿って設えられていた遺構の可能性が考えられた。しかし、平成17年度調査によってこの溝状遺構は、郭の中程で北側に展開していることが判明したため、土塁とは直接関係しない遺構である可能性が強くなった。また、「コ」字状に区画していることを考えると区画内に何らかの施設が存在していた可能性は考えられるが、これまでの調査では確認されていない。これらのほかには中世期の所産と考えられる土坑4基が検出されているが、建物址と思われる柱穴や掘り込みは確認されていない。

今回の発掘調査で公園化に伴う発掘調査は一応調査を終了することとなった。いまだ、茅ヶ崎城址については解明できていない点は多々あるが、これらの疑問は、もはや部分的な調査では解明できるようなものではなく、広範囲の発掘調査を実施しなければ、その全容は到底掴めるものとは思えない。公園となれば、今後大規模な調査をすることは望めないが、これだけ開発の進んでいる地域にあって、中世の様相をそのままの状態を残していただけるだけでも幸いなかもしれない。

《参考文献》

- 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 2000 茅ヶ崎城址Ⅲ
新人物往来社 1980 『日本城郭大系』第6巻千葉・神奈川

写真



扉写真 遺構精査風景



写真1 遺跡遠景



写真2 調査前全景（南西より）



写真3 調査前全景（北西より）



写真4 表土除去作業風景



写真5 5号土坑（西より）



写真6 2号住居址（南より）



写真7 2号住居址炉址（南東より）

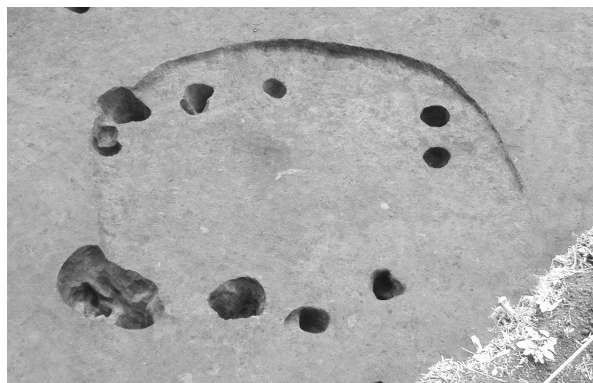


写真8 1号竪穴状遺構（西より）



写真9 1号住居址(南より)



写真10 1号住居址カマド(検出状況)



写真11 1号住居址カマド調査風景



写真12 1号住居址カマド(完掘状況)



写真13 1・2号溝状遺構調査風景(北より)



写真14 1・2号溝状遺構(北より)



写真15 1号溝状遺構(北より)



写真16 2号溝状遺構(西より)



写真17 1号土坑（北西より）



写真18 2号土坑（南西より）



写真19 3号土坑（北より）



写真20 遺構掘削作業風景



写真21 4号土坑調査風景（北より）



写真22 4号土坑（北より）



写真23 遺構精査状況



写真24 土壘全景（南より）



写真25 土塁（南西より）

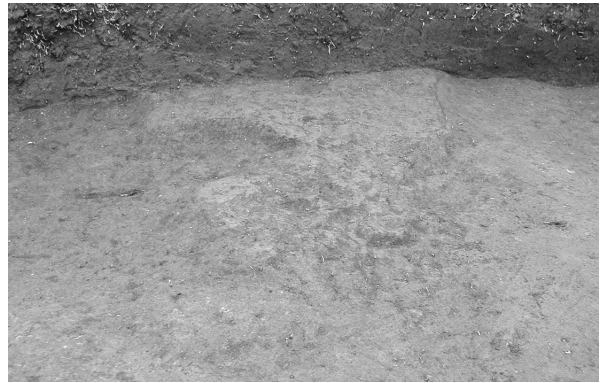


写真26 土塁硬化面



写真27 土塁北区内硬化面



写真28 道路状遺構（南西より）



写真29 D-2グリッド硬化面（南より）



写真30 D-3グリッド硬化面



写真31 下部遺構確認作業風景



写真32 空堀掘削風景

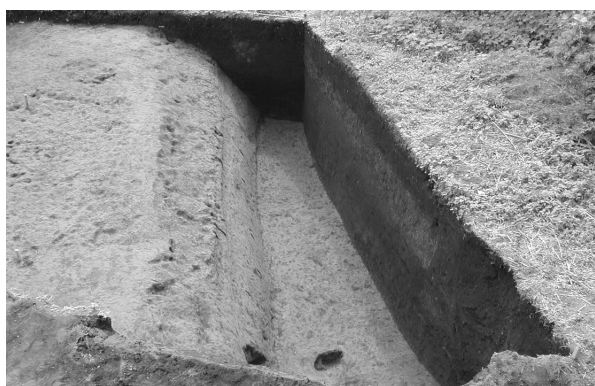


写真33 空堀（西より）

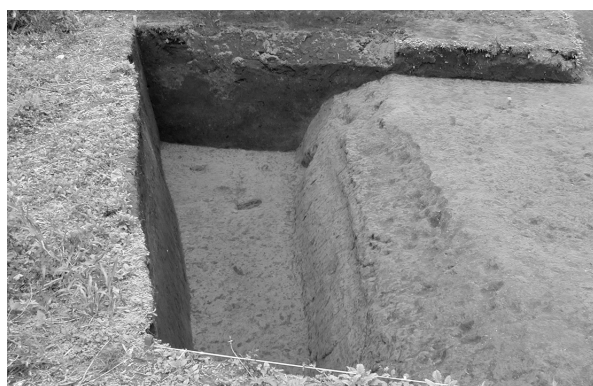


写真34 空堀（東より）



写真35 調査区全景（南より）



写真36 調査区全景（北より）



写真37 下部調査面全景（南より）



写真38 下部調査面全景（北より）



写真39 平成15年度出土遺物保管状況



写真40 見学会風景



写真41 調査前A区全景（西南より）



写真42 調査前A区全景



写真43 測量作業風景



写真44 表土除去作業風景



写真45 表土除去および遺構確認作業風景



写真46 6・7号土坑（東より）

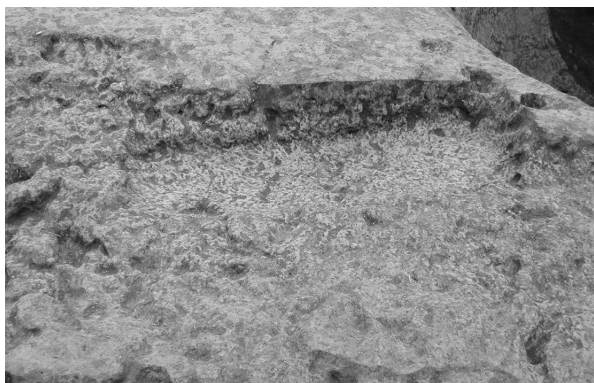


写真47 8号土坑（北より）



写真48 井戸址（西より）



写真49 井戸址 (東より)



写真50 溝状遺構 (東より)



写真51 3号溝状遺構 (北より)



写真52 空堀 (北より)



写真53 遺構掘削風景



写真54 A区全景 (西より)



写真55 A区全景 (北東より)



写真56 B区調査前全景 (西より)



写真57 B区調査前全景



写真58 B区空堀（北西より）



写真59 B区空堀内掘り込み



写真60 B区空堀（土塁より）



写真61 B区空堀（東より）



写真62 B区全景（西より）



写真63 測量作業風景



写真64 C区作業前全景

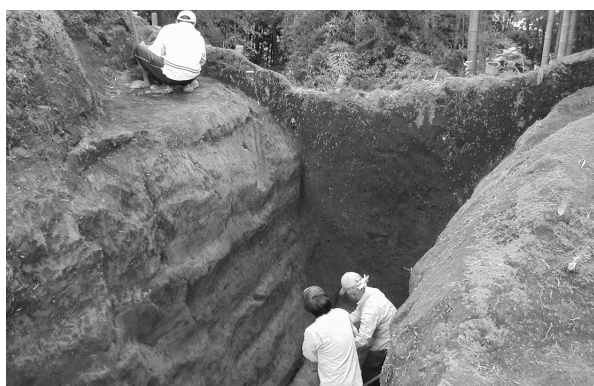


写真65 C区測量作業風景



写真66 3号住居址（北より）



写真67 3号住居址（北より）

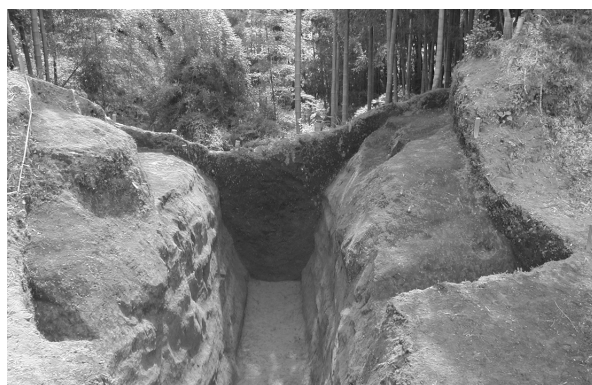


写真68 C区全景（北より）



写真69 C区全景（東より）

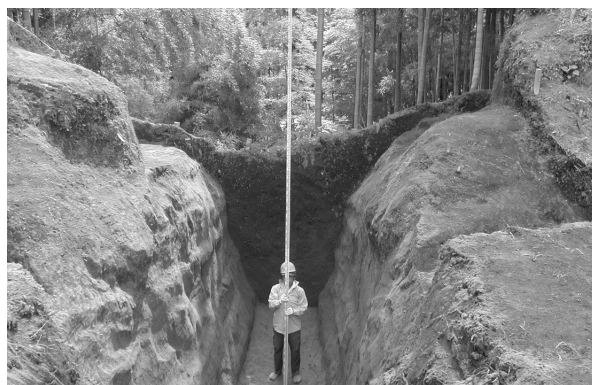


写真70 測量作業風景



写真71 埋め戻し作業風景



写真72 平成17年度出土遺物保管状況

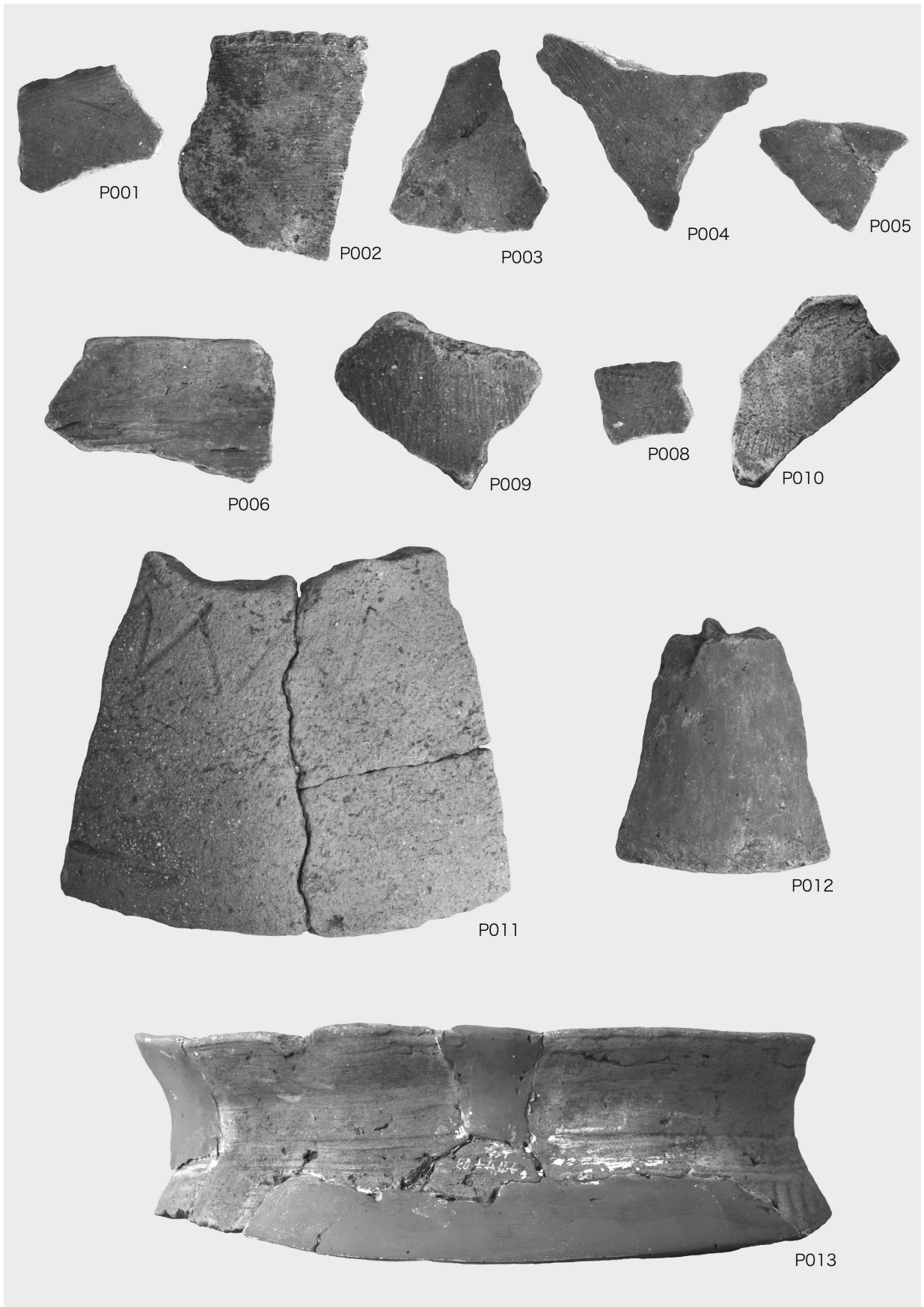


写真73 出土遺物1 (平成15年度出土遺物1)



写真74 出土遺物2 (平成15年度出土遺物2)

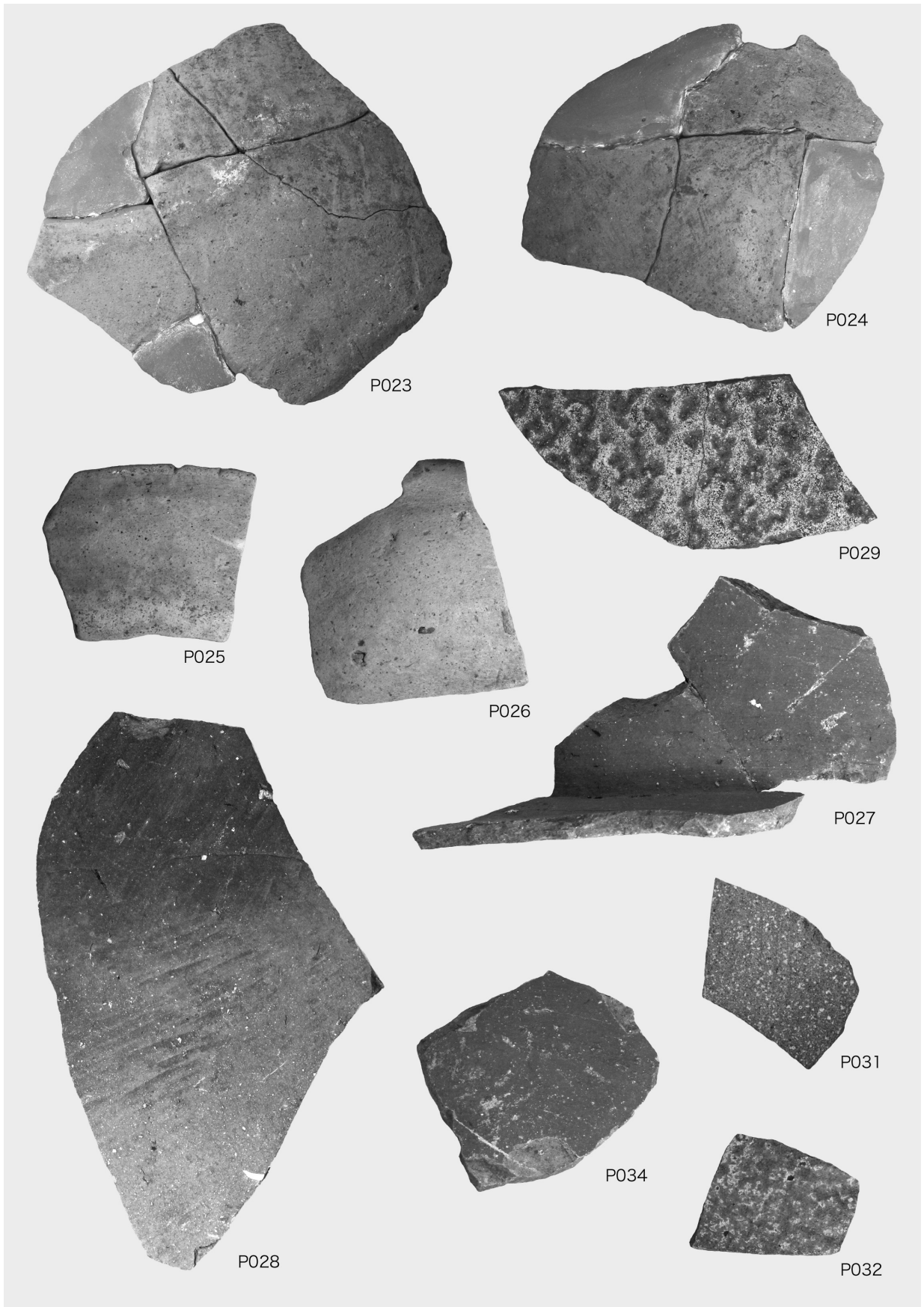


写真75 出土遺物3 (平成15年度出土遺物3)

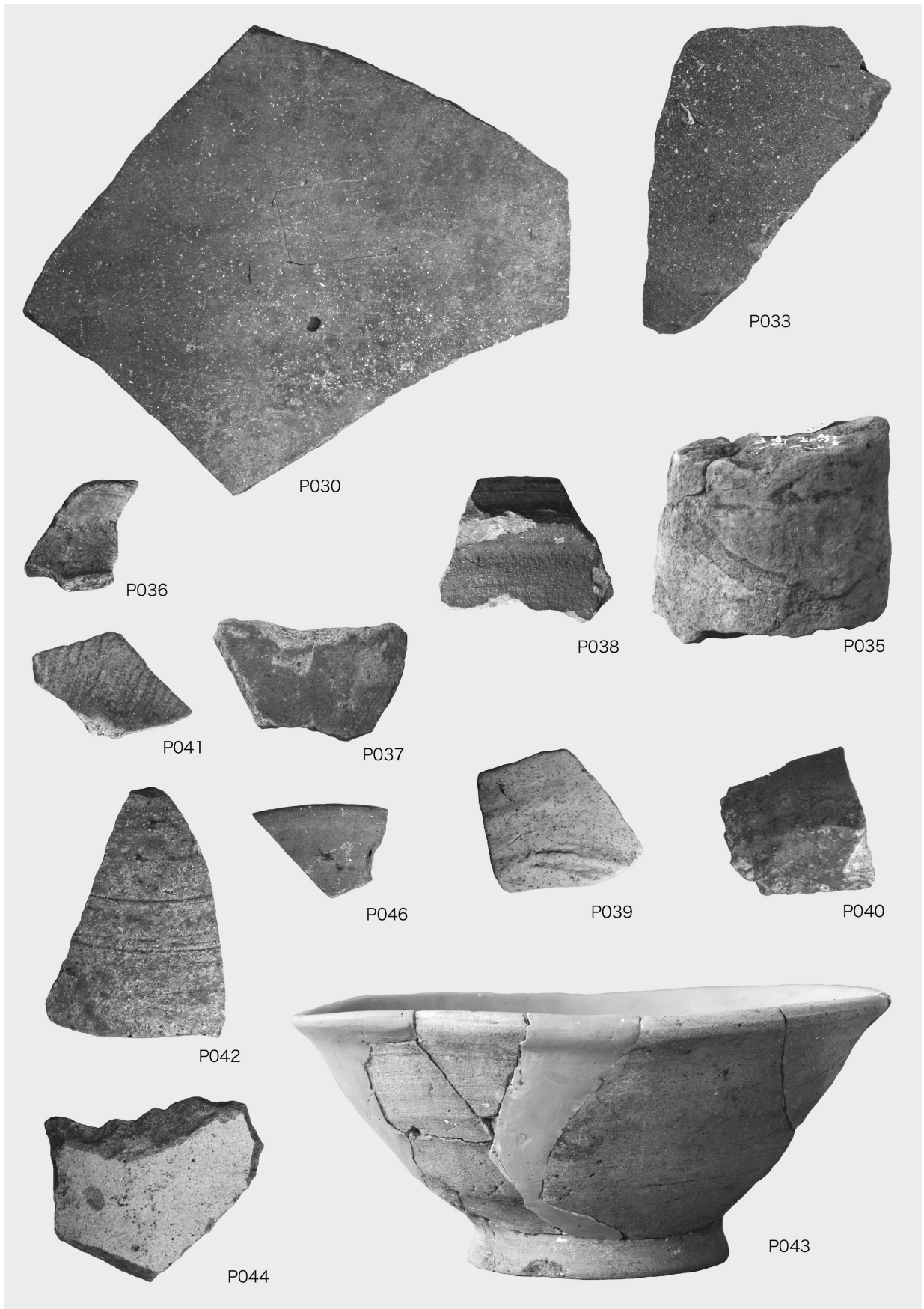


写真76 出土遺物4 (平成15年度出土遺物4)

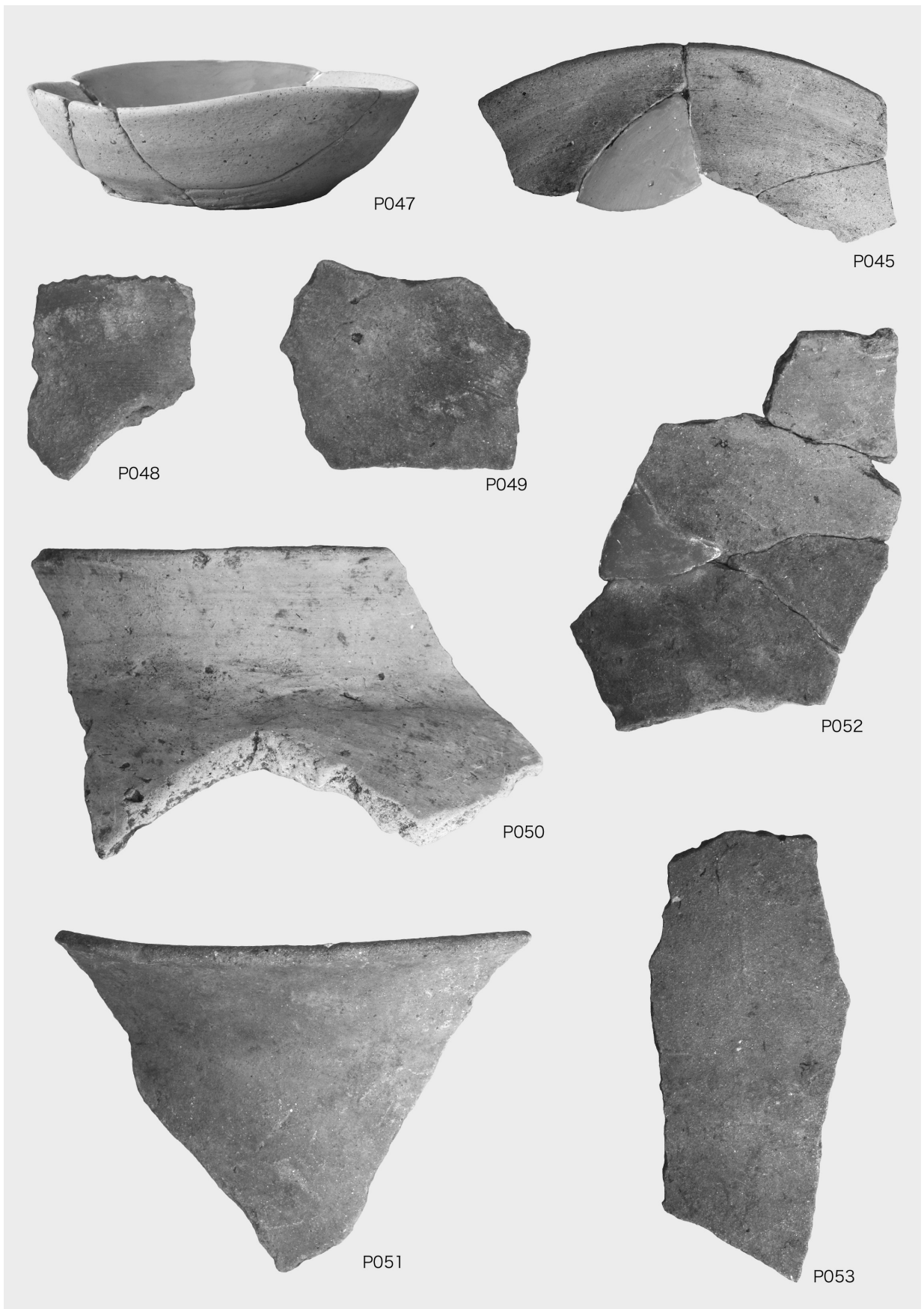


写真77 出土遺物5 (平成15年度出土遺物5)

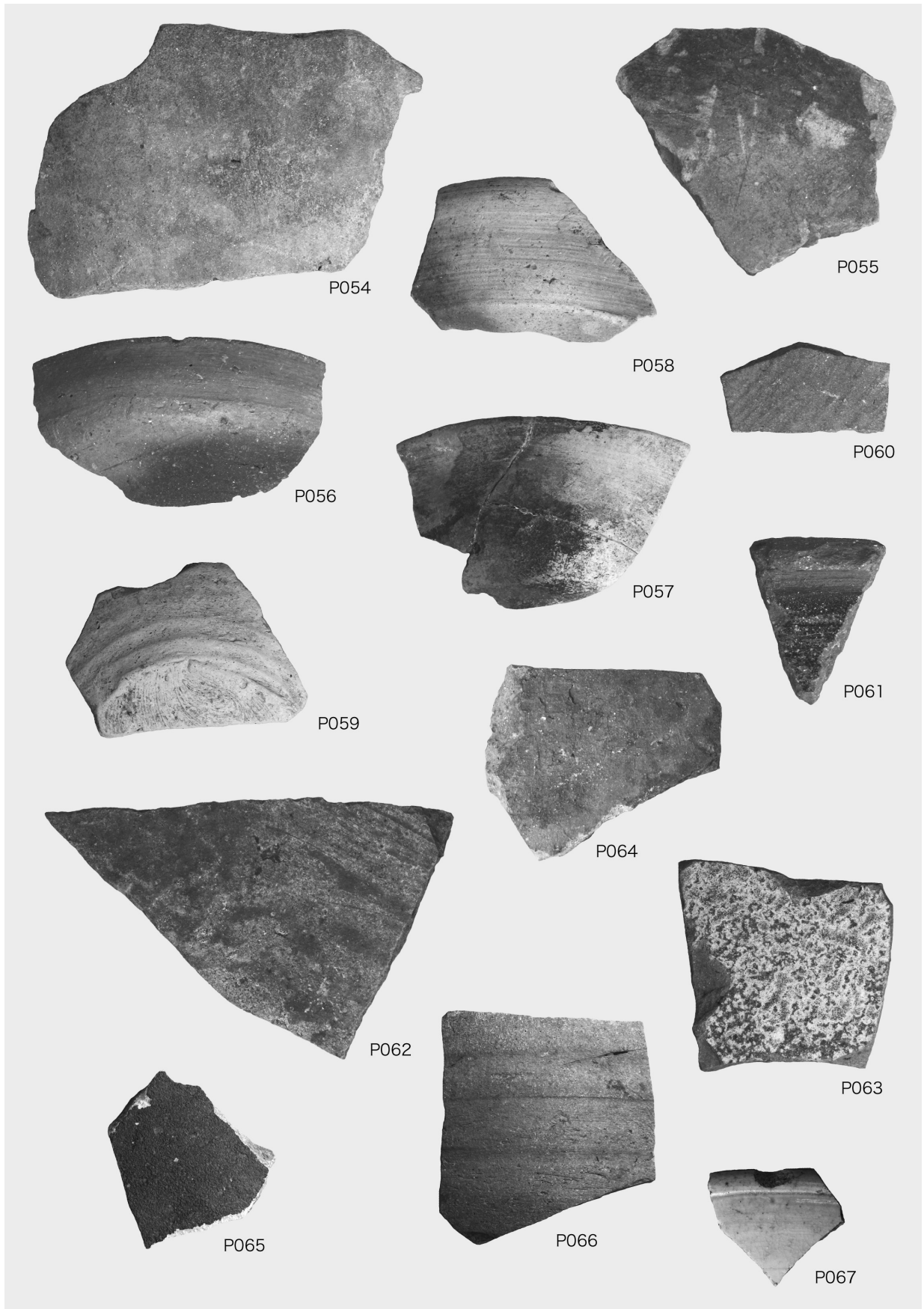


写真78 出土遺物6 (平成15年度出土遺物6)

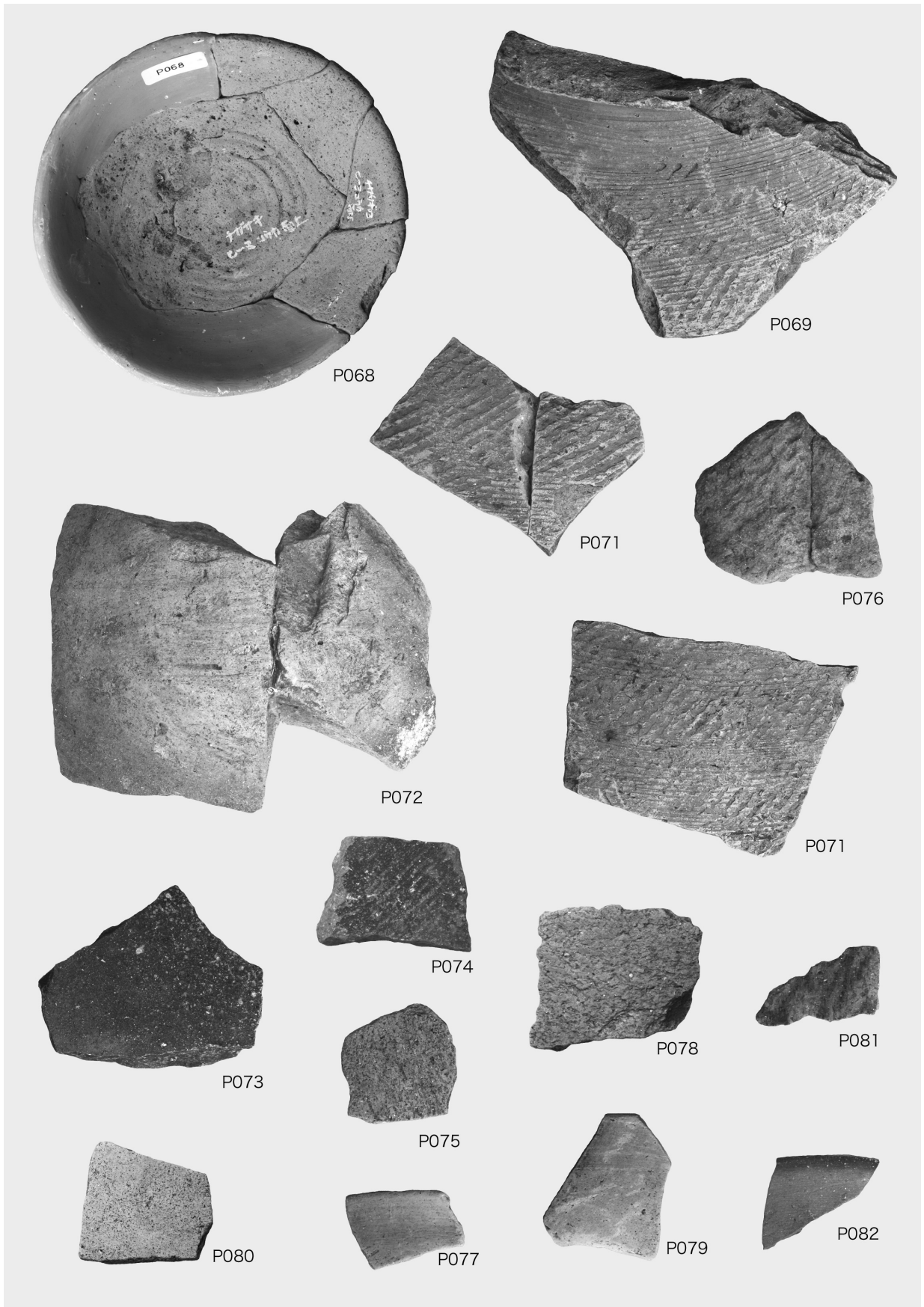


写真79 出土遺物7（平成15年度出土遺物7）

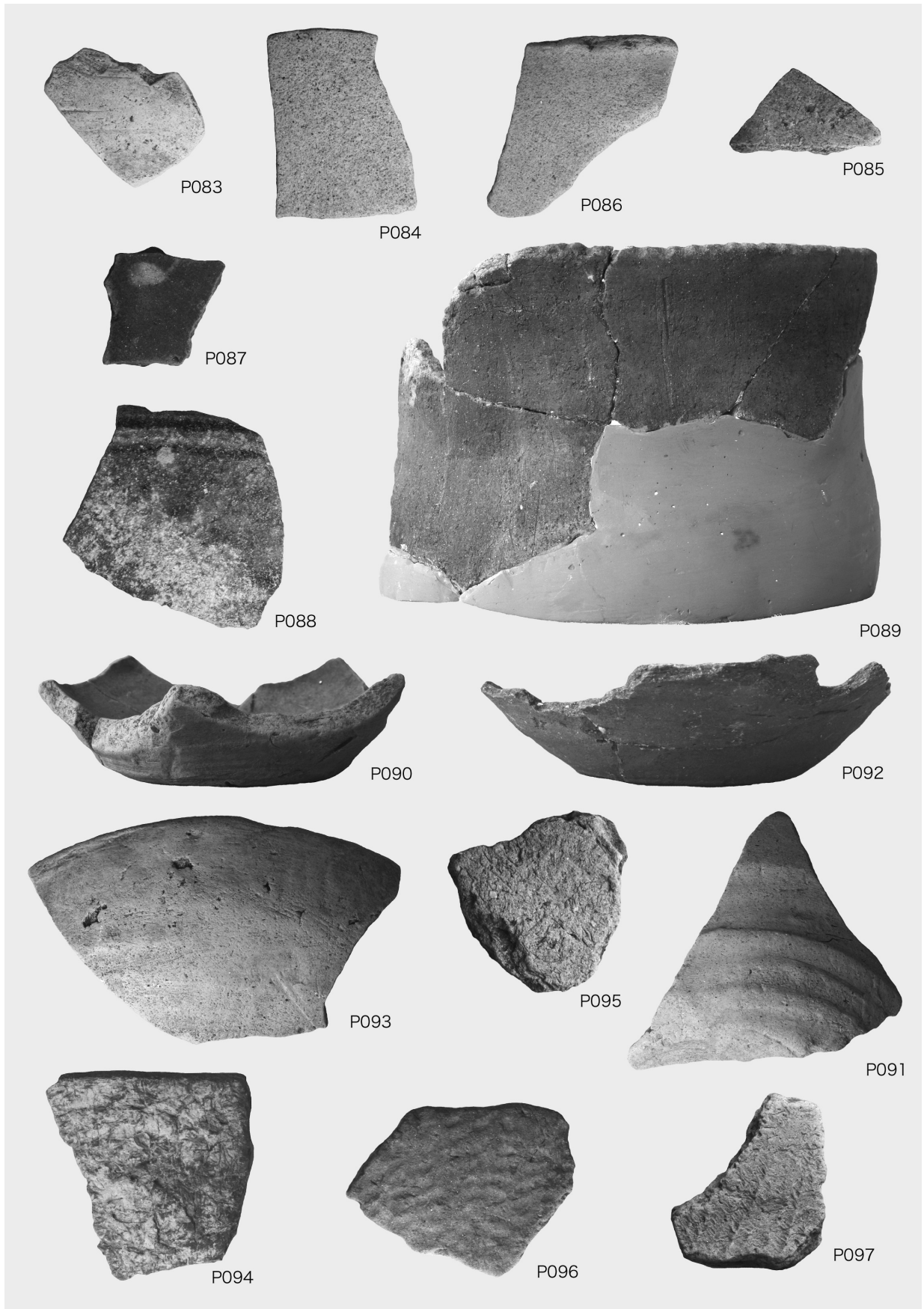


写真80 出土遺物 8 (平成15年度出土遺物 8)

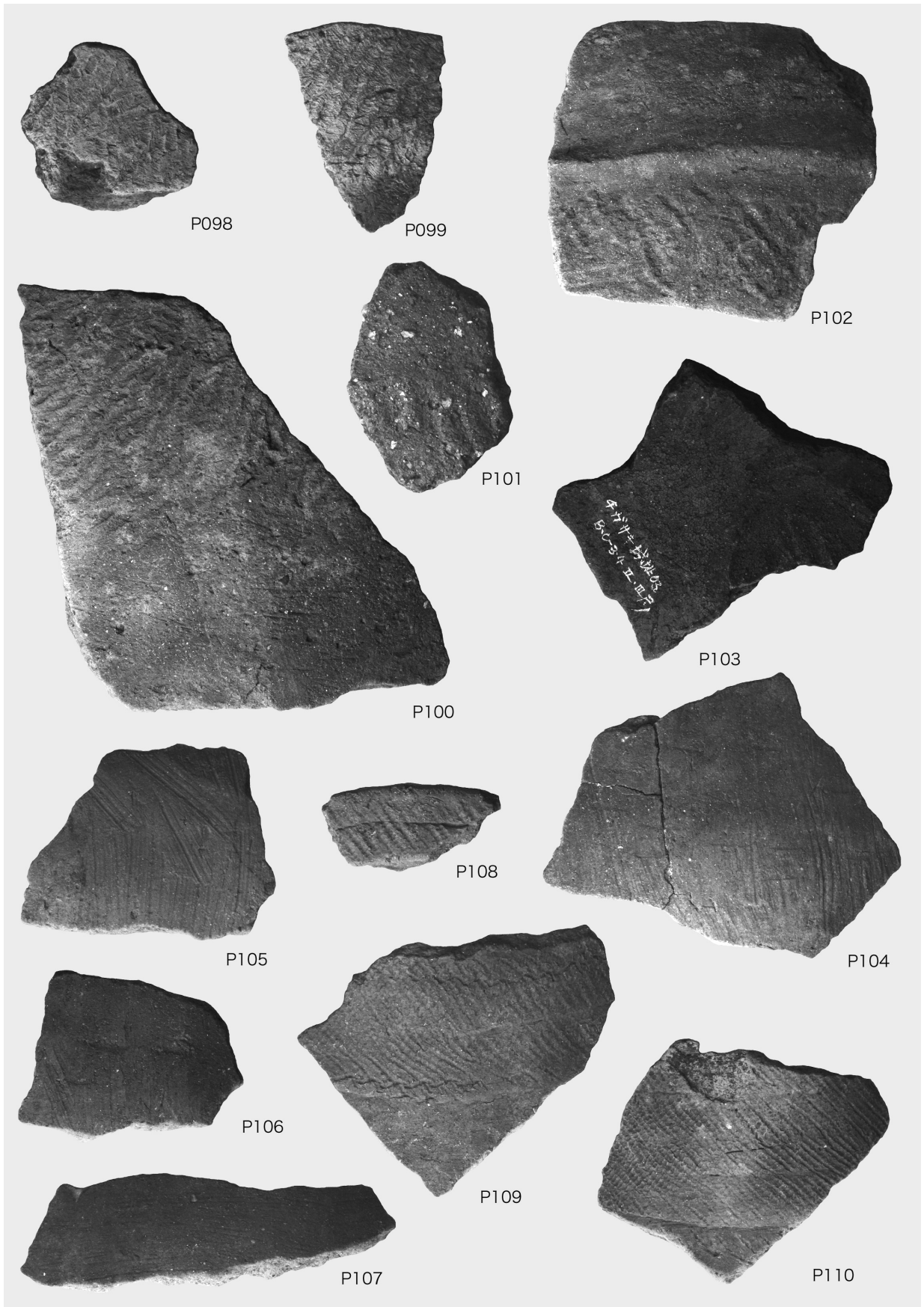


写真81 出土遺物9（平成15年度出土遺物9）

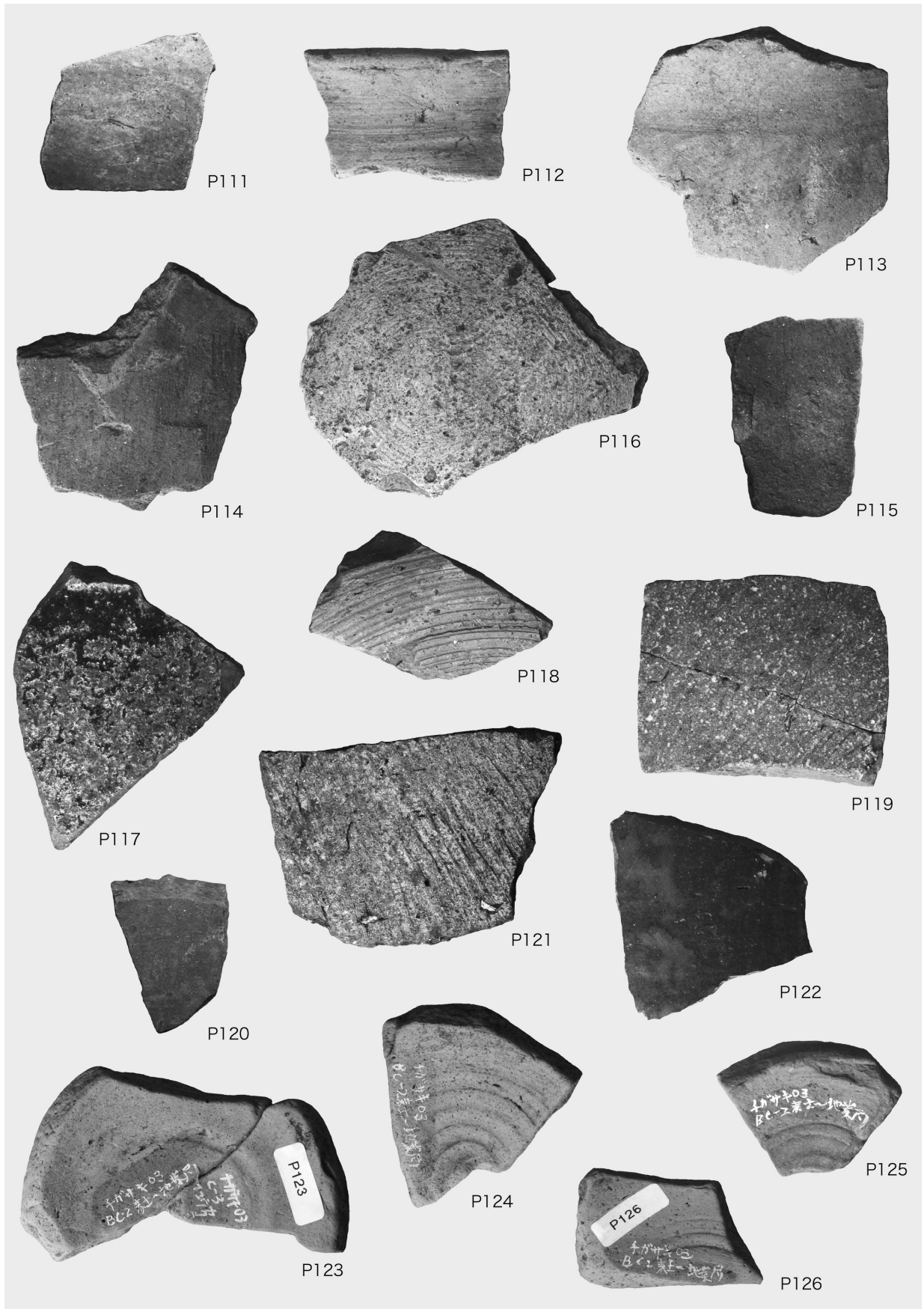


写真82 出土遺物10 (平成15年度出土遺物10)

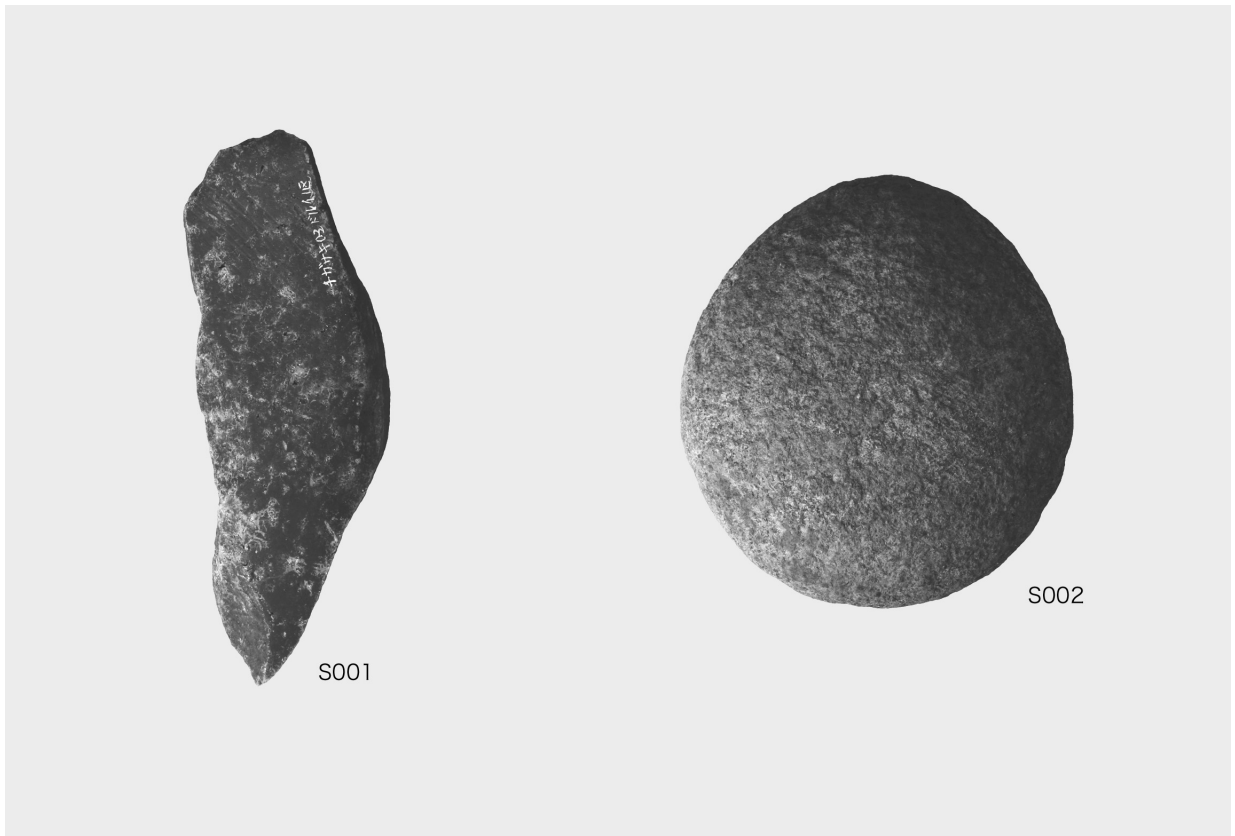


写真83 出土遺物11（平成15年度出土遺物11）

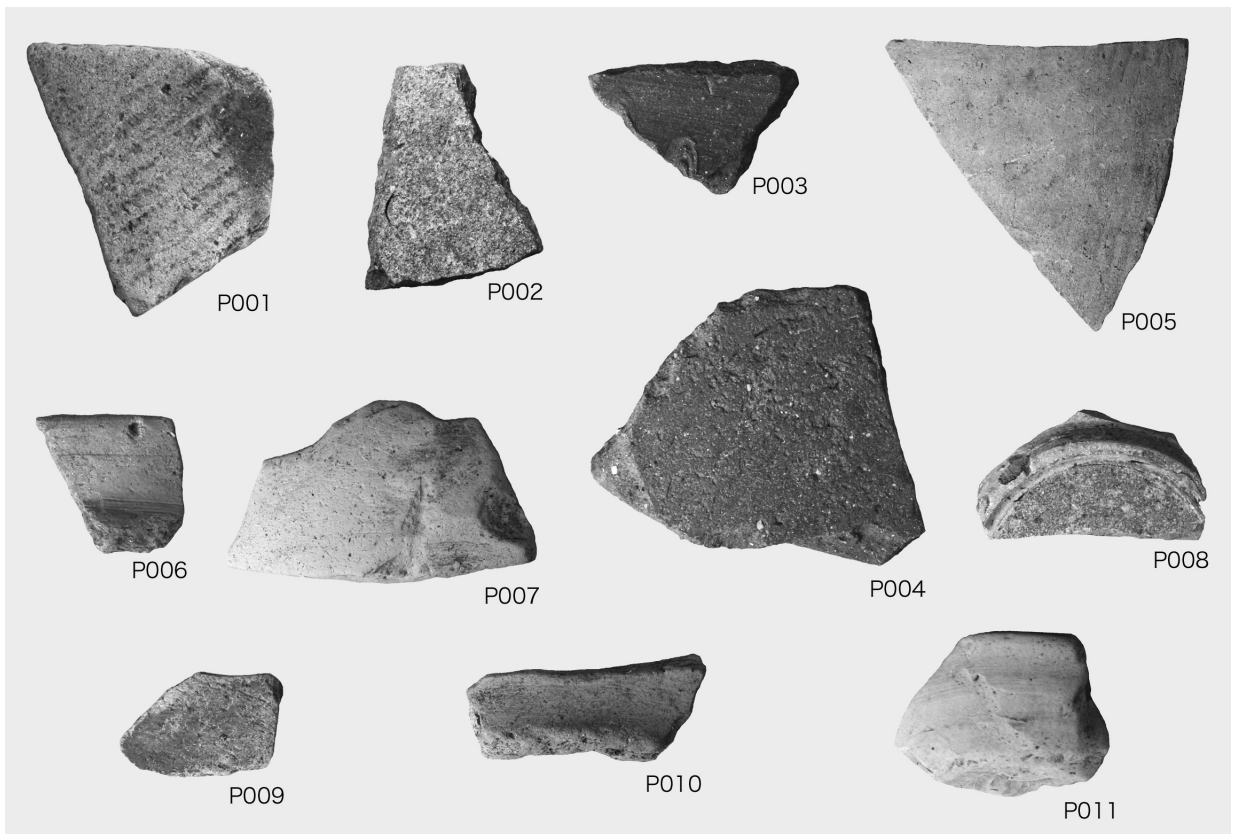


写真84 出土遺物12（平成17年度出土遺物1）

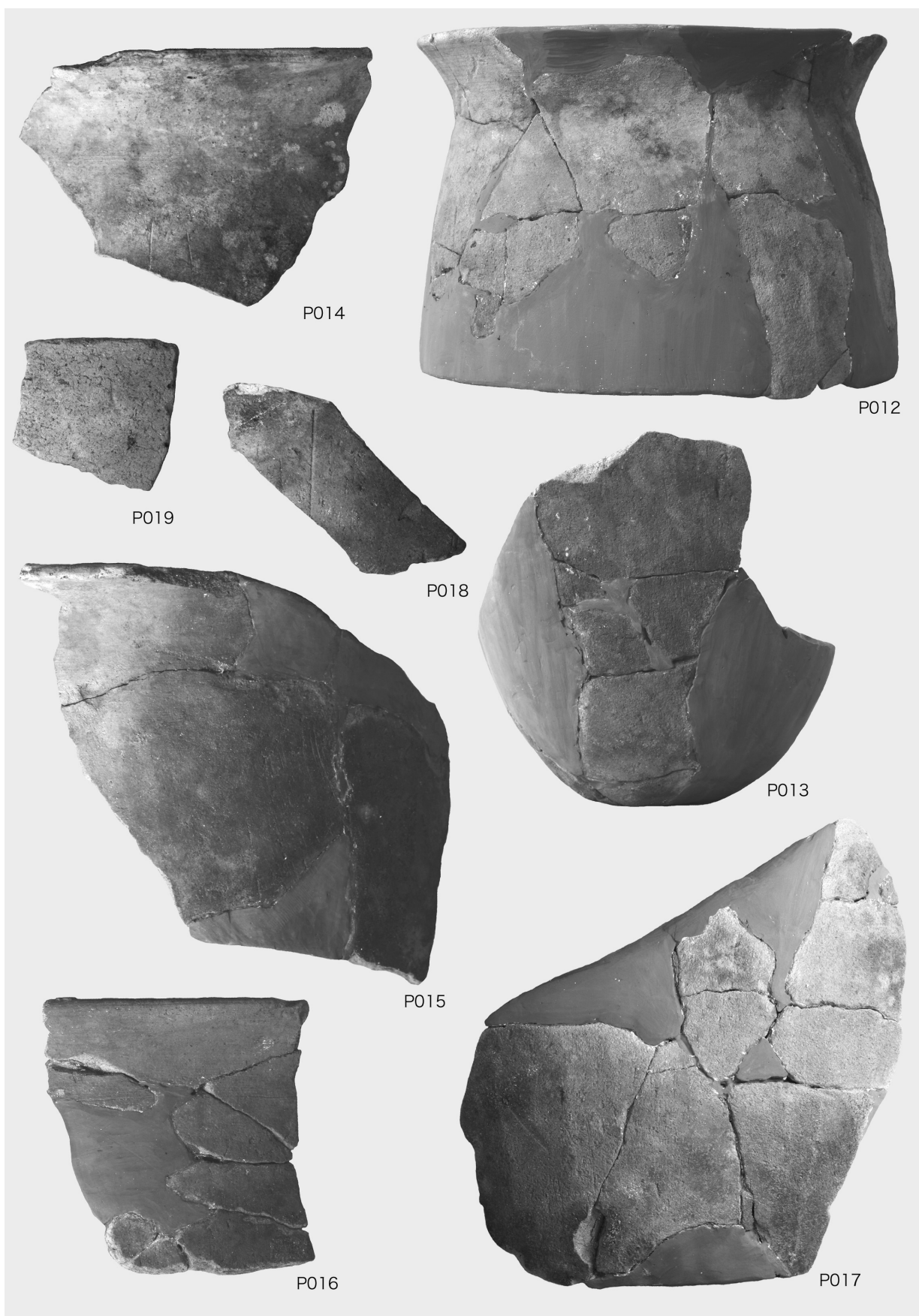


写真85 出土遺物13（平成17年度出土遺物2）

抄 録

ふりがな	ちがさきじょうしまいぞうぶんかざいほんはっくつちょうさほうこく		
書名	茅ヶ崎城址埋蔵文化財本発掘調査報告		
副書名	(仮称) 茅ヶ崎城址公園整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	鹿島 保宏・鈴木 重信		
編集機関	財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター		
所在地	横浜市都筑区勝田町760		
発行年月日	平成18年3月30日		
ふりがな	ちがさきじょうし	ふりがな	よこはましつづきくちがさきひがし
所収遺跡名	茅ヶ崎城址	所在地	横浜市都筑区茅ヶ崎東二丁目25
市町村コード	141186	遺跡番号	都筑区No.153
北緯	35° 32' 40"	東経	139° 34' 40"
調査期間	2003年6月30～2003年9月30日	調査面積	331㎡ (2003) 219㎡ (2005)
	2005年9月1日～2005年10月31日	調査原因	公園整備事業
所収遺跡名	茅ヶ崎城址		
種別	城跡・集落址	主な時代	中世
主な遺構	竪穴住居址3軒 (弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代) 竪穴状遺構1基 (弥生時代後期) 空堀2か所 (中世) 土塁2か所 (中世) 溝状遺構3条 (中世) 井戸址1基 (中世) 土坑8基 (縄文時代～中世) 道路状遺構1条 (中世) 硬化面3か所 (中世) ピット群2か所 (中世以前)	主な遺物	弥生時代後期 (甕形土器) 古墳時代後期土師器・須恵器 (甕形土器など) 平安時代 (甕形土器・坏形土器など) 中世 (かわらけ・陶器など) 石器 (磨石・砥石)
特記事項			

茅ヶ崎城址埋蔵文化財本発掘調査報告

— (仮称) 茅ヶ崎城址公園整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書 —

編集 / 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター

☎ 224-0034 横浜市都筑区勝田町760 TEL.045-593-2406

発行 / 横浜市教育委員会

発行日 / 平成18年3月30日

印刷所 / 株式会社ナデック